

財團法人八尾市文化財調査研究会報告64

- I 東郷遺跡（第34次調査）
- II 東郷遺跡（第37次調査）
- III 郡川遺跡（第2次調査）

1999年

財團法人 八尾市文化財調査研究会

# 八尾市文化財調査研究会報告64

- I 東郷遺跡（第34次調査）
- II 東郷遺跡（第37次調査）
- III 郡川遺跡（第2次調査）

1999年

財団法人 八尾市文化財調査研究会

## はしがき

大阪府の東部に位置する八尾市は、東部の生駒山地西麓から西部に広がる河内平野を占地しており、その豊かな自然環境のもとで、先人達が残した貴重な文化遺産が数多く遺存しています。

平野部では、古大和川水系のもたらした豊かな水量と肥沃な土壌を背景に、水稻耕作の初期段階にあたる弥生時代前期から集落が形成されています。一方、生駒山地西麓部においても、旧石器時代以降の数多くの文化財が残されており、特に、古墳時代後期には「高安古墳群」に代表される日本有数の古墳群を形成しています。さらに、歴史時代には陸路・水路を介して難波と大和を結ぶ大陸文化の中継としての役割を果しており、そのような交通至便な土地柄故に奈良時代後期には、本市南部の弓削郷に「西の京」が設けられています。

このように、本市には先人が残した貴重な文化遺産が数多く遺存しており、これらの文化財を開発による破壊から守り、後世に永く伝承させることが我々の大きな責務と認識しております。

今回、平成2年度に実施しました郡川遺跡(第2次調査)・東郷遺跡(第34次調査)と平成3年度に実施しました東郷遺跡(第37次調査)の発掘調査の整理が完了しましたので、これらをまとめ報告書として刊行することに致しました。

本書が地域の歴史を解明していく資料としてはもとより、埋蔵文化財の保護・普及のため広く活用されることを願ってやみません。

最後になりましたが、一連の発掘調査に対して御協力いただきました関係諸機関の皆様に深く感謝すると共に、発掘調査や整理作業に専念された多くの方々に心から厚く御礼申し上げます。

平成11年9月

財団法人 八尾市文化財調査研究会  
理事長 木山丈司

## 序

1. 本書は、財団法人八尾市文化財調査研究会が実施した発掘調査の報告書を収録したものである。
1. 本書に収録した報告は、下記のとおりである。
  1. 内業整理は各現地調査終了後に着手し、平成11年5月31日をもって終了した。
  1. 本書に収録したⅠ～Ⅲの調査報告の執筆および編集は原田昌則が行った。
  1. 本書掲載の地図は、大阪府八尾市発行の2,500分の1地形図(平成8年7月発行)・八尾市教育委員会発行の『八尾市埋蔵文化財分布図』(平成8年10月1日改訂)を使用した。
  1. 本書で用いた標高の基準は東京湾標準潮位(T.P.)である。
  1. 本書で用いた方位は、Ⅰが磁北、Ⅱ・Ⅲが座標北(国土座標第VI系)である。
  1. 遺構は下記の略号で示した。

掘立柱建物	-SB	井戸	-SE	土坑	-SK	溝	-SD	小穴	-SP
落ち込み	-SO	土器集積	-SW	不明遺構	-SX	自然河川	-NR		
1. 調査に際しては、写真・実測図等の記録とともに、カラースライドを作成している。広く活用されることを希望する。

## 目 次

### はしがき

### 序

### 八尾市埋蔵文化財分布図

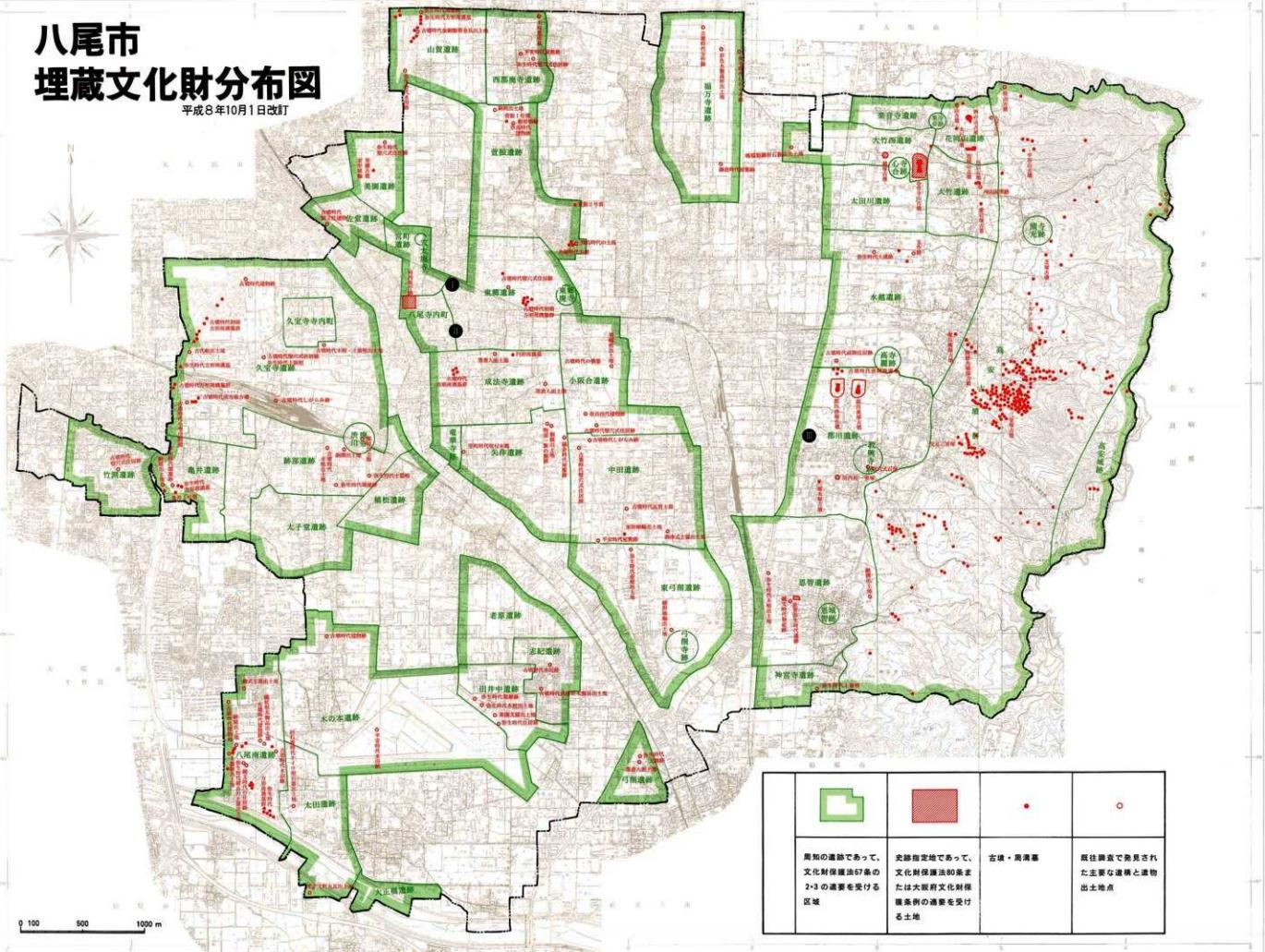
I 東郷遺跡第34次調査(T G90-34).....	1
II 東郷遺跡第37次調査(T G91-37).....	29

III 郡川遺跡第2次調査(K R90-2) .....	103
------------------------------	-----

### 報告書抄録

# 八尾市 埋蔵文化財分布図

平成8年10月1日改訂



		●	○
周知の遺跡であって、 文化財保護法57条の 2-1の適用を受ける 区域	史跡指定地であって、 文化財保護法80条ま たは大阪府文化財保 護条例の適用を受ける 土地	古墳・周溝墓	既往調査で発見され た主要な道路と遺物 出土地点

I 東鄉遺跡第34次調查 (TG90-34)

## 例　　言

1. 本書は、大阪府八尾市本町7丁目89-2番地他8筆で実施した店舗付共同住宅建設工事に伴う発掘調査の報告書である。
1. 本書で報告する東郷遺跡第34次調査(TG90-34)の発掘調査の業務は、八尾市教育委員会の指示書(八教社文第90号 平成2年10月19日)に基づき、財団法人八尾市文化財調査研究会が株朝日住建から委託を受けて実施したものである。
1. 現地調査は平成3年1月8日から平成3年1月23日(実働12日間)にかけて原田昌則を担当者として実施した。面積240m<sup>2</sup>を測る。調査においては岡田聖一・垣内洋平・田津農子・浜田千人・真柄竜が参加した。
1. 内業整理は、現地調査終了後、隨時実施し平成11年5月31日に完了した。
1. 本書作成に関わる業務は、遺物実測ー沢村妙子、図面トレースー北原清子・岸田靖子、遺物写真ー原田が行った。
1. 本書の執筆・編集は原田が行った。

## 本　文　目　次

第1章 調査に至る経過	1
第2章 調査概要	2
第1節 調査の方法と経過	2
第2節 基本層序	4
第3節 検出遺構と出土遺物	4
1) 検出遺構	4
2) 遺構に伴わない遺物	14
第4節 出土遺物観察表	16
第3章 まとめ	20
1) 調査地周辺の小字名と出土瓦について	20
2) 八尾城の所在地について	21
3) 調査地周辺における平安時代後期以降の集落推移について	26

## 挿　図　目　次

第1図 調査地周辺図	1
第2図 検出遺構平面図	3
第3図 SB-1 平断面図	4

第4図	SE-1 平断面図	5
第5図	SE-2 平断面図	5
第6図	SE-1 出土遺物実測図	6
第7図	SE-2 出土遺物実測図	7
第8図	SE-3 平断面図	8
第9図	SE-3 出土遺物実測図	8
第10図	SE-4 平断面図	9
第11図	SE-4 出土遺物実測図	9
第12図	SE-5 平断面図	10
第13図	SE-5 出上井戸側用瓦実測図	11
第14図	SK-1 出土遺物実測図	11
第15図	SD-3 出土遺物実測図	12
第16図	SD-3・4・7 断面図	12
第17図	SD-7 出土遺物実測図	13
第18図	第2層出土遺物実測図	15
第19図	調査地周辺出土屋瓦拓影	20
第20図	八尾城古図	21
第21図	調査地周辺小字名	22

## 表 目 次

第1表	小穴法量表	14
第2表	八尾城および常光寺関連年表	25-26

## 図 版 目 次

図版 一	調査地全景	図版 五	SE-1 出土遺物
	SE-2 檢出状況	図版 六	SE-1、SE-2 出土遺物
図版 二	SE-1 檢出状況	図版 七	SE-2 出土遺物
	同 上 井戸側検出状況	図版 八	SE-3、SE-4、SE-5 出土遺物
図版 三	SE-4 檢出状況	図版 九	SD-3、SD-7、第2層出土遺物
	同 上 井戸側検出状況		
図版 四	SE-5 檢出状況		
	同 上 井戸側検出状況		

# 第1章 調査に至る経過

東郷遺跡は、旧大和川の主流であった長瀬川と玉串川に挟まれた低位沖積地の標高8~9mに展開する弥生時代中期~鎌倉時代に至る複合遺跡である。現在の行政区画では、八尾市中央部の本町1~7丁目、北本町2丁目、東本町1~5丁目、光町1~2丁目、桜ヶ丘1~3丁目、莊内町1~2丁目一帯の東西1.3km、南北0.9kmがその範囲とされている。東郷遺跡周辺では南東に小阪合遺跡、南に成法寺遺跡、西に八尾寺内町遺跡・宮町遺跡、北に萱振遺跡が位置しており、これらの遺跡群は比較的安定した地形的条件を背景として、弥生時代中期以降に成立したもののが大半を占めている。



第1図 調査地周辺図 (T G—東郷遺跡、Y C—八尾寺内町遺跡、S H—成法寺遺跡)

東郷遺跡は、昭和46年に八尾市東本町2丁目の光明寺東側道路で行われた水道工事に際して、奈良時代の墨書き人面土器が出土したことに端緒を発している。その後、発掘調査により遺跡の実態が明らかにされるのは、昭和55年に実施された近鉄大阪線の八尾駅(光町1丁目)移転以降のことと、駅前の北部を中心として急速な開発行為が顕在化したことによるものである。さらに近年においては、近鉄八尾駅北部から開発行為が周辺に拡大する傾向が顕著で、発掘調査件数も増加しており、八尾市域の遺跡群のなかで最も発掘調査件数が多く、遺跡の実態が比較的明らかな遺跡の一つと認識されている。本調査を実施した平成3年1月以降も継続的に、大阪府教育委員会・八尾市教育委員会・当調査研究会により発掘調査が実施されており、東郷遺跡が弥生時代中期～鎌倉時代に至る複合遺跡であることが確認されている。なかでも、近鉄八尾駅の北部を中心とする古墳時代初頭(庄内式期)～古墳時代後期に至る集落の動態や、遺跡の東部で検出された飛鳥時代後半(7世紀中葉)の創建とされる東郷廃寺の存在は特筆に値するものである。(なお、地理・歴史的環境は本書33～36頁を参照)

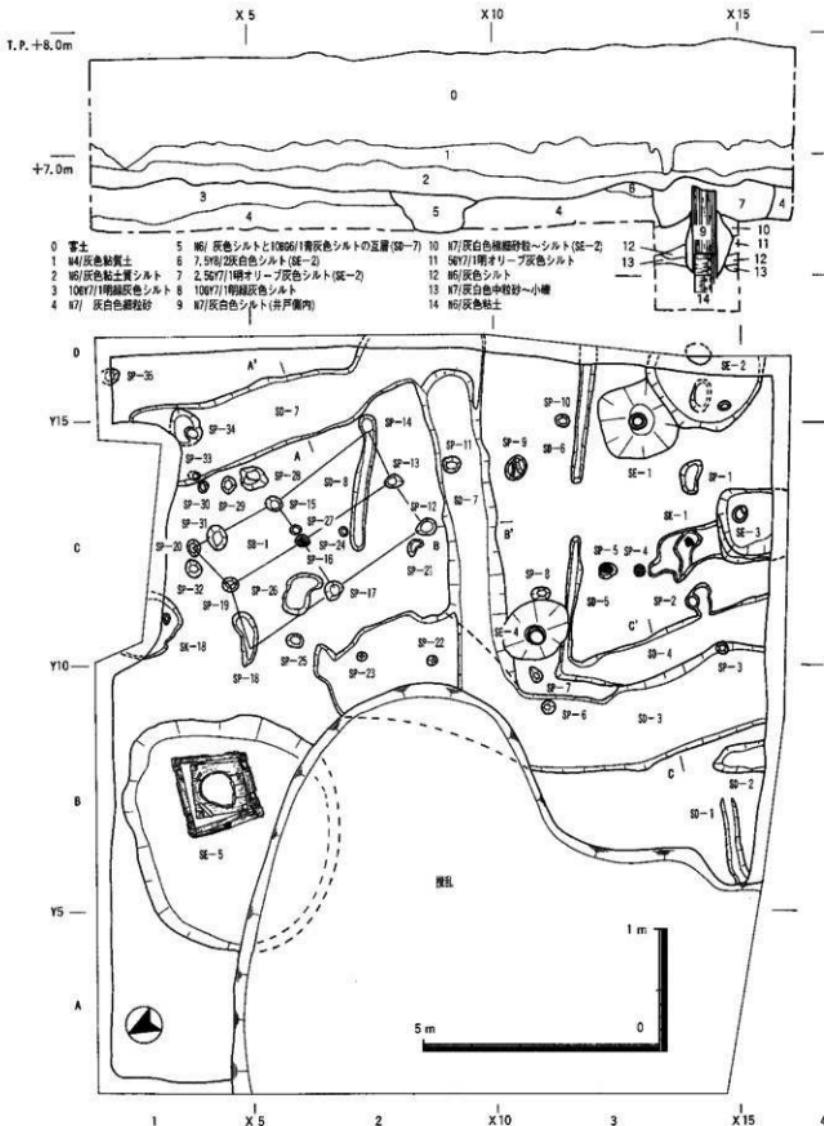
このような情勢下、遺跡範囲の西部にあたる八尾市本町7丁目89-2番地他8筆で店舗付共同住宅の建設を行う旨の届出が(株)朝日住建から市教育委員会文化財課へ提出された。この地点一帯は、南北朝の動乱の渦中にとなった八尾城を西郷説とした場合、八尾城内にあたる他、南北朝の動乱終息後の元中三年(1386)に建立された常光寺が西接する。また、南東約200m地点の八尾市本町7丁目39-1で平成元年度に当調査研究会が実施した第30次調査(TG89-30)では、平安時代後期～鎌倉時代前半の集落が検出されている。このように近接する位置に中世寺院が存在することや既往調査結果から、市教育委員会では申請地において遺構・遺物を包藏する可能性が高いと判断し、平成2年10月17日に遺構確認調査を実施した。その結果、現地表下1.2～1.9m付近で鎌倉時代の遺物を含む遺物包含層の存在が確認された。これらの調査結果から、当該地の掘削工事に際して発掘調査が必要であると判断し、事業者と協議を重ねた結果、工事で遺跡が破壊される部分を対象として、発掘調査を実施することが両者間で合意された。以上の経緯を踏まえ、発掘調査を実施するに至ったもので、八尾市教育委員会・事業者・(財)八尾市文化財調査研究会の三者協定に基づき、(財)八尾市文化財調査研究会が事業者から委託を受けて発掘調査を行うことになった。現地発掘調査は平成3年1月8日～平成3年1月23日(実働12日)で、調査面積は240m<sup>2</sup>を測る。

## 第2章 調査概要

### 第1節 調査の方法と経過

今回の発掘調査は店舗付共同住宅建設に伴うもので、建物の構築予定地に東西約16m、南北約14mの調査区を設定した。調査地の地区割りについては、調査地の北西隅に設置した任意の基準点(X 0・Y 0)を基点として東西20m、南北20mにわたって設定した。一区画の単位は5m四方で、東西方向はアルファベット(西からA～D)、南北方向は算用数字(北から1～4)で示し、地区名の表示は1 A地区～4 D地区と呼称した。地点の表示には、東西線(X 0～X 20)・南北線(Y 0～Y 20)の交点の数値を使用した。掘削に際しては、地表下0.9mまでを機械により掘削した

I 東郷遺跡第34次調査 (T G90-34)



第2図 棟出構造平面図 (S=平図・断面水平 1/100・断面垂直 1/40)

後、以下0.3mについては層理に従って人力掘削を行い遺構・遺物の検出に努めた。その結果、調査区の中央部を境として西側の大半が擾乱による削平を受けていたが、東部では地表下1.2m前後(標高6.7m前後)に存在する第3層・第4層上面で平安時代後期～鎌倉時代後期に比定される掘立柱建物1棟(SB-1)、井戸4基(SE-1～SE-4)、土坑2基(SK-1・SK-2)、溝8条(SD-1～SD-8)、小穴35個(SP-1～SP-35)のほか、近代の井戸1基(SE-5)を検出した。

## 第2節 基本層序

調査地の中央部から西側は擾乱のため堆積土層が不明瞭であったが、東部を中心に存在した5層(第0層～第4層)を抽出して基本層序とした。第1層～第3層までは比較的安定した水平堆積が認められたが、第4層以下では河川に起因する水成層の堆積が見られた。

第0層 客土。層厚0.7～0.8m。上面の標高はT.P.+7.9m前後。

第1層 N4/ 灰色粘質土。旧耕土。層厚0.15～0.3m。

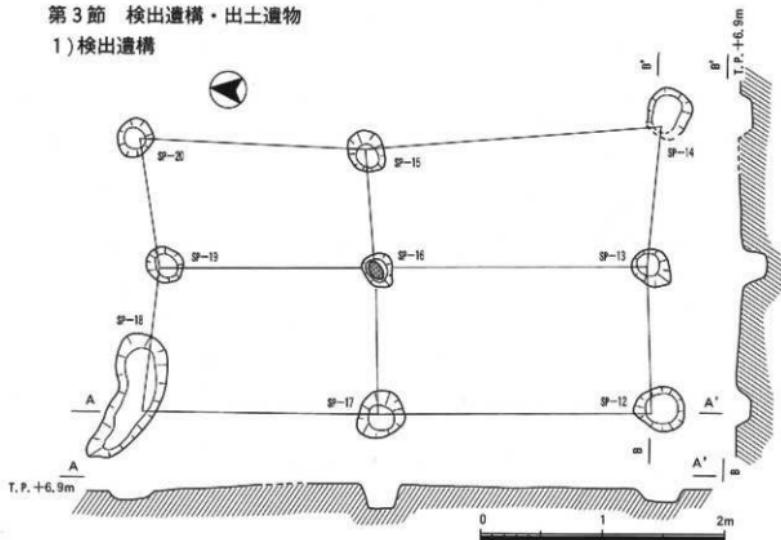
第2層 N6/ 灰色粘土質シルト。層厚0.15～0.25m。平安時代後期～鎌倉時代の遺物を含む。

第3層 10GY7/1明緑灰色シルト。層厚0.1～0.35m。調査区の北部のみ存在。上面が遺構検出面。

第4層 N7/ 灰白色細粒砂。層厚0.2m以上。南部では上面が遺構検出面。

## 第3節 検出遺構・出土遺物

### 1) 検出遺構



第3図 SB-1 平断面図

## 掘立柱建物 (S B)

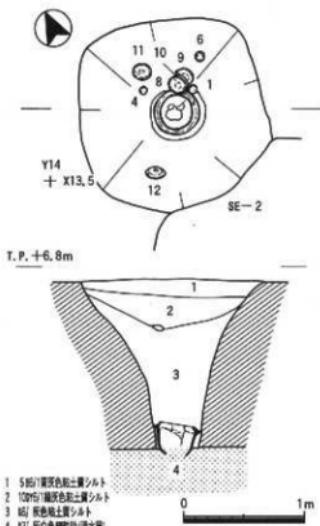
## S B - 1

調査区北東部の1・2C地区で検出した。S P-12~S P-20で構成されている。東西2間(2.4m)×南北2間(4.3m)を測る。主軸方向はN-5°-Wで、床面積は10.3m<sup>2</sup>を測る。掘立柱建物を構成する柱穴は、S P-18を除けば上面の形状が円形を呈するものが大半で、径27~43cm・深さ7.9~26.1cmを測る。なお、S P-16には根石が遺存していた。柱穴内の埋土は青灰色シルトである。遺物は出土していない。建物の帰属時期については、掘立柱建物を構成する小穴群からの出土遺物が皆無であるため判然としないが、建物の東側および南側を画するSD-7に関連するものと考えれば12世紀前半が想定される。しかし、建物とは主軸をやや異にする点や当該期の遺構がこの遺構のみである点から、建物の南部で検出された13世紀前半~後年に比定される遺構群に関連したものとみて大過ないものとおもわれる。

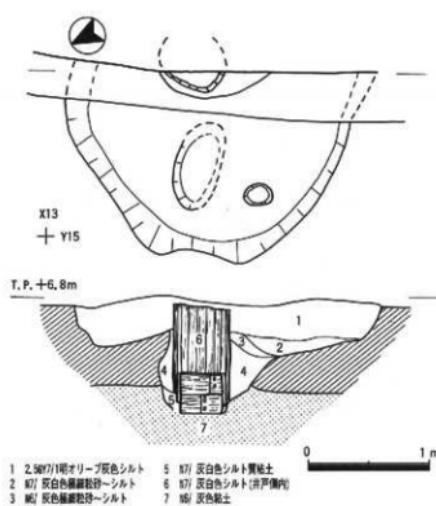
## 井戸 (S E)

## S E - 1

調査区南東部の3C・D地区で検出した。東西幅1.5m、南北幅1.5m、深さ1.42mを測るもので、南東部はS E - 2に切られている。上面が隅丸方形、断面が壺鉢状を呈する掘形の中央部に、底部を欠いた土釜を置き井戸側とするもので、最下段のみを検出した。埋土は上層から1層青灰色粘土質シルト・2層緑灰色粘土質シルト・3層灰白色粘土質シルトが堆積している。遺物は各層から出土したが、特に2層下部からは瓦器椀、土器小皿の完形が数個体集中して出土している。出土遺物の特徴から、井戸の存続時期は13世紀前半~中葉が推定される。

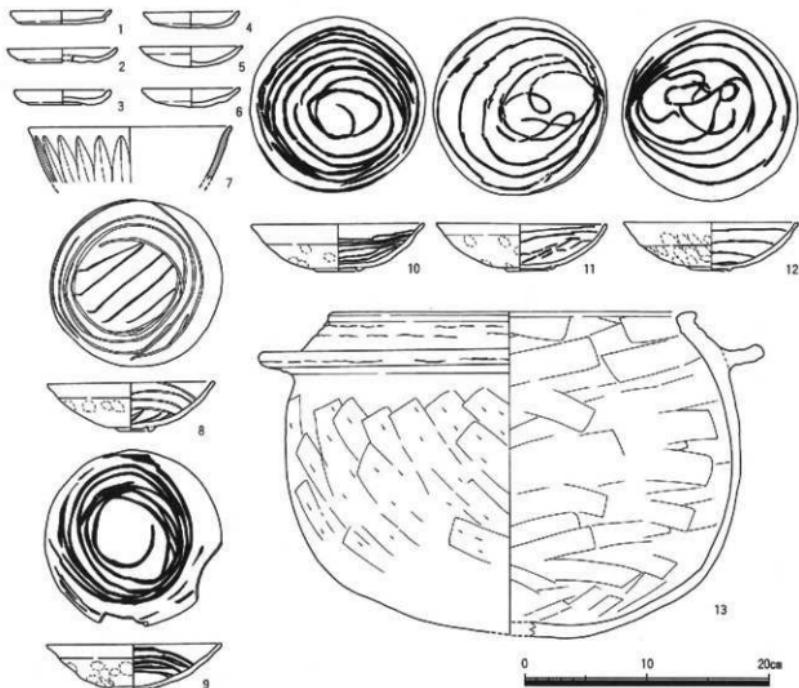


第4図 S E - 1 平断面図



第5図 S E - 2 平断面図

そのうち、図化し得たものは13点(1~13)である。その内訳は土師器小皿5点(1~5)・土釜1点(13)、瓦器碗5点(8~12)・瓦器小皿1点(6)、青磁碗1点(7)である。土師器小皿(1~5)は、口径8cm前後、器高1~1.5cmを測るもので、(1~5)が完形品および完形品に近く、他は1/2~1/4程度残存している。形態的には、底部に丸味を持つ(5)を除けば、いずれも底部が偏平で浅い器形を有している。器面調整においては5点ともに、口縁部内外面がヨコナデ、底部内面がナデ、底部外面が未調整である点で共通している。(6)は瓦器小皿で口径8.0cm、器高1.5cmを測る完形品である。器形の偏平化が進行した段階のもので、調整等もやや雑である。内面の炭素付着が一部を除いて不完全であるほか、底部外面の約半分に油痕が認められる。(7)は体部外面に鎧蓮弁を有する龍泉窯系青磁碗である。横田・森田氏分類の龍泉窯系青磁I類-5に比定されるもので、13世紀中葉の所産とされている。瓦器碗は5点(8~12)図化した。いずれも和泉型に分類されるもので、(9)が口縁部の一部を欠く以外はすべて完形である。形態的には、口径に比して器高が低いもので、口径13.6~14.3cm、器高3.7~4.1cmを測る。高台は形骸化した雑な作りで、(9・11・12)については、粘土紐が全周せず途切れている。見込み部分のヘラミガキについて

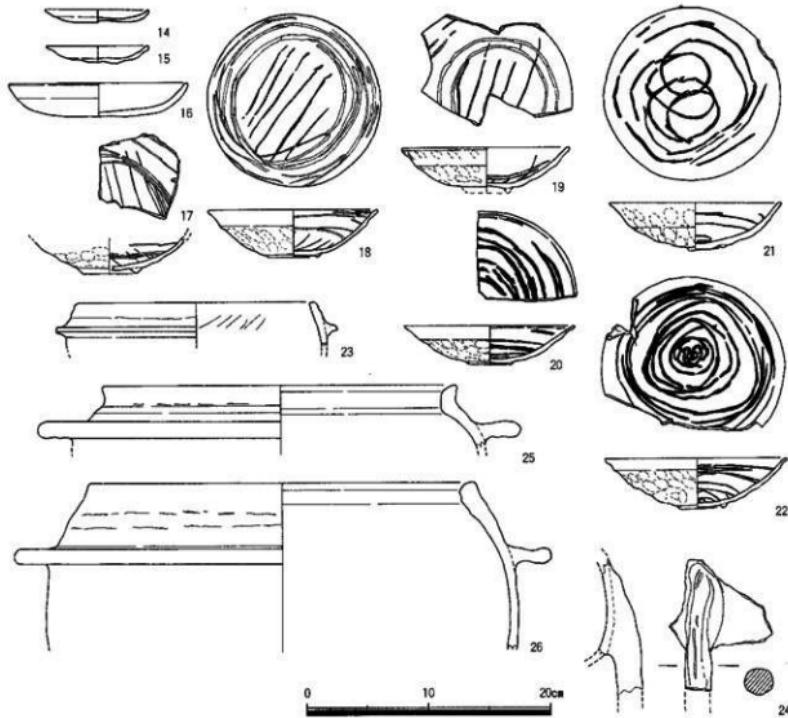


第6図 SE-1出土遺物実測図

では、(8)が平行線状、(9・10)が渦巻状、(11・12)が連結輪状である。尾上編年のⅢ-3期(13世紀前半)に比定される。(13)は井戸側の最下段に使用されていた土師器土釜で、底部を欠く以外は完存している。口径29.6cm、器高26.4cm、鏃径41.4cmを測る。体部外面にヘラケズリ調整が施されているもので、森島編年で河内産とされるA型式5(13世紀中葉)に対応するものである。

## S E - 2

調査区の南東隅で検出した。北西部はS E - 1 を切っている。東半分が調査区外のため全容は不明である。検出部分で南北幅は2.3m、深さ0.95mを測る。井戸側は最下段から2段目までは曲物を使用し、さらに上部は1・2段目の曲物外側に幅0.06m、長さ0.75mを測る板材18枚を縦位に立て桶状の井戸側としている。掘削内の埋土は上層から1層明オリーブ灰色シルト・2層灰白色極細粒砂～シルト・3層灰色極細粒砂～シルト・4層明緑灰色シルト・5層灰白色シルト質粘土で井戸側内は6層灰白色シルトが堆積している。遺物は1層および井戸側内の6層から土器類が少量出土している。そのうち図化したものは、13点(14～26)である。その内訳は土師器小皿



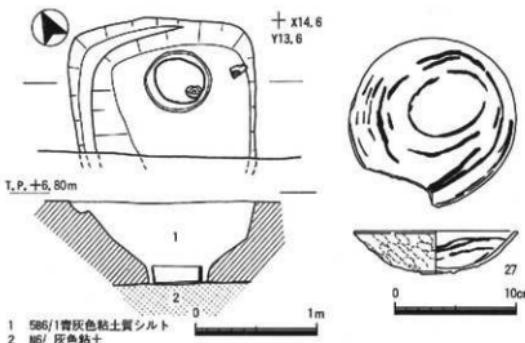
第7図 S E - 2 出土遺物実測図

1点(14)・中皿1点(16)・土釜2点(25・26)、瓦器碗6点(17~22)・小皿1点(15)・足釜2点(23・24)である。土器器小皿(14)は水平な底部から口縁部が斜上方に短く伸びるもので、口径8.4cm、器高1.1cmを測る。瓦器小皿(15)は完形品で、口径8.4cm、器高1.3cmを測る。口縁部外面は強いヨコナデにより外反気味に伸びる。(16)は土器器中皿で約1/4程度が残存している。瓦器碗は完形品を含む6点(17~22)を図化した。数値的には口径13.7~14.9cm、器高3.1~4.0cm程度のものと推定される。成形調整技法においては、口縁部外面がヨコナデで、以下の体底部は指頭圧成形、内面では体底部にナデ調整が施されている他、形骸化した高台部を有する点においては共通点が認められた。見込み部分のヘラミガキでは、平行線状(17~19)、連結輪状(21)、渦巻状(20・22)に区別される。(18~20・22)が尾上編年のⅢ~Ⅳ期(13世紀前半)、(21)がⅣ~Ⅰ期(13世紀中葉)に比定される。(23・24)は瓦器足釜で(23)が口縁部、(24)が底部および足部接続部分にあたる。土器器土釜は2点(25・26)があり、形態的には鋸部分より頸部が内傾し、口縁部付近で角度を上方に変えた後、端部が内側に内傾する(25)と頸部が大きく伸び、口縁部付近でわずかに外反するもので、端部は内傾してやや幅広の面を有する(26)に区別される。森島編年による中河内地域の羽釜分類によれば、13世紀後半の所産とされる河内産A型式6と本例の(26)とが共通するようで、(25)については(26)より型的にはやや先行するものと推定されよう。出土遺物はやや時期幅が認められるが、井戸の存続時期は13世紀中葉~後半が推定される。

### S E - 3

S E - 2 の1.2m西側地点で検出した。北西部がS K - 1 を切り、南部は調査区外のため全容は不明であるが、検出部分からみて隅丸方形の掘形を呈したものと推定される。検出部分で東西1.5m、深さ0.65mを測る。井戸側は曲物が使用されており、掘形の北東部分に最下段の1段のみが遺存していた。掘形内の埋土は青灰色粘土質シルト1層で充填されている。

遺物は尾上編年Ⅳ~Ⅰ期(13世紀中葉)に比定される瓦器碗が1点(27)出土している。(27)は口縁部の一部を欠く以外は全容を知ることができた。口径13.6cm、器高3.4cmを測る。全体にやや雑な作りで、口縁部外面のヨコナデ調整も明瞭でない。高台は退化しており、わずかに粘土紐を馬蹄形に巡らす程度のものである。内外面共に炭素付着が不完全である。なお、見込み部分に炭化物が確認でき、本来の目的と違う使用方法が取られていた可能性がある。

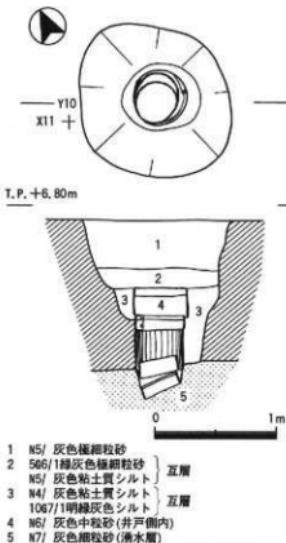


第8図 S E - 3 平断面図

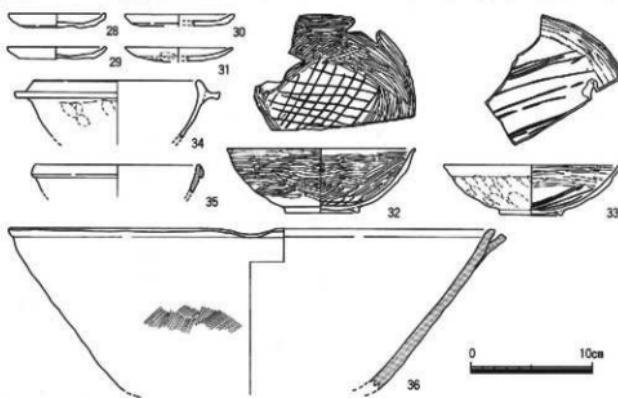
第9図 S E - 3 出土遺物

## S E - 4

S E - 3 の北3.5m地点で検出した。北部で S D - 7、南部で S D - 5 を切っている。掘形の上面形状が南北方向に長い楕円形を呈するもので、東西幅1.2m、南北幅1.35m、深さ1.45mを測る。井戸側は最下段から2段目までが曲物、3段目が桶で4段目5段目が曲物を使用している。掘形内の埋土は上層から1層灰色極細粒砂・2層緑灰色極細粒砂と灰色粘土質シルトの互層・3層灰色粘土質シルトと明緑灰色シルトの互層が水平堆積しており、最下層は湧水層である灰色細粒砂に達している。遺物は1層および2層から土師器小皿・瓦器碗等の小破片が少量出土している。そのうち、図化し得たものは9点(28~36)である。土師器小皿4点(28~31)、瓦器碗2点(32・33)・足釜1点(34)、白磁碗1点(35)、陶器こね鉢1点(36)である。土師器小皿(28~31)はいずれも1/4程度の小片である。水平な底部から口縁部が斜上方に伸びた後、端部が上方につまみ上げられる(28)と口縁部が斜上方に伸び端部がわずかに丸味を持つ(29・30)のほかやや丸味のある底部から口縁部が斜上方に伸びる(31)がある。瓦器碗は深い楕形を呈し、体部外面に分割のヘラミガキ、見込み部分に格子状ヘラミガキを行なう(32)と器高が低く、体部外面のヘラミガキが省略され、見込み部分に平行線状ヘラミガキを行なう(33)がある。2点は明らかに型式差が認められるもので、前者が尾上編年II-1期(12世紀前半)、後者が尾上編年III-3期(13世紀前半)に比定される。(34)は水平方向に伸びる鋸部を貼付けたもので、現状では土師質焼成であるが、形態からみて3本の脚が付く瓦器足釜と推定される。

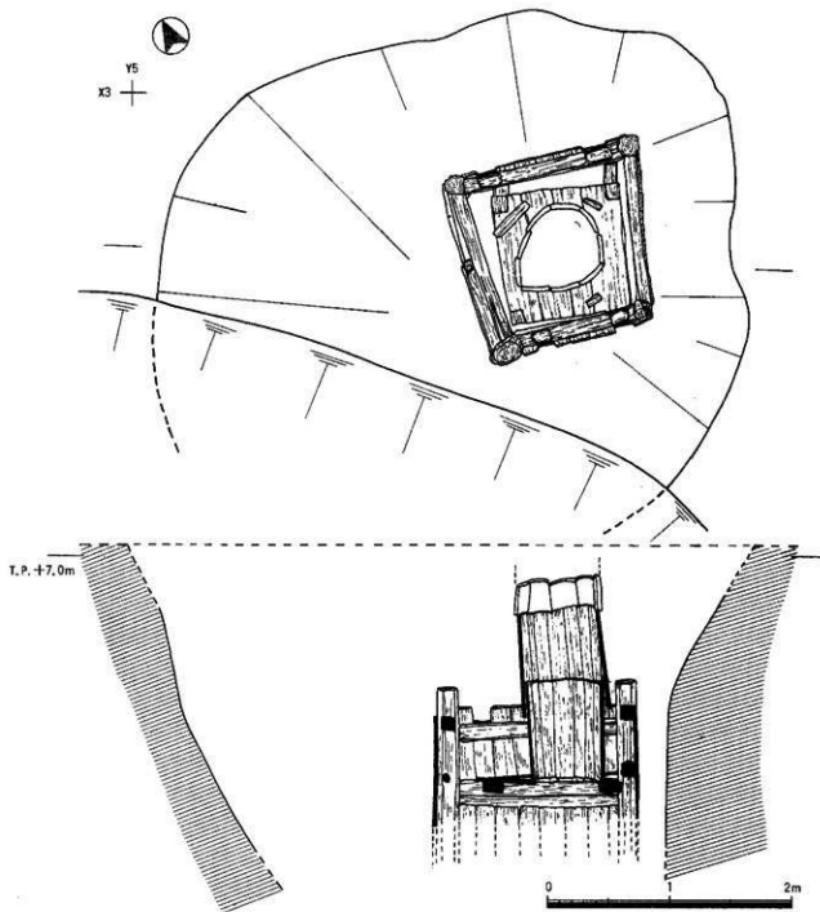


第10図 S E - 4 平面図



第11図 S E - 4 出土遺物実測図

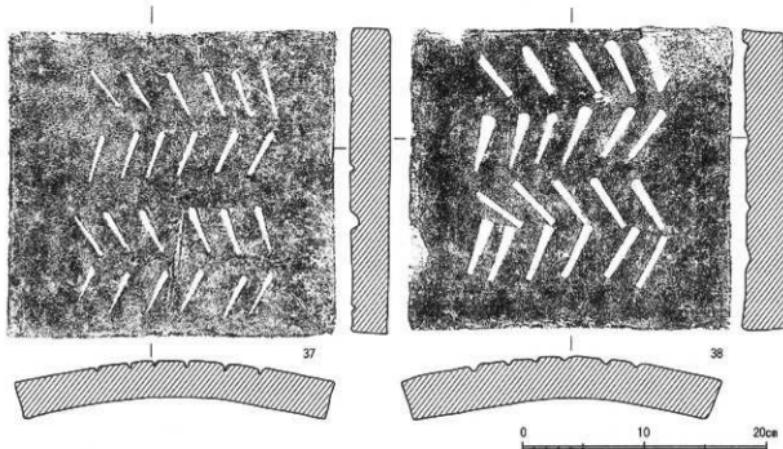
(35)は玉縁状口縁を有する白磁碗である。釉は灰色氣味の白色で、胎土中に黒い微細粒が含まれている。横田・森田氏編年の白磁IV類に比定されるもので、11世紀中葉～12世紀初頭の所産とされている。(36)は流し口を有する備前焼こね鉢で、復元口径39.6cmを測る。内面は茶褐色で全面に胡麻を被っており、焼成が重ね焼でないことを示している。問壁編年のI期(12世紀末～13世紀初頭)に比定されるもので、八尾市域においてこの時期の備前焼陶器出土の初例となろう。一部(32・35)のように古い時期のものが含まれているが、他の遺物からみて井戸存続時期は13世紀前半が推定される。



第12図 S E - 5 平断面図

## S E - 5

調査区北西部の1・2AB地区で検出した。掘形の南部が搅乱されており全容は不明であるが、遺存部分からみて東西方向に長い楕円形を呈するものと推定される。東西幅4.8m、深さ2.0m以上を測る。井戸側は掘形の東部に設置されており、最下部に方形の木枠(縦板組み横桟どめ)幅1.68m、長さ1.1m以上を置き、さらに上部には径0.68m、長さ0.8mを測る桶を二段積み重ねた後、上部に井戸側用瓦を9枚で一周させ径0.7mを測る井戸側としている。掘形内埋土は青灰色粘土のブロックを多量に含む褐色砂質シルトの單一層である。なお、井戸側内部からは井戸側用瓦が数枚出土していることから、本来は井戸側用瓦を二段以上重ねたものであったと推定される。井戸側用瓦(37・38)2点を図化した。法量は、外幅26.2~26.3cm、内幅24.2~24.6cm、高さ24.4~24.8cm、厚さ3.0~3.6cmを測る。凸面には楔形の刻み目が施されている。凹面および端面はナデ調整が行われている。構築時期は明治時代と推定される。

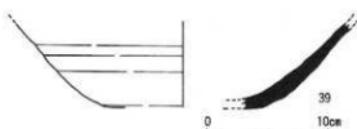


第13図 S E - 5 出土井戸側用瓦実測図

## 土坑(S K)

## S K - 1

調査区南東部の3C地区で検出した。南部はS E - 3に切られている。上面の形状は不定形を呈するもので、東西幅1.0m、南北幅1.6m、深さ0.25m前後を測る。埋土は青灰色粘質シルトの單一層である。遺物は土師器小皿、須恵器鉢が少量出土した。そのうち図化し得たものは須恵器鉢1点(39)である。(39)は東播系の須恵器鉢の小片である。



第14図 S K - 1 出土遺物実測図

## SK-2

調査区の北部の1C地区で検出した。北部が調査区外に至るため上面の形状や数値は明確でない。埋土は青灰色粘質シルトの単一層である。遺物は出土していない。

## 溝(SD)

### SD-1

調査区の南部の3・4B地区で検出した。東西方向に伸びるもので、検出長1.8m、幅0.3m、深さ0.07mを測る。埋土は青灰色砂質シルトの単一層である。遺物は出土していない。

### SD-2

SD-1の東0.5mで検出した。南北方向に伸びるもので、検出長1.1m、幅0.7m、深さ0.05m前後を測る。埋土は青灰色砂質シルトの単一層である。遺物は出土していない。

### SD-3

SD-2の東で検出した。南北方向に伸びるもので、南東部ではSD-4、北部ではSD-7の上部を切っている。検出長9.2m、幅1.7m前後、深さ0.1m前後を測る。埋土は青灰色砂質シルトの単一層である。遺物は13世紀中葉に比定される瓦器椀、土師器小皿・土釜、屋瓦の小片が少量出土している。図化し得たものは土師器小皿4点(40~43)である。土師器小皿(40~43)は、ほぼ水平な底部から口縁部が斜上方に伸びるもので、端部は一様に丸味を持って終わる。口径7.2~8.6cm、器高0.8~1.2cmを測る。色調はいずれも淡褐色系で、胎土中に1~2mm程度の長石粒が含まれている。

### SD-4

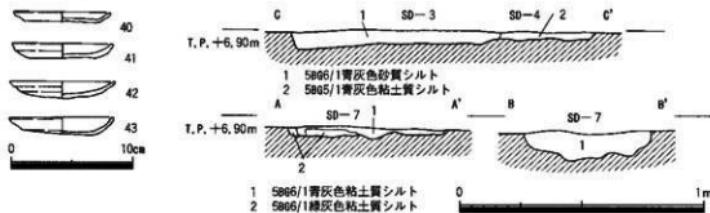
SD-3の南東部を切り、南北方向に伸びるもので北部はSD-5と合流している。検出長4.3m、幅0.35~1.1m、深さ0.1m前後を測る。埋土は青灰色粘土質シルトの単一層である。遺物は出土していない。

### SD-5

東西方向に伸びるもので西端はSD-4と合流している。全長2.5m、幅0.3m前後、深さ0.1m前後を測る。埋土は青灰色砂質シルトの単一層である。遺物は出土していない。

### SD-6

SD-5の東部で検出した。東西方向に伸びるもので、検出長2.5m、幅0.25m前後、深さ0.08mを測る。埋土は青灰色砂質シルトの単一層である。遺物は出土していない。



第15図 SD-3 出土遺物実測図

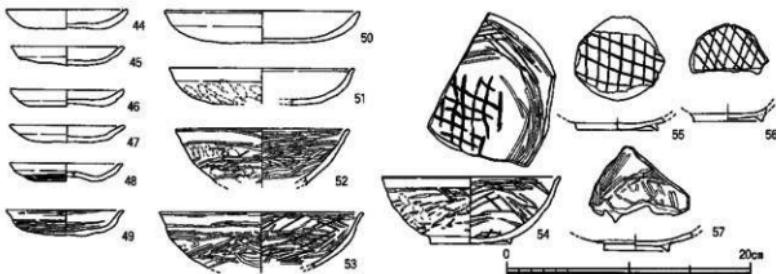
第16図 SD-3・SD-4・SD-7 断面図

## SD-7

調査区の北部から西部にかけて検出した。逆「く」の字状を呈するもので、検出長は東西方向が7.0m、南北方向が6.6mを測る。深さは南北方向で0.1m前後、東西方向で0.2m前後を測る。埋土は青灰色粘土質シルト・緑灰色粘土質シルトである。遺物は土師器小皿・土釜、瓦器椀・瓦器小皿等が少量出土した。図化し得たものは14点(44~57)である。その内訳は土師器小皿5点(44~48)・中皿2点(50・51)、瓦器椀6点(52~57)・瓦器小皿1点(49)である。土師器小皿(44~48)は(45)が完形品で他は1/4~1/2が残存している。口径9.1~10.0cm、器高1.3~1.4cmを測る。(46・48)以外はほぼ水平な底部を有しており、口縁部は斜上方に短く伸びている。色調は(44・45・47)が淡橙色系、(46・48)が淡褐色系で、胎土はいずれも精良なものが使用されている。土師器中皿(50・51)は口径15.0cm、器高2.8cmを測る。水平な底部から口縁部が斜上方に伸びるもので、端部が丸味を持って終わる(50)と口縁部上半で小さく外反して端部が尖り気味に終わる(51)がある。色調は前者が明橙色、後者が灰白色で、胎土は双方とも精良である。瓦器椀(52~57)はいずれも小片で不明な点があるが、全体の形状のほか、体部外面に分割を意識した横位のヘラミガキや見込み部分が格子状ヘラミガキ、乱方向ヘラミガキを行う等の特徴から、尾上編年II-1期(12世紀前半)に比定される。瓦器小皿(49)はやや深目で丸味のある底部から口縁部が外反気味に斜上方に伸びるもので、約1/2が残存している。口径9.5cm、器高2.0cmを測る。内外面ともに炭素付着が良好で、色調は黒灰色を呈している。

## SD-8

調査区北部の2C地区で検出した。東西方向に伸びるもので、全長2.5m、幅0.3m前後、深さ0.1m前後を測る。埋土は青灰色砂質土の単一層である。遺物は出土していない。



第17図 SD-7 出土遺物実測図

## 小穴(S P)

小穴は総数35個(S P-1~S P-35)を検出した。そのうち、S P-12~S P-20は掘立柱建物SB-1を構成する柱穴である。上面形状で区別すれば円形、椭円形、不定形の三種類があるが円形のものが大半を占める。規模は幅0.2~1.1m、深さ0.05~0.3mを測る。このうち遺物が出土したものはS P-1(土師器小皿・土釜・瓦器椀)、S P-5(土師器小皿・土釜)、S P-9(土師器小皿・瓦器椀)・S P-21(瓦器小皿)・S P-33(瓦器椀)で、全て小片のため図化し得たものは無く、時期を明確にし得たものもない。

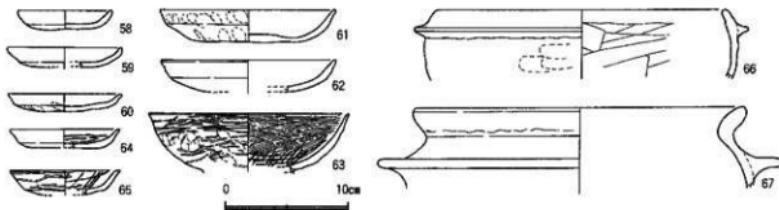
第1表 小穴法量表

番号	地区	形状	規模(cm)	深さ(cm)	出土遺物	備考
S P - 1	3 C	不定形	66×36	8.5	土師器小皿・土釜・瓦器椀	
S P - 2	3 C	円形	28×26	23.0		
S P - 3	3 C	円形	20×20	15.6		
S P - 4	3 C	方形	21×21	14.1		
S P - 5	3 C	椭円形	31×34	19.9	土師器小皿・土釜	
S P - 6	3 B	方形	30×30	18.1		
S P - 7	3 B	椭円形	22.5×36	20.0		
S P - 8	3 C	椭円形	26×38	9.8		
S P - 9	3 C	不定形	48×40	21.1	土師器小皿・瓦器椀	
S P - 10	3 C D	椭円形	24×30	14.2		
S P - 11	2 C	方形	32×36	69.5		
S P - 12	2 C	椭円形	36×40	10.8		S B - 1
S P - 13	2 C	椭円形	28×36	21.3		タ
S P - 14	2 C D	不定形	38×34	7.9		タ
S P - 15	2 C	椭円形	31×36	23.3		タ
S P - 16	2 C	椭円形	27×30	13.6		タ
S P - 17	2 C	椭円形	30×27	18.2		タ
S P - 18	1・2 C	不定形	108×44	11.1		タ
S P - 19	1 C	椭円形	27×31	9.9		タ
S P - 20	1 C	円形	32×27	26.1		タ
S P - 21	2 C	不定形	36×32	21.2	瓦器小皿	
S P - 22	2 C	円形	20×20	12.4		
S P - 23	2 C	円形	18×20	7.8		
S P - 24	2 C	円形	18×21	14.4		
S P - 25	2 C	方形	29×33	11.9		
S P - 26	2 C	不定形	85×54	14.8		
S P - 27	2 C	円形	20×21	15.1		
S P - 28	1・2 C	不定形	48×58	12.0		
S P - 29	1 C	椭円形	35×30	18.0		
S P - 30	1 C	椭円形	25×20	7.4		
S P - 31	1 C	椭円形	51×41	31.9		
S P - 32	1 C	円形	36×34	25.3		
S P - 33	1 C	円形	17×18	15.9	瓦器椀	
S P - 34	1 C D	不定形	25×22	11.2		
S P - 35	1 D	不定形	30×15	17.9		

## 2) 遺構に伴わない遺物

第2層を中心に出土している。10点(58~67)を図化した。その内訳は、土師器小皿3点(58~60)・中皿2点(61・62)・土釜1点(67)、瓦器椀1点(63)・瓦器小皿2点(64・65)・足釜1点(66)である。土師器小皿(58~60)は口径が7.5cmの(58)と口径が9.2cmの(59・60)がある。口縁部の形態では、斜上方に伸び端部が上方につまみ上げられる(58・59)と口縁部上半端部付近で外反し端部が丸く終わる(60)がある。胎土は精良で色調は淡褐色を呈する。(61・62)は土師器中皿で

(61)が3/4以上、(62)が1/12程度残存している。2点ともに平坦な底部から口縁部が丸味を持って斜上方に直線的に伸びるもので端部は丸く終わっている。2点ともに胎土は精良で色調は淡茶褐色系を呈する。瓦器椀(63)は体部の1/4程度が残存するもので、復元口径16.2cmを測る。器面調整においては、外面体部は分割性を欠いた単位の短いヘラミガキ、内面体部は横位の密なヘラミガキ、見込み部分には細かい単位の格子状ヘラミガキが施されている。尾上編年の中Ⅱ-1期(12世紀前半)に比定されよう。瓦器小皿はやや深めの体部を持つ(65)とやや浅い(64)がある。型式的には(65)は古く12世紀前半、(64)が13世紀前半の所産と考えられる。(66)は瓦器足釜で、復元口径23.0cmを測る。内壁気味に伸びる体部上半に、水平方向に小さく伸びる鋸が貼付けられている。口縁部内外面および鋸部分はヨコナデ、体部内面は横方向の板ナデ、鋸部以下の体部外面はナデ調整が施されている。(67)は上師器土釜で、水平方向に伸びる鋸部から頭部が内傾して伸びた後、器壇を厚くして「く」の字状に屈曲している。復元口径26.8cmを測る。色調は淡褐色で胎土中にやや大粒の長石・石英粒が多量に含まれている。



第18図 第2層出土遺物実測図

## 参考文献

- ・中国産磁器  
横田賛次郎・森田 勉 1978「太宰府出土の輸入中国磁器について—型式分類と編年を中心として」『九州歴史資料館研究論集4』
- ・瓦器椀の型式  
尾上 実 1983「南河内の瓦器椀」『藤沢一夫先生古希記念論集 古文化論集』
- ・瓦器椀の時期  
森島康雄 1992「畿内産瓦器椀の併行関係と曆年代」『大和の中世土器II』大和古中近研究会
- ・土釜  
森島康雄 1990「中河内の羽釜」『中近世土器の基礎研究IV』日本中世土器研究会
- ・備前焼  
間壁忠彦・間壁蘿子 1966~68・84「備前焼研究ノート」1~5『倉敷考古館研究集報』1・2・5・18号

## 第4節 出土遺物観察表

遺物番号	器種	法量(cm) 口径 器高 底径 ( )復元値	調整・手法 外側 内面	色調						焼成 保存	残存率	地区 備考		
				胎 土										
				外面 裏 質	長石	石英	雲母	角閃石	チャート	その他				
1 五	土器等 小皿	8.2 1.1 —	外面：口縁部ヨコナデ。体底部指痕 成形後倒いナデ。 内面：口縁部ヨコナデ。体底部ナデ。	丸丸色 魚鱗	▲ S M	△ M	△ S	○ S	● S	赤▲ S	良好	ほぼ完形	SE-1	
2	上部器 小皿	(9.0) 1.1	外面：口縁部ヨコナデ。体底部未調 整。 内面：口縁部ヨコナデ。体底部ナデ。	淡褐色 稍黄	○ S	○ S					*	1/4	*	
3 五	土器等 小皿	(7.8) 1.2 —	外面：口縁部ヨコナデ。体底部ナデ。 内面：口縁部ヨコナデ。体底部ナデ。	淡灰褐色 稍黄	▲ M L	△ S	○ S	○ S	● S	赤▲ S	*	1/2	*	
4 五	土器等 小皿	7.8 1.3 —	外面：口縁部ヨコナデ。体底部ナデ。 内面：口縁部ヨコナデ。体底部ナデ。	淡褐色 鱼鳞	○ S L	△ S	○ S M	○ S	● S	赤▲ S	*	完形	*	
5	下部器 小皿	(8.4) 1.6 —	外面：口縁部ヨコナデ。体底部ナデ。 内面：口縁部ヨコナデ。体底部ナデ。	淡褐色 稍黄	▲ S	△ S	△ S	△ S	● S	赤○ S	*	1/4	*	
6 五	瓦器 小皿	8.0 1.5 —	外面：口縁部ヨコナデ。体底部未調 整。 内面：口縁部ヨコナデ。体底部ナデ。	灰色～灰 白色 灰色～灰 白色	△ S						*	完形	*	
7 五	施器 古鉢輪	(16.5)	外面：ロクロナデ。体部無調査。 内面：ロクロナデ。	淡青色 (怡色)	■ 青							堅硬	1/4	*
8 五	瓦器 機	13.6 4.1 2.7 —	外面：口縁部ヨコナデ。体部指痕成 形後ナデ。全体に油膜。体部に墨跡。 内面：全体に墨跡ヨコナデ。見込み平 行窓状、通透性及ベラミガキ。	黑灰色～ 灰白色 灰白色～ 白色	△ S		▲ S				良好	完形	*	
9 五	瓦器 碗	14.2 3.7 3.4 —	外面：口縁部ヨコナデ。体部指痕成 形後ナデ。油膜、黒色墨跡。 内面：見込みより体部巻き巻き状ヘ ラミガキ。全体に油膜。	黑灰色 鱼鳞	▲ S						*	ほぼ完形	*	
10 六	瓦器 瓶	14.2 3.9 3.7 —	外面：口縁部ヨコナデ。体部指痕成 形後ナデ。油膜、黒色墨跡。 内面：見込みより体部巻き巻き状ヘ ラミガキ。油膜。	淡灰色～ 暗褐色 鱼鳞	■ 青						*	完形	*	
11 六	瓦器 瓶	13.9 3.9 3.5 —	外面：口縁部ヨコナデ。体部指痕成 形後ナデ。油膜、黒色墨跡。 内面：見込みより体部巻き巻き状ヘ ラミガキ。全体に油膜。	淡灰色～ 灰白色 鱼鳞	▲ M						*	完形	*	
12 六	瓦器 瓶	14.1 3.8 2.1 —	外面：口縁部ヨコナデ。体部指痕成 形後ナデ。全体に油膜。 内面：見込みより体部巻き巻き状ヘ ラミガキ。全体に油膜。	淡灰色～ 灰白色 鱼鳞	■ 青						*	完形	*	
13 五	土器等 土釜	22.6 26.4 —	外面：口縁部ヨコナデ。体部指痕成 形後ナデ。全体に油膜。 内面：見込みより体部巻き巻き状ヘ ラミガキ。全体に油膜。	淡褐色 黑褐色 鱼鳞	○ S L	○ S L	○ S L	○ S L	○ S L	● S	東部欠損以 外は完形	SE-1 井戸側		
14 六	土器等 小皿	8.4 1.1 —	外面：口縁部ヨコナデ。体底部ナデ。 内面：口縁部ヨコナデ。体底部ナデ。	淡褐色 鱼鳞	▲ S	△ M	○ S	○ S			*	1/2	SE-2	
15 六	瓦器 小皿	8.4 1.3 —	外面：口縁部ヨコナデ。体底部指痕 成形後ナデ。 内面：口縁部ヨコナデ。体底部ナデ。	灰白色 灰白色～ 暗褐色 鱼鳞	△ S M	△ S L					*	完形	*	
16	下部器 中盤	(14.4) 2.7 —	外面：口縁部ヨコナデ。体底部ナデ。 内面：口縁部ヨコナデ。体底部ナデ。	黑灰色～ 灰白色 鱼鳞	○ S L	○ S L	○ S L	○ S L	△ S L	赤▲ S	*	1/4	*	
17	瓦器 瓶	— (4.4) 高台高 0.5	外面：体部指痕成形後ナデ。高台 部ヨコナデ。 内面：見込み平行窓状ヘラミガキ。	暗灰色 鱼鳞	△ S						*	1/4	*	
18 七	瓦器 瓶	13.8 3.8 4.0 高台高 0.3	外面：口縁部ヨコナデ。体部指痕成 形後ナデ。黒色墨跡。 内面：体部和紅色墨跡状ヘラミガキ。 見込み平行窓状ヘラミガキ。	黑灰色～ 灰白色 鱼鳞	△ S						*	完形	*	

\*遺物観察においては薄枠鏡およびナショナルライトスコープドード-393(X30)を使用。

遺物 番号	國 版 器 種	法量(cm) 口径 器高 底径 ( )復元值	調整・手法		色調 外面 内面	胎 土					焼 成 保 存	現存率	地 区 備 考			
						胎 土										
			裏質	長石	石英	雲母	角閃石	チナート	その他							
19	瓦器 碗	(13.7) — — —	外面：口縁部ヨコナデ。体部指壓圧 成形後ナデ。高台高め押。支ね後底。 内面：体部膨溡き状ヘラミガキ。 足込み平行鍛造状ヘラミガキ。	緑灰色～ 灰色 +	▲ S M						良好	1/2	SE-2			
20	瓦器 碗	(14.0) 3.1 (3.5) 高台高 0.2	外面：口縁部ヨコナデ。体部指壓圧 成形後ナデ。 内面：見込みより体部膨溡き状ヘラミガキ。 油 潤透色	暗灰色～ 灰白色 +	▲ S						良好	1/4	*			
21	七	瓦器 碗	14.1 1.0 3.2 高台高 0.3	外面：口縁部ヨコナデ。体部指壓圧 成形後削りナデ。 内面：見込みより体部膨溡輪状へ ラミガキ。	暗灰色 灰白色～ 灰白色 +	△ S M					良好	完形	*			
22	七	瓦器 碗	14.9 4.2 3.8 高台高 0.4	外面：口縁部ヨコナデ。体部指壓圧 成形後削りナデ。重ね洗度。 内面：見込みから体部に満巻き状へ ラミガキ。	黒灰色～ 灰白色 +	○ S L					良好	1/2以上	*			
23	七	瓦器 星垂 鉢	(10.4) — 鉢深 22.9	外面：口縁部および脚部ヨコナデ。 内面：口縁部および体部ヨコナデ。	黒褐色 +	△ S	○ S	○ S			良好	1/8	*			
24	瓦器 足盤	— — —	外面：作業及び脚部ナデ。体部焼付 作業。 内面：体部板状工具による傾方向の リニア。	黒褐色 +	▲ S L	○ S	○ S			良好			*			
25	七	土器器 土瓶	(28.8) — 鉢径 39.5	外面：口縁部および脚部ヨコナデ。 内面：見込みより体部ヨコナデ。 油 潤透色	暗褐色 +	▲ S L	○ S L	○ S	▲ S		良好	1/6	*			
26	七	土器器 土瓶	(31.5) — 鉢径 44.2	外面：口縁部および脚部ヨコナデ。 内面：見込みより体部ヨコナデ。 油 潤透色	暗褐色 +	○ S L	○ S L	○ S	△ S L		良好	1/4	*			
27	八	瓦器 碗	13.6 3.4 2.6 高台高 0.2	外面：口縁部ヨコナデ。体部指壓圧 成形後削りナデ。高台一層せず馬蹄形。 内面：見込みから体部に満巻き状へ ラミガキ。見込み間に化粧焼付。	灰白色～ 暗褐色 +	○ S M	○ S	○ S	▲ L		良好	ほぼ完形	SE-3			
28	七	土器器 小皿	(7.7) 1.2 —	外面：口縁部ヨコナデ。体部指壓圧 成形後削りナデ。 内面：口縁部ヨコナデ。底部ナデ。	暗褐色 +	▲ S	○ S	○ S	○ S	赤△ S	良好	1/4	SE-4			
29	土器器 小皿	(8.0) 1.0 —	外面：口縁部ヨコナデ。底部ナデ。 内面：口縁部ヨコナデ。底部ナデ。	赤褐色 +	△ S	△ S	○ S	○ S		良好	1/4	*				
30	土器器 小皿	(8.8) 1.0 —	外面：口縁部ヨコナデ。底部ナデ。 内面：口縁部ヨコナデ。底部ナデ。	淡褐色 +	△ S M	△ S	○ S	○ S		良好	1/4	*				
31	土器器 小皿	(8.8) 1.2 —	外面：口縁部ヨコナデ。底部ナデ。 内面：口縁部ヨコナデ。底部ナデ。	淡褐色 +	精良	▲ S	▲ S	▲ S	赤○ S M	良好	1/4	*				
32	八	瓦器 碗	(15.4) 5.6 5.9 高台高 0.5	外面：口縁部ヨコナデ。体部指壓圧成 形。口縁部から体部膨溡いヘラミガキ。 内面：体部膨溡かヘラミガキ。見込み 格子状ヘラミガキ。	黒灰色 +	▲ S	△ S	○ S			良好	1/2	*			
33	瓦器 碗	(14.3) 4.5 5.0 高台高 0.5	外面：口縁部ヨコナデ。体部指壓圧 成形ナデ。高台側面底部ヨコナデ。 内面：体部上半膨溡いヘラミガキ。見 込み平行鍛造状ヘラミガキ。	暗灰色 +	○ S L	○ S	○ S	○ S		良好	1/4	*				
34	八	瓦器 星垂 鉢	(13.5) — 鉢径(16.8)	外面：口縁部および脚部ヨコナデ。 内面：体部以下焼付着。 内面：体部ヨコナデ。	暗灰色 +	▲ L	○ S	○ S			良好	1/4	*			
35	八	禮器 白紐飾	(13.2) — —	外面：クロロナデ。 内面：クロロナデ。	灰白色 (白色) +	■ S L					良好	1/12	*			
36	八	陶器 (縦面) こね鉢	(39.6) — —	外面：ヨコナデ。一部、タテハケ。 内面：ヨコナデ。	茶褐色 +	△ S L	○ S	○ S	△ S		良好 (内面に剥離)	1/8	*			

逐物番号	固版番号	器種	法量(cm) 口径 周長 底径 ( ) 例示	調整・手法		色調	胎 土					焼成 保 存	残存率	地区 備考				
				外面			内面											
				裏質	真石	石英	雲母	角閃石	チタイト	その他の								
37	八	瓦質井戸(瓦)	外幅 29.3 内幅 21.6 高さ 34.8 厚さ 3.0	外面：ナガ。楕円の割み目。 内面：ナガ。	暗灰色 +	やや粗 M	○ S △ S △ S	○ S △ S △ S	○ S △ S △ S	△ S △ S △ S	良好 完形 SE-5							
38	八	瓦質井戸瓦	外幅 26.2 内幅 24.2 高さ 24.4 厚さ 3.6	外面：ナガ。楕円の割み目。 内面：ナガ。	灰白色～ 暗灰色 +	やや粗 M	○ S △ S △ S	○ S △ S △ S	○ S △ S △ S	△ S △ S △ S	良好 完形 *							
39	-	須恵器鉢	(12.5)	- 外面：回転ナガ。 - 内面：回転ナガ。	灰色 +	やや粗 M	○ S △ S △ S	○ S △ S △ S	○ S △ S △ S	△ S △ S △ S	堅致 底部下 1/2 SK-1 東進系							
40	-	土師器小皿	(8.0) 0.8 -	外面：口縁部ヨコナデ。体底部ナガ。 内面：口縁部ヨコナデ。体底部ナガ。	淡褐色 +	良 好	○ S △ S △ S	○ S △ S △ S	○ S △ S △ S	△ M △ M	良好 1/4 SD-3							
41	-	土師器小皿	(8.2) 1.2 -	外面：山線部ヨコナデ。体底部ナガ。 内面：口縁部ヨコナデ。体底部ナガ。	淡褐色 +	やや粗 M	○ S △ S △ S	○ S △ S △ S	○ S △ S △ S	△ S △ S △ S	良好 1/2 *							
42	九	土師器小皿	(8.6) 1.4 -	外面：口縁部ヨコナデ。体底部ナガ。 内面：口縁部ヨコナデ。体底部ナガ。	淡褐色 +	良 好	○ S △ S △ S	○ S △ S △ S	○ S △ S △ S	△ S △ S △ S	良好 1/2 *							
43	-	土師器小皿	8.4 1.4 -	外面：口縁部ヨコナデ。体底部ナガ。 内面：口縁部ヨコナデ。体底部ナガ。	淡褐色 +	良 好	○ S △ S △ S	○ S △ S △ S	○ S △ S △ S	△ S △ S △ S	良好 1/2以上 *							
44	-	土師器小皿	(10.0) 1.6 -	外面：口縁部ヨコナデ。体底部ナガ。 内面：口縁部ヨコナデ。体底部ナガ。	淡褐色 +	良 好	△ S △ S	良好 1/4 SD-7										
45	九	土師器小皿	9.2 1.5 -	外面：口縁部ヨコナデ。体底部指痕 に成形跡弱いナガ。 内面：口縁部ヨコナデ。体底部ナガ。	淡褐色～ 灰白色 +	良 好	△ S △ S △ S	良好 完形 *										
46	-	土師器小皿	(9.2) 1.2 -	外面：山線部ヨコナデ。体底部ナガ。 内面：山線部ヨコナデ。体底部ナガ。	淡褐色 +	良 好	△ S △ S	良好 1/4 *										
47	-	土師器小皿	(9.4) 1.3 -	外面：口縁部ヨコナデ。体底部指痕 に成形跡弱いナガ。 内面：口縁部ヨコナデ。体底部ナガ。	淡褐色 +	良 好	△ S △ S △ S	良好 1/4 *										
48	-	土師器小皿	(9.2) 1.4 -	外面：口縁部ヨコナデ。体底部ナガ。 内面：口縁部ヨコナデ。体底部ナガ。	淡褐色 +	良 好	△ S △ S △ S	良好 1/4 *										
49	九	瓦器小皿	9.5 2.1 -	外面：口縁部および体底部へラミ ガキ。 内面：口縁部および体底部へラミ ガキ。	黒灰色 +	良 好	△ S △ S △ S	良好 1/2 *										
50	-	土師器中皿	(15.0) 2.6 -	外面：口縁部ヨコナデ。体底部ナガ。 内面：口縁部ヨコナデ。体底部ナガ。	明褐色 +	良 好	△ S △ S	良好 1/4 *										
51	-	土師器中皿	(15.0) 3.0 -	外面：口縁部ヨコナデ。体底部指痕 に成形後ナガ。 内面：口縁部ヨコナデ。底部ナガ。	淡褐色 +	良 好	△ S △ S △ S	良好 1/4 *										
52	-	瓦器碗	(13.9) -	外面：口縁部ヨコナデ。一部ヘラミ ガキ。 体部指痕圧成形後ヘラミガキ。 内面：口縁部および体底部ヘラミ ガキ。	黒灰色 +	良 好	△ S △ S △ S	良好 1/6 *										
53	-	瓦器碗	(16.6) -	外面：口縁部および体底部ヘラミ ガキ。 内面：口縁部および体底部ヘラミ ガキ。	黒灰色 +	良 好	△ S △ S △ S	良好 1/4 *										
54	九	瓦器碗	(14.5) 5.4 (6.5) 高台寺 0.7	外面：口縁部ヨコナデ。体部指痕 圧成形後弱いヘラミガキ。 内面：口縁部および体底部弱いヘラミ ガキ。足込み棒は状ヘラミガキ。	黒灰色～ 灰白色 黒灰色 +	良 好	△ S △ S △ S	良好 1/4 *										

遺物番号	器種	法量(cm) 口径 器高 底径 ( )深元径	調整・手法 外面 内面	色調 外面 内面	粘土						焼成 保有	残存率	地区 備考		
					素		石		骨		チャート	その他			
					青	黄	石	英	骨	因石					
55 丸	瓦器 施	- 6.5 高台高 0.6	外側: 高台部ヨコナデ。底部ナデ。 裏面: 「X」ヘラ記号。 内面: 見込み格子状ヘラミガキ。	黒灰色～ 灰白色 +	▲ S	▲ S	▲ S	▲ S	▲ S	▲ S			良好	高台部 完存	SD-7
56 丸	瓦器 施	- (5.6) 高台高 0.7	外側: 高台部ヨコナデ。底部ナデ。 内面: 見込み格子状ヘラミガキ。	黒灰色 +	▲ S	▲ S	▲ S	▲ S	▲ S	▲ S			良好	高台部 1/2	*
57	瓦器 施	- (5.2) 高台高 0.65	外側: 高台部ヨコナデ。底部ナデ。 内面: 見込み格子状ヘラミガキ。	黒灰色 +	▲ S	▲ S	▲ S	▲ S	▲ S	▲ S			良好	高台部 1/2	*
58 丸	土器器 小皿	(7.5) 1.5 -	外側: 口縁部ヨコナデ。体部指頭圧 成形後剥いナデ。 内面: 口縁部ヨコナデ。体部ナデ。	淡灰褐色 +	△ S M	▲ M	△ S	○ S	△ S	○ S			良好	1/4	第2層
59	土器器 小皿	(9.2) 1.6 -	外側: 口縁部ヨコナデ。体底部ナデ。 内面: 口縁部ヨコナデ。体底部ナデ。	淡灰褐色 +	▲ S	▲ S	○ S	○ S	▲ S	● S			良好	1/3	*
60 丸	土器器 小皿	(9.2) 1.4 -	外側: 口縁部ヨコナデ。体底部ナデ。 内面: 口縁部ヨコナデ。体底部ナデ。	淡灰褐色 +	▲ S	▲ S	○ S	○ S	▲ S	○ S			良好	1/2	*
61	土器器 中皿	14.0 2.6 -	外側: 口縁部ヨコナデ。体部指頭圧 成形後剥いナデ。 内面: 口縁部ヨコナデ。底部ナデ。	淡灰褐色 +	▲ S	▲ S	○ S	○ S	▲ S	○ S			良好	3/4	*
62	土器器 中皿	(14.2) 2.6 -	外側: 口縁部ヨコナデ。体底部ナデ。 内面: 口縁部ヨコナデ。底部ナデ。	淡灰褐色 +	▲ S	▲ S	△ S	○ S	▲ S	○ S			良好	1/12	*
63	瓦器 施	(16.2) -	外側: 口縁部ヨコナデ。体部指頭圧 成形後剥いナデ。 内面: 口縁部ヨコナデ。体部指頭圧 成形後剥いナデ。 外側: 口縁部ヨコナデ。底部ナデ。	黒灰色 +	▲ S	▲ S	△ S	○ S	▲ S	○ S			良好	1/4	*
64	瓦器 小皿	(9.0) 1.5 -	外側: 口縁部ヨコナデ。底部ナデ。 内面: 見込み格子状ヘラミガキ。 外側: 口縁部ヨコナデ。底部ナデ。	黒灰色 +	▲ S	▲ S	△ S	○ S	▲ S	○ S			良好	1/6	*
65	瓦器 小皿	(9.0) 1.9 -	外側: 口縁部～底部上半ヘラミガキ。 内面: 口縁部～底部上半ヘラミガキ。 外側: 口縁部および底部ヨコナデ。	黒灰色 +	やや粗 ○ S	△ S	△ S	○ S	△ S	○ S			良好	1/4	*
66 丸	瓦器 足器	(23.0) -	外側: 口縁部および底部ヨコナデ。 体部指頭圧成形後剥いナデ。 内面: 口縁部ヨコナデ。体部板状工 具によりナデ。	黒灰色 +	やや粗 △ S	△ S	△ S	○ S	△ S	○ S			良好	1/12	*
67 丸	土器器 土釜	(26.8) -	外側: 口縁部および底部ヨコナデ。 体部ナデ。脚部下面以下剥り落。 内面: 口縁部ヨコナデ。	黒灰色 +	粗 ○ S-L	△ S-L	△ S	○ S	△ S	○ S	▲ L		良好	1/8	*

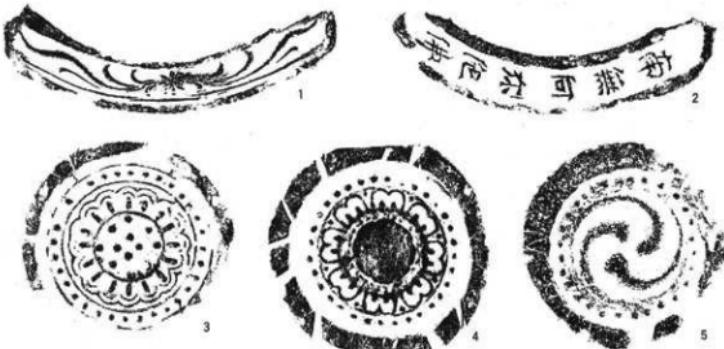
### 第3章　まとめ

今回の調査では、平安時代後期・鎌倉時代前期～中期・近代時期の遺構・遺物が検出され、東郷遺跡西部での平安時代後期以降の動向を知るうえで貴重な資料を提供する結果となった。また、調査地に近接して南北朝期の建立である常光寺および南北朝期～戦国時代末期に存在した八尾城を西郷地区(旧地区名)所在とした場合、調査地点が八尾城内に位置することから、八尾城の所在位置を考えるうえでも今回の調査は重要なものと考えられた。これらの調査成果とは別に、後述するように、調査地周辺から出土した古代末～中世初頭の屋瓦の存在が明らかになり、これらの新知見の資料を含めて、周辺における平安時代後期以降の集落の推移ならびに八尾城の所在位置に関わる諸問題を考えてみたい。

#### 1) 調査地周辺の小字名と出土瓦について

本調査の報告書を刊行するにあたって、故山本昭氏(元八尾市教育委員会勤務)が収集された八尾市域出土の屋瓦の拓影を集めた資料中に調査地周辺で出土した屋瓦があることを知った。資料中に「沢井資料」と記されているものが含まれていることから、八尾市史の編纂委員を務められた故沢井浩三氏の資料も一部含まれていると考えられる。資料には出土地点(旧地区名と小字)が明記されているものの、収集に関わる経緯や所有者についても、収集された方々が故人のため不明であるが、常光寺および中世八尾城の所在位置等を考えるうえで重要と思われるため資料紹介として本書で一部を掲載することにした(第19図)。資料中に調査地周辺の小字名が記されたものが5点(1～5)含まれており、現在の地番と対象させるため常光寺所蔵の明治6年(1873)の西郷村絵図をもとに作図したのが第21図である。この図によると、これらの屋瓦は栗栖神社(現八尾神社)の南部一帯の「城丁」「百石」付近および、西郷地区(旧地区名)東部の「沢堂」から出土している。

(1・2)はともに軒平瓦で「西郷字沢堂」の出土である。(1)は中心飾りに花文を配する均整唐草文軒平瓦である。よく似た意匠の瓦が、本書掲載の第37次調査西区第2面W S D-201石垣

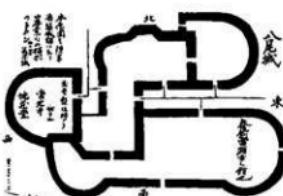


第19図　調査地周辺出土屋瓦拓影

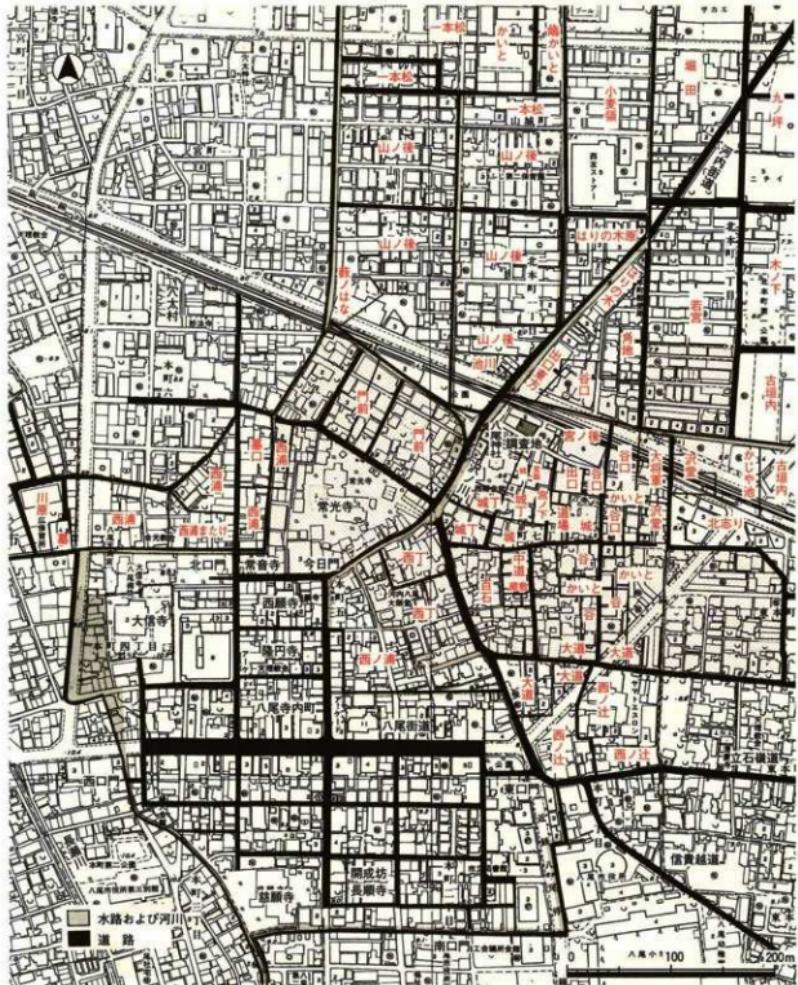
内(96)から出土している。(2)は瓦当面に向かって右から左へ南無阿弥陀佛を陽刻で配する南無阿弥陀佛銘軒平瓦である。なお、同紋の瓦が八尾市八尾木の金剛連華寺跡から出土している。<sup>註3</sup>(3)は「西郷字百石」出土の複弁八弁蓮華文軒丸瓦である。蓮子は4+8。蓮弁周辺に輪郭線が巡る。外区には2本の圓線間に小粒の珠文が密に巡る。(4・5)は軒丸瓦で「西郷城町」と記されているが、おそらく小字「城丁」に対応するものと考えられる。(4)は複弁八弁蓮華文軒丸瓦である。中房は八花形で、中房と蓮弁との間に小さな珠文を密に配している。大和法隆寺・法起寺に同瓦がある。(5)は左巻きの三巴文軒丸瓦である。巴の頭部は尖り気味で、脇部以下は急激に幅を減じて約半周して尾部に至る。外区の珠文は小粒で密に配されている。時期的には、(1~3)が平安時代後期、(4)が鎌倉時代前期、(5)が鎌倉時代後期(13世紀後半)に比定できる。<sup>註4</sup>(3~5)の軒丸瓦については、出土地点が栗橋神社(現八尾神社)の南部一帯にあたることから、神宮寺的な性格を帯びた寺院に伴うものであった可能性が高い。また、「西郷字沢堂」出土の南無阿弥陀佛銘軒平瓦(2)については、その内容から勘案して淨土宗系寺院に使用されたものと考えられる。これらの屋瓦の存在は、常光寺建立以前に常光寺の前身となった寺院、あるいは草堂的な建物がこの付近に存在したことを物語っている。和田文書等によれば八尾城は、南北朝動乱期の延元二年(1337)に南朝方の高木遠盛により堂舎、仏閣、矢蔵、役所が焼失したと記されており、周辺に存在していた寺院についても少なからず戦禍の影響があったものと考えられる。<sup>註5</sup>昭和62年に常光寺の北西部で行われた発掘調査(市教委86-531)では、火災による二次焼成を受けた<sup>註6</sup>14~15世紀代の遺物の中に屋瓦類および埴が出土していることから、上記の文献史料を証左する資料に成り得るものと考えられる。

## 2) 八尾城の所在地について

八尾城については、江戸時代前期の兵学者の山鹿素行による「八尾城古図」(第20図)をもとに、その所在地をめぐって旧地区名の西郷(現八尾市本町5丁目・7丁目付近)<sup>註7</sup>所在説と八尾座(現八尾市高美5丁目・南本町7丁目・安中町6丁目付近)<sup>註8</sup>所在説の両説が唱えられてきた。西郷説の端緒は明治33年の吉田東伍氏による「日本地名辭書」において八尾城址は「大字木戸にあり、此なるべし、八尾の邑心にして寺内の東なり、木戸の南に莊之内の大字あり、即ち城内歟」と記されており大字木戸を中心とし八尾城が想定されたことによる。大正11年の「中河内郡誌」では、西郷説を支持し小字「城丁」をもって八尾城としている。戦後刊行された「河内史談」の中で西岡三四郎氏は、山鹿素行作図の八尾城古図からみて八尾城は八尾座にあらずして、西郷城町とすべきであるとし、八尾城八尾座説を否定している。一方、八尾座所在説は明治36年の「大阪府誌」に「八尾町の大字八尾座は其の城地なりといへども星霜積みて今に五百余年、其の址認むべからず、然れども今邑の小字に城ヶ後と称せる廣妻一町六反余の耕地あり、蓋、或ひは此の付近ならんか」とあり小字「城(じょう)ヶ後(うしろ)」をもって八尾城址と推定された。その後、大正11年「大阪府全誌」、大正14年の「日本国誌資料叢書・河内」、昭



第20図 八尾城古図(註7より)



第21図 調査地周辺小字名(赤字) ※アミカケ部分が「八尾城古図」の推定範囲

和11年「大阪史談会報第3卷」、昭和47年「河内文化・第二十号・河内の城址」さらに昭和55年には辻村輝彦氏により「中世八尾城の所在についてー八尾城西郷説批判ー」「八尾市史紀要第七号<sup>註10</sup>」が刊行されている。このように明治30年代以降両説が唱えられてきた。なかでも、昭和55年に発行された辻村輝彦氏の八尾城八尾座説は、八尾城西郷説に疑問を提示し、これまでにない多

面的な角度から両説を比較しており、説得力に富むもので八尾城八尾座説を強く補強するものであると考えられた。しかし、今回調査地周辺の小字名を調査するなかで、これまで八尾城西郷説の據所であった「城丁」のほかに「城」「城下」「出口」「出口東方」「道場」「沢堂」と言った城あるいは堂舎、仏閣に関するものを多数確認した。また、周辺で実施された発掘調査においても八尾城存続時期の一端を推定し得る遺構・遺物が検出されており、これらを含めて八尾城西郷説を再度検証する必要が生じた。そこで、八尾城の所在論争の淵源となった山鹿素行作図の「八尾城古図」について考える必要がある。山鹿素行は江戸時代前期の兵学者で江戸を中心に活躍していたが承応元年(1652)には赤穂藩浅野家に仕えており、翌年赤穂へ築城の設計に参画するため出向している。この7ヶ月におよぶ赤穂滞在中に八尾へ立ち寄ったものと考えられる。この時期に「八尾城古図」が描かれたものとすれば、天正11年(1583)に池田丹後守教正の美濃国移封後廃城となってから約70年後の八尾城の状況を描いたものであり、第20図をもって南北朝から戦国期の八尾城の全容とするにはやや疑念を持たざるを得ない。

八尾城の歴史は大きく3時期の変遷が認められる。①南北朝の乱の時期〔八尾城Ⅰ期(1337～1370年)〕、②畠山氏の内乱の時期〔八尾城Ⅱ期(1454～1521年)〕、③戦国末期の池田丹後守教正の時期〔八尾城Ⅲ期(1580～1583)〕に区別される。以下、各時期毎にその推移を考えてみたい。

八尾城Ⅰ期とした南北朝期の八尾は南朝赤坂をはじめとして南朝の拠点であった觀心寺、金剛寺、吉野と北朝の拠点である京都との中間地に位置しており、南北朝の攻防の第一線基地であった。当時、八尾には楠木正成の支配下に八尾別当顕幸があり、八尾城を居城としていた。延元元年(1336)に兵庫湊川の戦いで楠木正成が戦死した後の八尾城は北朝方に占領されており、延元二年(1337)10月には南朝方の高木遠盛等により城内の堂舎、仏閣、矢蔵、役所が焼失されている。一方、常光寺縁起によれば、常光寺の建立は南北朝の動乱が沈静化した元中三年(1386)に藤原又五郎大夫盛継<sup>註12</sup>によりそれまで地蔵菩薩を安置していた草堂や阿弥陀如来を安置していた淨上教系の寺院を統合して現在の寺域内に移されたとされている。従って、前述した屋瓦類は八尾城内にあって、延元二年の乱により焼失した堂舎、仏閣に関わるものである可能性が高く、「八尾城古図」に描かれた常光寺は1386年の建立であるから八尾城Ⅰ期とした南北朝期には存在していないことは確実である。また、延元三年(1338)8月の戦記を示した「高木遠盛軍忠状」には「一、同年八月十六日発向八尾城之処、出向囚徒等五条河原之間、致合戦、追籠囚徒等於城内(以下略)」とあり、八尾城付近に五条河原が存在したことが窺える。八尾城付近は条里遺制によれば、若江郡六条の南西隅里から五条の北西隅里に位置している。ただ、西郷八尾城説を主張された西岡三四郎氏の指摘されている「五条ノ墓」(安中町2丁目付近)については、条里では四条の北西隅里付近に位置しており条里とは若干ずれるが、おそらく、八尾城南西部の長瀬川河原から南側の上流側一帯の川原が当時、五条河原と呼称されていたのであろう。従って、南北朝期の八尾城(八尾城Ⅰ期)は常光寺の表記を別にすれば「八尾城古図」(第20図)にあるように旧西郷地区(現八尾市本町5丁目・7丁目)付近に存在しても矛盾するものでない。

八尾城Ⅱ期とした畠山政長と畠山義就にはじまる畠山氏の家督争いに端を発する畠山氏の内乱は、享徳三年(1454)～永正十八年(1521)までの三代約70年の長きにわたるもので、後に応仁の乱を引き起こす要因ともなった。これらの戦いは河内地域を中心に行われており、八尾市域もたびたび戦場となったことが「第2表 八尾城および常光寺関連年表」から推定できる。この間の闘

連文献から八尾城の存在が認められ城としての機能を果していたようである。しかしながら、このような戦渦の渦中にあっても、常光寺に対しては、相対する双方の畠山氏から寺領の寄進や安堵状が出され保護されていたため、兵火を免れている。このことは、当時常光寺が地蔵信仰の聖地であったことに加えて、双方の畠山氏の河内における政治的な立場を誇示する手段として利用されており、合戦の場から除外することが保証されていたのであろう。従って、この時期、常光寺に隣接した八尾城は戦略的にはそれほど重要視されなくなったものと推定され、おそらく八尾城Ⅰ期の城構えを踏襲し、さらに常光寺を含めた環濠集落化を計った集落に包括される形で推移したものと推定される。

八尾城Ⅲ期は、池田丹後守教正、多羅尾右近、野間佐吉の若江三人衆の居城であった若江城が天正八年(1580)に魔城となった後に池田丹後守教正により八尾城に居城が移された時期をさす。池田丹後守教正はキリシタン大名で、当時城内には狭い仮小聖堂が2カ所あったことや、八尾に800人のキリシタンがいたことが記されている。なお、八尾城の西部に位置する西郷墓地(八尾市末広町1丁目)には、天正十年(1582)の銘を持つ舟形のキリシタン墓碑が残されている。しかし、この墓碑が刻まれた翌年の天正十一年(1583)に池田丹後守教正は美濃に移封されており、城としての機能した期間は僅か3年余りであったようである。池田丹後守教正時代の八尾城は、仮小聖堂と推定される「大うすかいと」<sup>註15</sup>の字名やキリシタン墓碑の存在から西郷付近に位置していたことは明らかであるが、存続時期が短期間であったため、おそらく前代に成立した環濠集落内に城の中核的な建物が集約されていたものと推定される。

山鹿素行の描いた「八尾城古図」はこの時期の八尾城を描いたものと推定される。第21図で復元した西郷村地图と「八尾城古図」を比較した場合、常光寺の南部の「西丁」「西ノ浦」を区画する道路から「百石」「大道」の南をとおり、「かいと」の東側区画(小字名不明)の東で北に方向を変え、「北志り」の南をとおり、「北志り」と「沢堂」を区画する道を北にとり、北側の「沢堂」の東から「かじや池」を縦断し「古垣内」「若宮」の間を北に進み「若宮」の途中から西折れして「谷口」「出口東方」の北を進み「出口東方」の西側から常光寺を取り巻く範囲が、山鹿素行の描いた「八尾城古図」の外側の輪郭にはば符合する。城内部の区画についても、常光寺の南東部から南東方向に伸びる道路が「西丁」を二分する区画道路に該当する他、南北方向に伸びる区画についても概ね合致しており、城や菴舎を示す小字名が北側の区画内に集中していることから、北側の区画が城の中枢を担っていたことが推定される。そのほか、城内から外に伸びている道路については、北に伸びるのが河内街道、東に伸びる道路が立石嶺道に合流する道路に該当するものと考えられる。この範囲が八尾城の城域とすれば、東西約500m、南北約300mの規模が想定される。なお、図中には旧大和川の流路が東西方向に描かれており、現流路方向と異なることから西郷説を否定する根拠とされていた。しかし現在みられる旧大和川の流路は、宝永元年(1704)の大和川付け替え後に固定されたもので、「八尾城古図」が描かれた時代にあっては「河原」「西浦」の小字名の存在や、常光寺の南部一帯で慶長十一年(1606)以降に成立をみた八尾寺内町が長瀬川沿いの荒野に開発されたとする記述内容からみて、大和川の流路が当時、東寄りにあった可能性も考える必要があろう。

以上のように「八尾城古図」(第20図)と第21図を比較した結果、客観的事実を優先して表現された古図と西郷地区の小字名、地形、図中の記載内容との共通点が多く、山鹿素行作画による

「八尾城古図」は西郷地区に存在した八尾城を描いたものと推定される。但し、八尾城Ⅲ期とした期間は3年余りであったことを勘案すれば、この図に示された八尾城は、おそらく、八尾城Ⅱ期以降に整備された環濠集落を踏襲した城構えであったと推定される。しかしながら、寛保三年(1743)の「西郷村差出明細帳」において「古城址無御座候」と記されている。八尾城Ⅱ期の文献が示すように城としての機能を果たしておらず、さらに八尾城Ⅲ期も短期間であったため盤石な城構えを持つに至らなかったとすれば、廃城の160年後の時点では伝承として残ったものの遺構としては不明瞭であったことは想像に難くない。

第2表 八尾城および常光寺関連年表

八尾城修築		
延元元年 (1336)		
延元二年 (1337)	7月4日	高木遠盛、小山忠能の官兵八尾城を攻める。
	8月16日	五条河原、恩智河原、四天王寺の各合戦。八尾城の堀際まで押しよせる。
	10月5日	高木遠盛らが八尾城を攻める。城内にあった堂舎、仏閣、矢蔵、役所等焼ける。
延元三年 (1338)	7月24日	八尾別当顯幸死亡。
正平二年 (1347)	9月9日	楠木正行八尾城を攻める。
正平六年 (1351)	9月9日	河内国八尾城へ南軍攻める。
正平十四年 (1359)	正月	八尾城に南朝側の真木野、酒辺等の兵800余騎がたてこまる。
正平十五年 (1360)	4月末	八尾城北朝側におちる。
正平二十三年 (1368)	3月15日	楠木正義八尾城にて義旗をあおぐ。
	4月15日	細川頼之八尾城を囲む
健徳元年 (1370)	4月17日	細川頼之十万騎にて楠木の城を攻める。八尾城おちる。
元中三年 (1386)		常光寺新堂建立。
元中五年 (1388)	3月24日	又五郎太夫地蔵尊前に鰐口寄進。
元中六年 (1389)	10月23日	足利義満、常光寺へ参拝。
元中八年 (1391)	9月24日	伽藍落慶式。
寛正元年 (1460)		河内の守護畠山義就、常光寺に守領として二百石寄進する。
文明九年 (1477)	9月22日	畠山義就、兵を集め河内八尾城に向かう。
寛正元年 (1460)		畠山義就、常光寺に五百石を寄進。
寛正三年 (1462)		畠山政長、常光寺の守領を安堵する。
明応八年 (1499)	6月13日	畠山尚順、八尾地蔵堂常光寺領の諸公事・課役を免状する。
永正七年 (1510)	8月8日	大地震のため常光寺山門倒壊。
永正十七年 (1520)	5月6日	畠山義英、八尾城に陣取ったが守備できず片岡に脱出する。
天正八年 (1580)	12月16日	八尾で津田宗及・池田教正が出席して茶会が催される。
天正九年 (1581)	2月15日	宣教師ワニニヤーヤ、フロイスが八尾城の池田教正を訪問。
	11月10日	八尾で津田宗及・池田教正が出席して茶会が催される。
天正十一年 (1583)		池田教正美濃に転封。八尾城廃城。
承応二年 (1653)頃		山鹿素行による八尾城図作成

### 3) 調査地周辺における平安時代後期以降の集落推移について

#### 平安時代後期

平安時代後期(12世紀前半)の遺構としては、SD-7が唯一で、包含層である第2層からも当該期に比定される遺物は少量出土したのみである。周辺では、調査地の東約400m地点で行われた東郷遺跡第28次調査(TG88-28)で同時期の遺構が検出されている。また、第19図に示した屋瓦の存在から栗栖神社(現八尾神社)の周辺に寺院の存在が推定される。

#### 鎌倉時代

鎌倉時代前期～中葉(13世紀前半～後半)では、北側の掘立柱建物(SB-1)を中心とし、南側に井戸を配置した構成の居住域が形成され、約100年間にわたる居住の事実が明らかになった。この居住期間に4基の井戸が構築されており、出土遺物からSE-4(13世紀前半)→SE-1(13世紀前～中)→SE-3(13世紀中)→SE-2(13世紀中～後)の構築順が推定される。調査地周辺では、南東約200m地点で行われた東郷遺跡30次調査(TG89-30)で、12世紀末から13世紀前半の集落が検出されており、これらの地点との有機的関係が推定される。

この地点において集落存続をみた平安時代後期・鎌倉時代前期～中葉の調査地周辺の状況は、調査地の西部が当時の主要幹線であった河内街道に面し、南側には式内社である栗栖神社(現八尾神社)とその神宮寺的な寺院等が存在していたと推定される。したがって、単に河内街道沿に形成された居住地の一つと考えるよりも、小字名の「宮の後」が示すように近接する寺社との有機的な関係が想定されよう。事実、SE-4から出土した備前焼のこね鉢(36)については、当地においては当該期に類例をみないもので、これらの遺物を入手可能な特定階層の居住地であった可能性が高い。なお、調査地では、13世紀後半の居住域に関連した遺構を最後に遺構の構築は認められず、以後、八尾城の一部として包括されている。

#### 近代

近代の遺構としては井戸1基(SE-5)を検出した。井戸下部に横桟縦板組みの井戸側をもち上部に井戸の構造を持つ農業用の井戸で、明治前半時期に頻発した干ばつに対応して構築されたものと考えられている。従って、南北朝期に八尾城の一部に取り込まれた後は居住域として顧みられることなく、近年まで水田を中心とした生産地としての土地利用が行われていたようである。

## 註記

- 註1 故山本 昭氏から資料の提供を受けた。掲載にあたっては、頂戴した資料(コピー)に修正を加えず図面とした。なお、平成11年9月に八尾市立図書館より放沢井浩三氏の資料が八尾市立歴史民俗資料館に保管依託されている。今回紹介した資料中では、2の拓本がこの資料中に含まれていることを確認した。
- 註2 本図面作成に際しては、常光寺所蔵「西郷村絵図」〔明治6年(1873)〕と京都大学地理学教室所「八尾郷図」(江戸時代初頭)をもとに、大阪府八尾市役所発行の1/2500(昭和61年8月)を使用して合成した。但し、明治6年時点では沢ノ川の流路が変更され八尾寺内町内を流れているがここでは「八尾郷図」に従った。小字名については、「西郷村絵図」に従った。図面作成に際しては、八尾市立歴史民俗資料館 館長柳橋利光、小谷利明、尾崎良史の各氏から御教示を受けた。
- 註3 本書掲載「Ⅱ東郷遺跡第37次調査」第28回(96)69頁
- 註4 前掲註1なお、同じ名号を持つ軒丸瓦が東大阪市の若江遺跡第38次調査で出土していることを東大阪市教育委員会の福永信雄氏から御教示を受けた。
- 註5 1978『法隆寺の古瓦』法隆寺発行
- 註6 1960『八尾市史』(史料編)八尾市役所
- 註7 鶴村友子 1988「2、東郷遺跡(86-531)の調査」八尾市文化財調査報告17
- 註8 柳橋利光 1977『八尾城址図』『八尾市史 文化財編』八尾市役所
- 註9 西岡三四郎 1951「16. 本邦最初の平城『八尾城』」河内史談』第1号 東大阪新聞社
- 註10 辻村輝彦 1980「中世八尾城の所在についてー八尾城の所在についてー」『八尾市史紀要 第7号』八尾市史編さん室
- 註11 1993『国史大辞典 第14巻』吉川弘文館
- 註12 「常光寺縁起」『八尾市史 史料編』八尾市役所
- 註13 1960『八尾市史』(史料編)八尾市役所 P148
- 註14 前掲註8
- 註15 1960「1582年2月15日附 日本耶蘇会年報」「八尾市史』(史料編)八尾市役所 P248
- 註16 让百合代太郎他 1977『八尾市史 文化財編』八尾市役所  
もとは第21図の西郷村西部の小字「墓」(西郷共同墓地)にあった。現個人蔵。
- 註17 「今に西郷の南東の字谷小路に伴天連屋敷と称し、会堂が取りこわされた時、鍼をここに埋めたとの伝説がある。天保四年(1847)の西郷の庄屋の譲り状の中に「大うすかいと」の字名が記されていて、伴天連屋敷の伝えと共に、或いは会堂跡のことに関連のあるものではないかと考えられる。」(『八尾市史(前近代)本文編』)  
ここに記された「字谷小路」については、確認できないものの西郷の南東とすれば八尾城の範囲とした南東部の小字「谷」が該当するものと考えられる。「大うすかいと」については、池田丹後守教正の八尾城以前の居城であった若江城に「大臼」の字名が残されており、「だいうす」はゼウス(神)を意味するものと考えられている。(藤井直正1983『東大阪の歴史』松緑社)  
したがって、八尾城内にあった「大うすかいと」についても若江城と同様教会に関連した建物の存在が想定される。なお、天正十五年(1587)の農臣秀吉によるキリスト教道設の歴史からすれば「大うすかいと」として伝承されていたものの、絵図面には正しく記されなかつ可能性も含まれており、それらを勘案すれば、小字「谷」に近接する「かいと」が有力地点の一つになろう。
- 註18 柳橋利光 1989「二、河内中北部の街道(南北道)(二)河内街道」「京街道」歴史の道調査報告書 第五集 大阪府教育委員会
- 註19 柳橋利光 1989「二、河内中北部の街道(東西道)(二)八尾街道・立石街道」「奈良街道」歴史の道調査報告書 第四集 大阪府教育委員会
- 註20 1960『八尾市史』(史料編)八尾市役所 P295

## 第2表参考文献

- 片岡英宗 1937『八尾地蔵堂別当顕幸 八尾城年表』「方當光会
- 森田康夫 1980『八尾編年史(古代・中世編)』八尾市立図書館
- 柳橋利光他 1988『増補版 八尾市史(前近代)本文編』八尾市役所
- 安井良三他 1991『大阪府八尾市内寺院古文書調査報告書』八尾市教育委員会



# 図 版



調査地全景(西から)



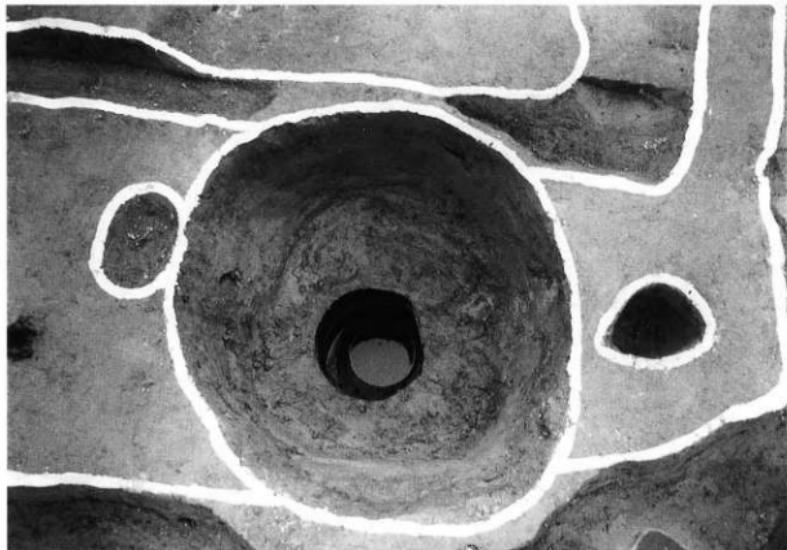
SE-2 検出状況(西から)



SE-1 検出状況(南から)



同上 井戸側検出状況(南から)



S E - 4 検出状況(北から)



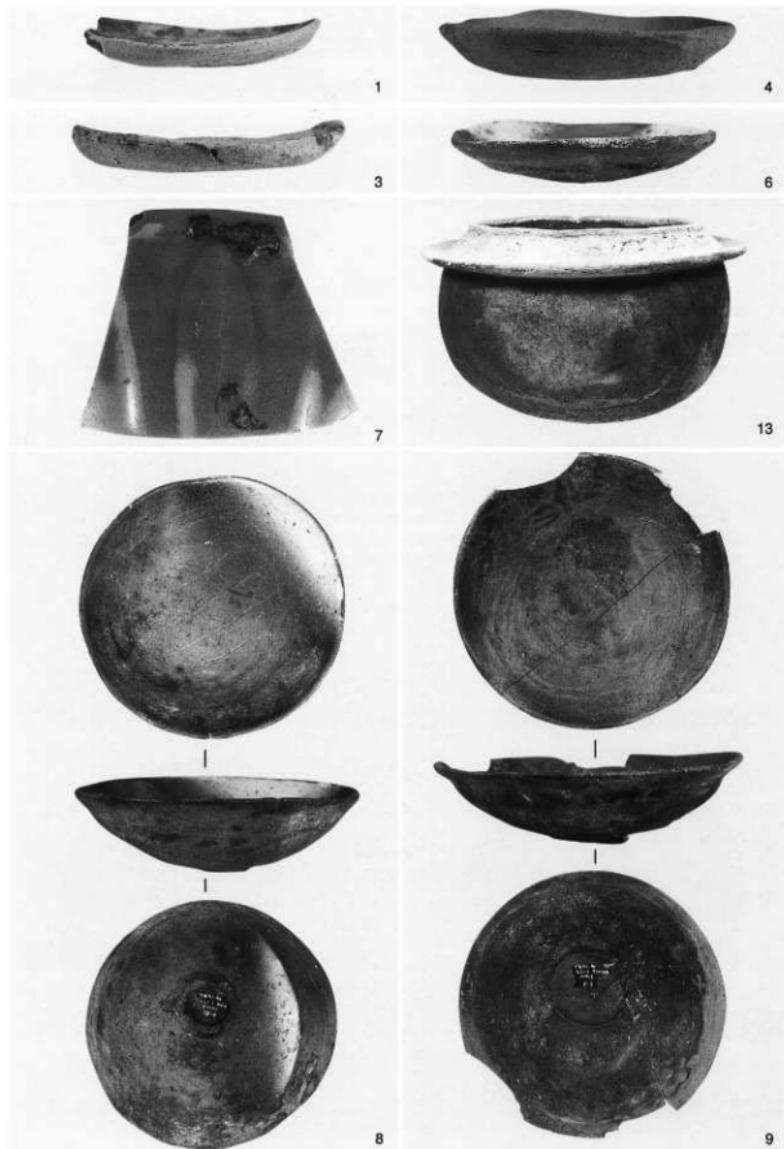
同上 井戸側検出状況(南から)



SE-5 検出状況(南から)



同上 井戸側検出状況(南から)



SE-1 出土遺物



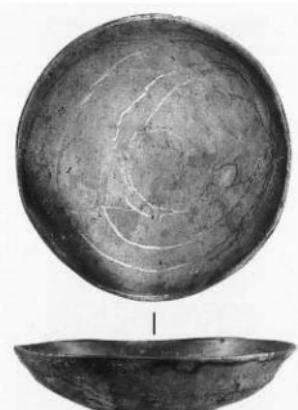
10



11



12



23

S E - 1 (10~12)、S E - 2 (23)出土遺物



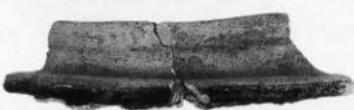
18



21



14



25



15

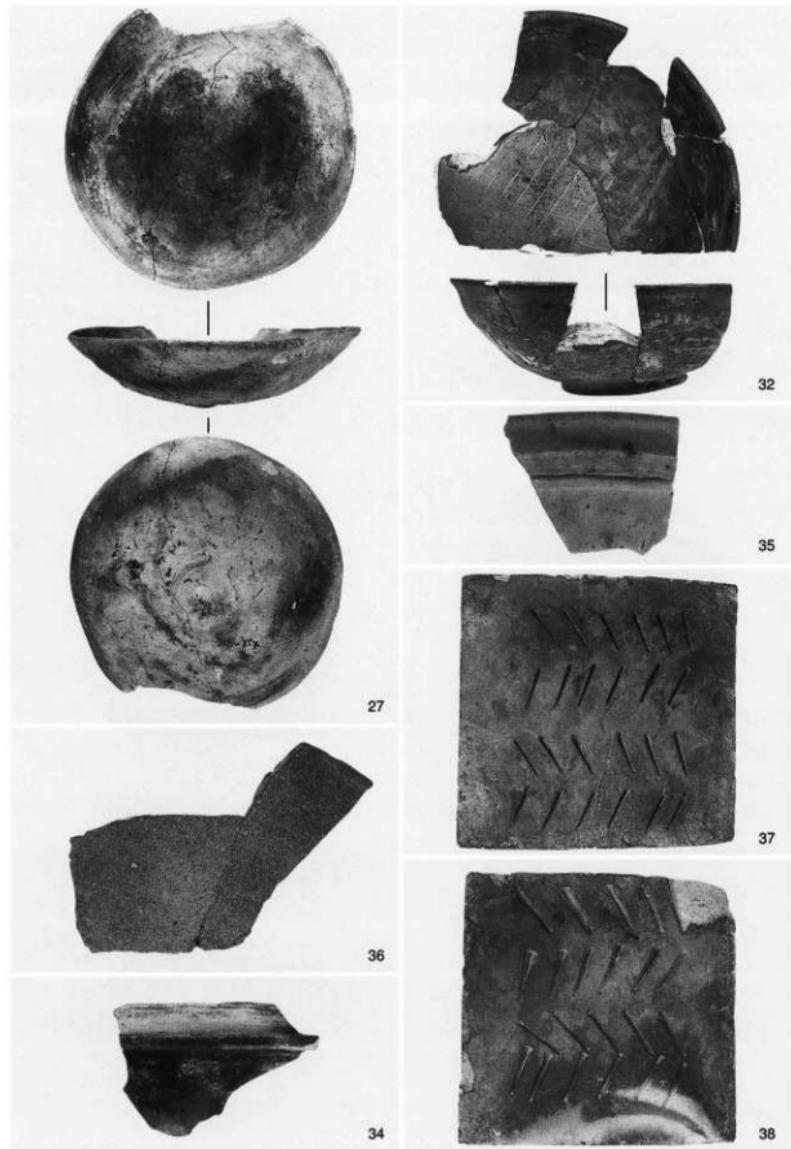


23

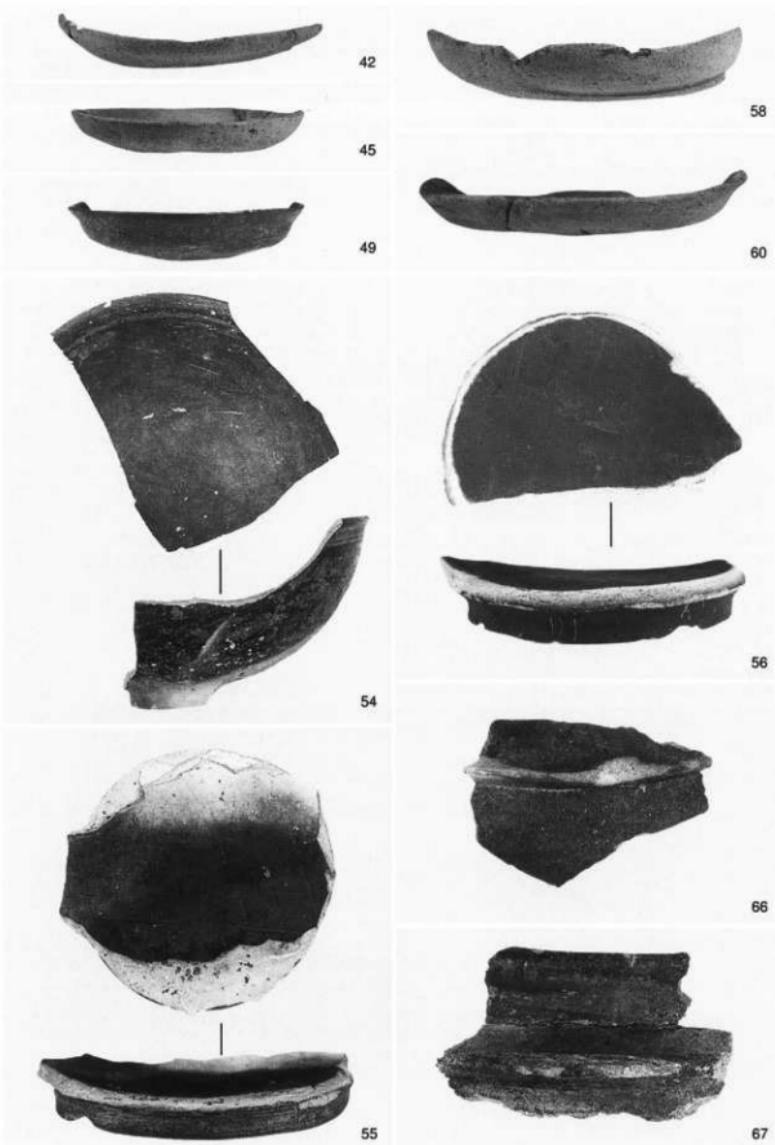


26

SE-2 出土遗物



S E - 3 (27)、S E - 4 (32・34～36)、S E - 5 (37・38) 出土遺物



SD-3 (42)、SD-7 (45・49・54~56)、第2層(58・60・66・67)出土遺物

II 東鄉遺跡第37次調查 (T G 91-37)

# 例　　言

1. 本書は、大阪府八尾市本町1丁目91番地他で実施した八尾市庁舎建設工事に伴う発掘調査の報告書である。
1. 本書で報告する東郷遺跡第37次調査(TG91-37)の発掘調査の業務は、八尾市教育委員会の指示書(八教社文第160号 平成3年3月26日)に基づき、財団法人八尾市文化財調査研究会が八尾市から委託を受けて実施したものである。
1. 現地調査は平成3年6月3日から平成3年9月30日(実働92日間)にかけて原田昌則・西村公助・藤田道子(現大阪府教育委員会)を担当者として実施した。面積3177m<sup>2</sup>を測る。現地調査においては、東秀之・垣内洋平・岸田靖子・杉山智津子・中西明美・浜好美・真柄竜・松田恵一・福島友香・村井俊子が参加した。
1. 内業整理は、現地調査終了後、隨時実施し平成11年5月31日に完了した。
1. 本書作成に関わる業務は、遺物実測・垣内・岸田・北原清子・沢村妙子・辻野優子・福島・村井・図面トレース・北原・遺物写真・原田が行った。
1. 本書の執筆・編集は原田が行った。

## 本文目次

第1章 調査に至る経過	29
第2章 地理・歴史的環境	33
第3章 調査概要	37
第1節 調査の方法と経過	37
第2節 調査成果	38
1. 東区の調査	38
1) 東区基本層序	39
2) 東区検出遺構	39
・第1面	39
・第2面	49
3) 第11層出土遺物	51
2. 西区の調査	51
1) 西区基本層序	53
2) 西区検出遺構	54
・第1面	54
・第2面	60
・第3面	74
3) 第9層出土遺物	83
第3節 出土遺物観察表	85
第4章 まとめ	97

## 挿 図 目 次

第1図	調査地周辺図	30
第2図	調査地設定図および地区割り図	37
第3図	東区 北壁断面図	40
第4図	東区 第1面平面図	41
第5図	E S D - 101出土遺物実測図	42
第6図	E S D - 101～E S D - 104断面図	42
第7図	東区 第1面水田平断面図	44
第8図	E N R - 101出土遺物実測図	45
第9図	E S E - 102平断面図	46
第10図	E S E - 102出土遺物実測図	47
第11図	E S E - 103平断面図	47
第12図	東区 第2面平面図	48
第13図	東区 第2面水田断面図	49
第14図	E N R - 201出土遺物実測図	50
第15図	E N R - 201断面図	50
第16図	東区 第11層出土遺物実測図	51
第17図	西区 第1面平面図	52
第18図	西区 東壁断面図	53
第19図	西区 W S E - 101平断面図	54
第20図	西区 W S E - 101井戸側実測図	55
第21図	西区 W S E - 102平断面図	56
第22図	西区 W S E - 104出土遺物実測図・写真	56
第23図	西区 W S K - 101～W S K - 112平断面図	57
第24図	西区 W S K - 113～W S K - 115平断面図	58
第25図	西区 W S K - 103出土遺物実測図	58
第26図	西区 W S K - 113出土陶器甕・写真	58
第27図	西区 W S D - 103・W S D - 106出土遺物実測図	59
第28図	西区 W S D - 103出土錢貨拓影(原寸)および写真	59
第29図	西区 竹樋101・竹樋102平断面図	59
第30図	西区 W S E - 201平断面図	60
第31図	西区 第2面平断面図	61
第32図	西区 W S E - 201出土遺物実測図	62
第33図	西区 W S E - 202平断面図	62
第34図	西区 W S D - 201出土遺物実測図	63
第35図	西区 W S D - 201平断面図および埋甕201・埋甕202平断面図	64

第36図	西区 W S D - 201内構造部分平断面図	65
第37図	西区 W S D - 201石垣内出土遺物実測図その 1	66
第38図	西区 W S D - 201石垣内出土遺物実測図その 2	67
第39図	西区 W S D - 201石垣内出土遺物実測図その 3	69
第40図	西区 W S D - 201石垣内出土遺物実測図その 4	70
第41図	西区 竹柵201平断面図	72
第42図	西区 埋甕201出土遺物実測図	73
第43図	西区 埋甕202出土遺物実測図	73
第44図	西区 W S D - 301出土遺物実測図	74
第45図	西区 第3面平面図	75
第46図	西区 W S D - 302出土遺物実測図	76
第47図	西区 W S D - 302断面図	76
第48図	西区 W S D - 303断面図	77
第49図	西区 W S D - 303出土遺物実測図その 1	78
第50図	西区 W S D - 303出土遺物実測図その 2	79
第51図	西区 W S D - 303出土遺物実測図その 3	80
第52図	西区 第9層出土遺物実測図	83
第53図	埋没河川跡と飛鳥時代～奈良時代の集落位置図	99
第54図	「八尾郷絵図」にみられる屋敷割	100

## 写 真 目 次

写真 1	昭和33年当時の八尾市庁舎全景	29
写真 2	東区 調査風景	38

## 表 目 次

第 1 表	周辺の発掘調査一覧表	31
-------	------------	----

## 図 版 目 次

図版 一	東区 第1面全景
図版 二	東区 第1面東部遺構検出状況 東区 第1面西部遺構検出状況
図版 三	東区 第1面水田遺構南部検出状況 東区 第1面水田遺構北部検出状況
図版 四	畦畔断面
図版 五	畦畔断面

- 図版 六 東区 E S E -101検出状況  
東区 E S E -102検出状況
- 図版 七 東区 E S E -103検出状況  
同 上 断面
- 図版 八 東区 第2面全景
- 図版 九 東区 第2面調査地東部遺構検出状況  
同 上
- 図版一〇 西区 第1面全景
- 図版一一 西区 W S E -101検出状況  
同 上 断面
- 図版一二 西区 竹樋102検出状況  
同 上 細部
- 図版一三 西区 第2面全景
- 図版一四 西区 第2面全景  
西区 第2面全景
- 図版一五 西区 W S E -201検出状況  
同 上 断面
- 図版一六 西区 W S E -202検出状況  
同 上 断面
- 図版一七 西区 W S D -201検出状況  
同 上
- 図版一八 西区 埋甕201検出状況  
西区 埋甕202検出状況
- 図版一九 西区 第3面全景
- 図版二〇 西区 W S D -303南部検出状況  
西区 第3面調査風景
- 図版二一 東区 E S D -101、E N R -101出土遺物
- 図版二二 東区 E S E -102、東区第11層、西区W S E -101出土遺物
- 図版二三 西区 W S E -201、W S D -201、W S D -201石垣内出土遺物
- 図版二四 西区 W S D -201石垣内出土遺物
- 図版二五 西区 W S D -201石垣内出土遺物
- 図版二六 西区 W S D -201石垣内出土遺物
- 図版二七 西区 W S D -201石垣内、埋甕201、埋甕202出土遺物
- 図版二八 西区 W S D -301～W S D -303出土遺物
- 図版二九 西区 W S D -303出土遺物
- 図版三〇 西区 W S D -303出土遺物
- 図版三一 西区 W S D -303、西区第9層出土遺物

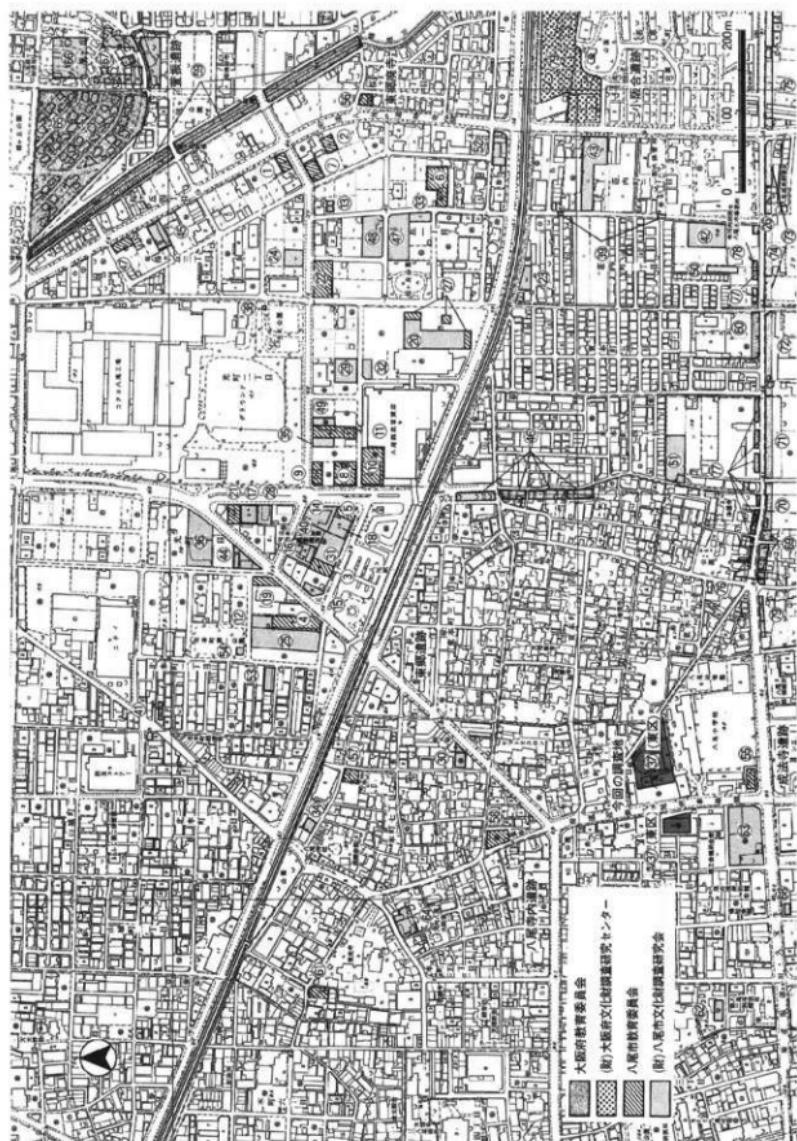
## 第1章 調査に至る経過

東郷遺跡は、長瀬川と玉串川に挟まれた沖積地に位置する弥生時代中期～鎌倉時代末期に至る複合遺跡である。現在の行政区画では八尾市中央部の北本町1・2丁目、本町1・7丁目、東本町1～5丁目、光町1・2丁目、桜ヶ丘1～4丁目、莊内町1・2丁目の東西1.3km、南北0.9kmがその範囲とされている。遺跡範囲内のほぼ中央部を近鉄大阪線が横断しており、これを境に北部が近鉄八尾駅を中心とする商業地域、南部が市街地および市役所を中心とした施設が集中する地域に二分されている。北部地域については、昭和55年度以降、近鉄八尾駅の移転に伴う区画整理事業に伴って二十数次にわたる発掘調査が実施されており、弥生時代中期末～鎌倉時代末期に至る複合遺跡であることが明らかにされている。なかでも、古墳時代初頭(庄内式期)～古墳時代前期(布留式期)にかけての居住域と墓域の推移が明らかにされており、当該期の集落動態を知る上で貴重な資料を提供している。一方、南部地域においては、市の主要な建物の他、古くから市街地が形成されており、この付近では一部で発掘調査が実施された程度で、遺跡北部に比して考古学的な資料の蓄積が少ない地域であった。

このような状況下、八尾市企画調整部庁舎建設準備室から現市庁舎部分(本町1丁目95)に本館と府道八尾停車場線を挟んだ西側の八尾税務署跡地(本町2丁目112-2)に西館を建築する旨の計画書が八尾市教育委員会文化財課に提出された。市教育委員会文化財課では、当該開発予定地の本館部分が東郷遺跡、西館部分が八尾寺内町遺跡の一画にあたり、ともに周知の埋蔵文化財包蔵地に含まれることを確認し、その旨を八尾市企画調整部庁舎建設準備室に通知し、文化財保護法に基づく適切な遺跡保護を講ずる必要性を明らかにした。平成3年3月18日には、開発予定地における埋蔵文化財の存否確認と遺跡範囲確認を主目的とした試掘調査が八尾市教育委員会文化財課により実施された。試掘調査では、本館部分で2箇所、西館部分で1箇所のクリッドを設定し、調査を実施した結果、中世の水田遺構および古墳時代前期の古式土器を含む土層が確認され、少なくとも2面にわたる生活面の存在が明らかになった。これらの試掘調査結果から、市教育委員会では当該地の建築工事に際して発掘調査が必要であると判断し、事業者と協議を重ねた結果、工事掘削で遺跡が破壊される部分を対象として発掘調査を実施することが両者間で合意された。以上の経緯を経て発掘調査を実施するに至ったもので、発掘調査の業務は八尾市・八尾市教育委員会・(財)八尾市文化財調査研究会の三者間で締結された協定書に基づいて当調査研究会が八尾市から委託を受けて行った。現地調査の期間は平成3年6月3日～9月30日までの実働92日間である。調査面積は東区2,432m<sup>2</sup>、西区745m<sup>2</sup>で総調査面積は3,177m<sup>2</sup>を測る。報告書作成に関わる業務は、現地発掘調査終了後、平成11年5月31日まで隨時実施した。



写真1 昭和33年当時の八尾市庁舎全景(北西から)  
〔八尾市史より(昭和33年11月発行)〕



第1図 調査地周辺図(1/6000)

第1表 周辺の発掘調査一覧表

番号	調査年(西暦)	調査主体	所在地	調査期間	文 獻
1	東郷道路 第1次(TG80-1)	市教育委員会	桜ヶ丘3丁目8-1 -9	S56/ 1/10~1/21	〔東郷道路発掘調査報告〕「八尾南道路、東郷道路沿線文化財」八尾市文化財調査報告書6 第55年度定期報告書 1981. 3
2	第2次(TG81-2)	市教育委員会	桜ヶ丘3丁目7-8-1	S56/ 4/15	〔第8章 末広道路発掘調査報告書〕「八尾市埋蔵文化財調査報告書 1980-1981年度」八尾市教育委員会報告 1983. 3
3	第3次(TG81-3)	市教育委員会	光町1丁目69-2	S56/ 4/13~4/15	〔第8章 末広道路発掘調査報告書〕「八尾市埋蔵文化財調査報告書 1980-1981年度」八尾市教育委員会報告 1983. 3
4	第4次(TG81-4)	市教育委員会	北本町2丁目145-12	S56/ 5/13~5/26	〔第8章 末広道路発掘調査報告書〕「八尾市埋蔵文化財調査報告書 1980-1981年度」八尾市教育委員会報告 1983. 3
5	第5次(TG81-5)	市教育委員会	光町1丁目88	S56/ 6/8~7/7	〔第6章 東郷道路発掘調査報告書〕「八尾市埋蔵文化財調査報告書 1980-1981年度」八尾市教育委員会報告 1983. 3
6	第6次(TG81-6)	市教育委員会	桜ヶ丘2丁目9番地	S56/ 7/25~8/8	〔第6章 東郷道路発掘調査報告書〕「八尾市埋蔵文化財調査報告書 1980-1981年度」八尾市教育委員会報告 1983. 3
7	第7次(TG81-7)	市教育委員会	桜ヶ丘3丁目	S56/ 9/21~10/31	未報告
8	第8次(TG81-8)	市教育委員会	光町2丁目156	S56/ 10/15~12/4	〔第8章 東郷道路発掘調査報告書〕「八尾市埋蔵文化財調査報告書 1980-1981年度」八尾市教育委員会報告 1983. 3
9	第9次(TG81-9)	市教育委員会	光町1丁目47	S56/ 12/4~12/23	〔第8章 東郷道路発掘調査報告書〕「八尾市埋蔵文化財調査報告書 1980-1981年度」八尾市教育委員会報告 1983. 3
10	第10次(TG82-10)	市教育委員会	光町2丁目17	S57/ 2/1~3/12	〔第8章 東郷道路発掘調査報告書〕「八尾市埋蔵文化財調査報告書 1980-1981年度」八尾市教育委員会報告 1983. 3
11	第11次(TG82-11)	(財)産業研究会	光町2丁目	S57/ 5/8~6/10	〔東郷道路〕「東郷道路・田井中遺跡」(財)八尾市埋蔵文化財調査研究会報告書 1980-1981年度 1989
12	第12次(TG82-12)	(財)産業研究会	北本町2丁目133-1-15A-3	S57/ 8/5~8/27	〔第8章 東郷道路発掘調査報告書〕「八尾市埋蔵文化財調査報告書 1980-1981年度」八尾市教育委員会報告 1983. 3
13	第13次(TG82-13)	(財)産業研究会	桜ヶ丘3丁目32-3-42	S57/ 9/16~10/12	〔第8章 東郷道路・田井中遺跡〕「八尾市埋蔵文化財調査研究会報告書 1980-1981年度」八尾市教育委員会報告 1983. 3
14	第14次(TG82-14)	(財)産業研究会	光町1丁目72	S58/ 3/18~4/21	〔東郷道路〕「東郷道路・田井中遺跡」(財)八尾市埋蔵文化財調査研究会報告書 1980-1981年度 1989
15	第15次(TG83-15)	(財)産業研究会	光町1丁目132-2	S58/ 5/13~5/25	〔東郷道路〕「東郷道路・田井中遺跡」(財)八尾市埋蔵文化財調査研究会報告書 1980-1981年度 1989
16	第16次(TG83-16)	(財)産業研究会	光町1丁目69-2-北本町2丁目145-12	S58/ 6/1~8/13	〔東郷道路〕「東郷道路・田井中遺跡」(財)八尾市埋蔵文化財調査研究会報告書 1980-1981年度 1989
17	第17次(TG83-17)	(財)調査研究会	光町1丁目49-1	S58/ 11/24~12/15	〔第8章 東郷道路発掘調査報告書〕「八尾市埋蔵文化財調査調査報告書」(財)八尾市埋蔵文化財調査研究会報告 1985
18	第18次(TG83-18)	(財)調査研究会	北本町2丁目141	S59/ 3/1~4/10	〔東郷道路〕「東郷道路・田井中遺跡」(財)八尾市埋蔵文化財調査研究会報告書 1980-1981年度 1989
19	第19次(TG83-19)	市教育委員会	北本町1丁目232	S60/ 4/1~4/27	〔1. 東郷道路〕「調査」「八尾市内高野原昭和60年度発掘調査報告書」八尾市文化財調査報告書12 昭和60年度定期報告書 1985
20	第20次(TG85-20)	(財)調査研究会	光町2丁目40地	S60/ 10/29~S61/ 3/10	〔2. 東郷道路〕「第20次調査」「発掘調査報告書」「八尾市埋蔵文化財調査報告書 1985」(財)八尾市文化財調査研究会報告13 1987
21	第21次(TG85-21)	市教育委員会	光町1丁目43-44	S61/ 10/6~10/28	〔東郷道路〕「第21次調査」「八尾市埋蔵文化財調査報告書」八尾市文化財調査報告書13 1986
22	第22次(TG86-22)	市教育委員会	桜ヶ丘1丁目25-26	S61/ 12/15~12/27	〔東郷道路〕「第22次調査」「八尾市埋蔵文化財調査報告書 1987」八尾市文化財調査報告書15 1987
23	第23次(TG86-23)	(財)調査研究会	往内町1丁目	S62/ 2/16~3/18	〔3. 東郷道路〕「第23次調査」「東郷道路」- 第23次、第24次発掘調査報告書(財)八尾市文化財調査研究会報告書29 1991
24	第24次(TG87-24)	(財)調査研究会	桜ヶ丘3丁目124-1	S62/ 4/8~5/23	〔4. 東郷道路〕「第24次調査」「東郷道路」- 第24次、第24次発掘調査報告書(財)八尾市文化財調査研究会報告書29 1991
25	第25次(TG87-25)	(財)調査研究会	北本町2丁目240-242	S62/ 7/20~9/17	〔5. 東郷道路〕「第25次調査」「財团法人八尾市文化財調査研究会報告書45」1995
26	第26次(TG87-26)	(財)調査研究会	往内町1丁目28-31	S63/ 1/16~1/29	〔6. 東郷道路〕「八尾市埋蔵文化財調査報告書 62年度発掘調査報告書Ⅱ」(財)八尾市文化財調査報告書16 1988
27	第27次(TG87-27)	市教育委員会	光町2丁目40地	S63/ 1/23~1/26-5/12	〔東郷道路〕「八尾市埋蔵文化財調査報告書 62年度発掘調査報告書Ⅱ」(財)八尾市文化財調査報告書16 1988
28	第28次(TG88-28)	(財)調査研究会	光町1丁目47	S62/ 7/26~8/11	〔3. 東郷道路〕「第28次調査」「八尾市埋蔵文化財調査研究会報告書 63年度発掘調査報告書Ⅱ」(財)八尾市文化財調査報告書21 1989
29	第29次(TG88-29)	(財)調査研究会	光町2丁目28-1号	H 1/3/3~6/25	〔4. 東郷道路〕「第29次調査」「八尾市埋蔵文化財調査報告書 63年度発掘調査報告書Ⅲ」(財)八尾市文化財調査報告書25 1989
30	第30次(TG89-30)	(財)調査研究会	本町7丁目39-1	H 1/4/17~1/27	〔5. 東郷道路〕「第30次調査」「東郷道路」財团法人八尾市文化財調査研究会報告書 1995
31	第31次(TG89-31)	(財)調査研究会	光町1丁目61	H 1/5/18~7/8	〔6. 東郷道路〕「第31次調査」「八尾市埋蔵文化財調査報告書 平成元年度」(財)八尾市文化財調査研究会報告書28 1990
32	第32次(TG89-32)	(財)調査研究会	光町2丁目59	H 1/9/25~10/7	〔7. 東郷道路〕「第32次調査」「八尾市埋蔵文化財調査報告書 平成元年度」(財)八尾市文化財調査研究会報告書28 1990
33	第33次(TG90-33)	(財)調査研究会	桜ヶ丘1丁目39	H 2/5/10~6/1	〔8. 東郷道路〕「第33次調査」「八尾市埋蔵文化財調査報告書 平成元年度」(財)八尾市文化財調査報告書 1993
34	第34次(TG90-34)	(財)調査研究会	本町7丁目189-2地	H 3/1/8~1/23	〔9. 東郷道路〕「第34次調査」(TG90-34)「平成2年度」(財)八尾市埋蔵文化財調査研究会報告書 1991
35	第35次(TG90-35)	(財)調査研究会	光町2丁目19	H 3/3/4~3/19	〔10. 東郷道路〕「第35次調査」(TG90-35)「八尾市埋蔵文化財調査報告書 平成2年度」(財)八尾市埋蔵文化財調査研究会報告書 1993
36	第36次(TG91-36)	(財)調査研究会	光町1丁目37	H 3/5/20~6/18	〔11. 東郷道路〕「第36次調査」(TG91-36)「平成3年度」(財)八尾市埋蔵文化財調査研究会報告書 1992
37	第37次(TG91-37)	(財)調査研究会	本町1丁目1-1	H 3/6/3~9/30	〔12. 東郷道路〕「第37次調査」(TG91-37)「平成3年度」(財)八尾市埋蔵文化財調査研究会報告書 1992
38	東郷道路 第38次(TG91-38)	(財)調査研究会	光町2丁目5	H 4/2/19~2/20	〔13. 東郷道路〕「第38次調査」(TG91-38)「平成3年度」(財)八尾市埋蔵文化財調査報告書 1992

番号	調査名(略号)	調査主体	所在地	調査期間	文 解
39	敷39次(T092-39)	(財)調査研究会	莊内町2丁目	平4/10/26~11/7	「庄内・東郷道跡第39次調査(T092-39)」『財團法人八尾市文化財調査研究会報告書』1993
40	第40次(T093-40)	(財)調査研究会	光町1丁目51・52	H5/6/3~6/25	「庄内・東郷道跡第40次調査(T092-40)」『財團法人八尾市文化財調査研究会報告書』1994
41	第41次(T093-41)	(財)調査研究会	北本町2丁目43~5	H5/8/30~9/6	「庄内・東郷道跡第41次調査(T092-41)」『財團法人八尾市文化財調査研究会報告書』1994
42	第42次(T093-42)	(財)調査研究会	庄内町1丁目28	H5/12/1~12/13	「庄内・東郷道跡第42次調査(T093-42)」『財團法人八尾市文化財調査研究会報告書』1995
43	第43次(T093-43)	(財)調査研究会	莊内町2丁目15~18	H5/12/13~12/27	「庄内・東郷道跡第43次調査(T093-43)」『財團法人八尾市文化財調査研究会報告書』1995
44	第44次(T093-44)	(財)調査研究会	光町1丁目39~41	H6/1/10~2/9	「庄内・東郷道跡第44次調査(T093-44)」『平成5年度(財)八尾市文化財調査研究会報告書』1994
45	第45次(T093-45)	(財)調査研究会	鶴ヶ丘2丁目45~49	H6/3/16~4/1	「庄内・東郷道跡第45次調査(T093-45)」『財團法人八尾市文化財調査研究会報告書』1995
46	第46次(T094-46)	(財)調査研究会	東本町1~4丁目	H6/7/11~9/27	「庄内・東郷道跡第46次調査(T094-46)」『財團法人八尾市文化財調査研究会報告書』1995
47	第47次(T094-47)	(財)調査研究会	鶴ヶ丘3丁目34~37	H6/8/1~9/30	「庄内・東郷道跡第47次調査(T094-47)」『平成6年度(財)八尾市文化財調査研究会報告書』1995
48	第48次(T094-48)	(財)調査研究会	鶴ヶ丘1丁目23~24	H6/10/24~12/14	「庄内・東郷道跡第48次調査(T094-48)」『平成6年度(財)八尾市文化財調査研究会報告書』1995
49	第49次(T095-49)	(財)調査研究会	光町2丁目2~22	H7/6/14~8/23	「庄内・東郷道跡第49次調査(T095-49)」『財團法人八尾市文化財調査研究会報告書』1996
50	第50次(T095-50)	(財)調査研究会	庄内町36~1~37	H7/8/10~1/24	「庄内・東郷道跡第50次調査(T095-50)」『平成6年度(財)八尾市文化財調査研究会報告書』1996
51	第51次(T095-51)	(財)調査研究会	東本町4丁目26他	H8/3/18~3/28	「庄内・東郷道跡第51次調査(T095-51)」『財團法人八尾市文化財調査研究会報告書』1996
52	第52次(T095-52)	(財)調査研究会	移ヶ丘2丁目68~89-1~2	H8/10/29~11/12	「庄内・東郷道跡第52次調査(T095-52)」『財團法人八尾市文化財調査研究会報告書』1996
53	第53次(T095-53)	(財)調査研究会	北本町2丁目67~72	H8/12/2~12/12	「庄内・東郷道跡第53次調査(T095-53)」『財團法人八尾市文化財調査研究会報告書』1996
54	第54次(T097-54)	(財)調査研究会	北本町2丁目216	H9/6/16~6/19	「庄内・東郷道跡第54次調査(T097-54)」『平成9年度(財)八尾市文化財調査研究会報告書』1998
55	市税課	市教育委員会	本町1丁目	S56/3/3~3/27	未報告
56	市税委(90-531)	市教育委員会	鶴ヶ丘2丁目59	H3/10/14	「庄内・東郷道跡(90-531)の調査」『八尾市内道路平成3年度既掘開発報告書』1』八尾市文化財調査報告書25 平成3年度既掘開発事業 1992
57	市税委(91-330)	市教育委員会	本町7丁目87~2	H4/6/9~7/7	「庄内・東郷道跡(91-330)の調査」『八尾市内道路平成3年度既掘開発報告書』1』八尾市文化財調査報告書25 平成3年度既掘開発事業 1992
58	市税委(94-303)	市教育委員会	本町1丁目30~1	H3/4/22~5/1	「庄内・東郷道跡(94-303)の調査」『八尾市内道路平成3年度既掘開発報告書』1』八尾市文化財調査報告書31 平成6年度既掘開発事業 1993
59	府教委	府教育委員会	鶴ヶ丘1丁目丘上	S62/5~11	「庄内・東郷道跡(90-531)の調査」『八尾市内道路平成3年度既掘開発報告書』1』八尾市文化財調査報告書25 平成3年度既掘開発事業 1992
60	府教委(T093-1)	府教育委員会	南本町5丁目	H5/7~11/6/1	「庄内・東郷道跡(90-531)の調査」『八尾市内道路平成6年度既掘開発報告書』1』八尾市文化財調査報告書25 平成6年度既掘開発事業 1993
61	市税委(86-531)	市教育委員会	本町3丁目5	S62/5/18	2. 庄内・東郷道跡(86-531)の調査」『八尾市内道路平成6年度既掘開発報告書』1』八尾市文化財調査報告書25 平成6年度既掘開発事業 1993
62	第63年度調査地	府教育委員会	本町3丁目5~1	H7/6/7~8/22	「庄内・東郷道跡(91-330)の調査」『八尾市内道路平成3年度既掘開発報告書』1』八尾市文化財調査報告書25 平成3年度既掘開発事業 1992
63	八尾市内道跡 第1次(T095-1)	(財)調査研究会	本町3丁目106~107	H7/6/7~8/22	「庄内・東郷道跡(91-330)の調査」『八尾市内道路平成3年度既掘開発報告書』1』八尾市文化財調査報告書25 平成3年度既掘開発事業 1992
64	第2次(T097-2)	(財)調査研究会	本町2丁目149~1	H9/5/26~6/3	「庄内・東郷道跡第2次調査(T097-2)」『平成9年度(財)八尾市文化財調査研究会報告書』1998
65	第3次(T097-3)	(財)調査研究会	本町5丁目55~1~3	H9/12/9~12/15	「庄内・東郷道跡第3次調査(T097-3)」『平成9年度(財)八尾市文化財調査研究会報告書』1998
66	東郷道跡 府教委	府教育委員会	鶴ヶ丘5丁目	—	—
67	第12次(T092-12)	(財)調査研究会	施ヶ丘5丁目85~2他	H4/2/10~6/9	32. 施ヶ丘道跡第12次調査(T091-12)」『平成3年度(財)八尾市文化財調査研究会報告書』1992
68	第14次(T093-14)	(財)調査研究会	施ヶ丘4丁目1~1~1他	H5/8/2~H6/3/14	「庄内・東郷道跡第14次調査(T093-14)」『平成5年度(財)八尾市文化財調査研究会報告書』1994
69	成法寺道跡 第5次調査(T091-9)	(財)調査研究会	光町1丁目2~33	H3/10/30~11/1	「八尾市理化産業開拓調査委員会XIV」(財)八尾市文化財調査研究会報告書39 1993
70	府教委(T093-1)	府教育委員会	南本町5丁目	H5/7~H6/1/1	「成法寺道跡発掘調査概要・Ⅰ」大阪府教育委員会 1994
71	府教委 第5次調査	府教育委員会	南本町1丁目	H3/5~9/	「成法寺道跡発掘調査概要・Ⅱ」大阪府教育委員会 1992
72	府教委 第5次調査	府教育委員会	南本町所在	S60/11/11~12/18	「成法寺道跡発掘調査概要・Ⅲ」大阪府教育委員会 1988
73	府教委 第2次調査	府教育委員会	南本町所在	S61/7/12~10/31	「成法寺道跡発掘調査概要・Ⅳ」大阪府教育委員会 1987
74	府教委 第5次調査	府教育委員会	南本町1丁目	S62	—
75	府教委 第4次調査	府教育委員会	高美町1丁目	S63/10~12	「成法寺道跡発掘調査概要・V」大阪府教育委員会 1989
76	府教委 第5次調査	府教育委員会	高美町1丁目・南本町1丁目	H1/9~10	「成法寺道跡発掘調査概要・VI」大阪府教育委員会 1990
77	府教委 第5次調査	府教育委員会	南本町1丁目・南本町4~5丁目・南本町1丁目	H1/7~H8/3	「東郷・成法寺道跡発掘調査概要・VII」大阪府教育委員会 1997
78	府教委 第5次調査	府教育委員会	莊内町1丁目	H8/6~7/	「東郷・成法寺道跡発掘調査概要・VIII」大阪府教育委員会 1997
79	小浜台1次調査	調査研究センター	若草町1丁目	H9/12/~10/12	未報告

## 第2章 地理・歴史的環境

東郷遺跡は、大阪府八尾市のはば中央部に位置する北本町1・2丁目、本町1・7丁目、東本町1~5丁目、光町1・2丁目、桜ヶ丘1~4丁目、荘内町1・2丁目一帯に存在する弥生時代中期~鎌倉時代に至る複合遺跡である。東郷遺跡の位置する八尾市の中央部は、東を生駒山地、西を上町台地、南を羽曳野丘陵、北を淀川に面された河内平野の中南部にある。

河内平野の形成過程については、地質学の分野から後氷期の古大阪平野の時代から大阪平野Ⅱの時代に至る九つの時代の発達史が示されている他、地理的には、旧大和川主流の長瀬川・玉串川をはじめとする数多くの中小河川による堆積作用により、南から北にかけて扇状地性低地(氾濫原)・三角州性低地・潟湖性低地の順に地形形成が行われたものとされている。河内平野の中南部に成立した遺跡群は、このような地形的条件に左右されながらも基本的には、旧大和川水系のもたらす豊富な水量と豊かな土壤を背景に、水稻耕作の初期段階から数多くの遺跡が成立してきた。東郷遺跡はこのような遺跡のひとつであり、旧大和川水系中の長瀬川と玉串川に挟まれた扇状地性低地(氾濫原)に位置している。東郷遺跡の成立を見たこの扇状地性低地(氾濫原)は、八尾市の二俣地区を起点として北西方向にデルタ状に展開しており、南から東弓削・中田・矢作・小阪合・成法寺・東郷・佐堂・美園・萱振・西郡廃寺・山賀の各遺跡が連鎖的に存在している。これらの遺跡の大半が弥生時代前期~後期段階に成立しており、それ以降の時期も比較的周密な遺跡分布が看取されており、発掘調査件数の増加と相俟って考古学的な資料の蓄積も多い。以下、東郷遺跡を中心として遺跡内の集落動態を時期毎に概観する。

### 弥生時代

東郷遺跡の成立は、上記の遺跡群のなかでは比較的遅く、弥生時代中期後半(畿内第IV様式)である。この時期の集落は、遺跡範囲の中央部の第15次(TG 83-15)・第49次(TG 95-49)で検出されているが、散発的で時期的にも限定されることから、比較的短期間で小規模な集落であったことが推定される。なお、第49次(TG 95-49)からは、紀伊産の土器が出土しており、当時の地域間交流の一端が窺える。続く弥生時代後期においても、遺跡範囲東部の第13次(TG 82-13)・第33次(TG 90-33)で検出されている程度で、前代と同様小規模な集落であったようである。また、特筆すべき遺物としては自然河川からの出土ではあるが、府教委昭和62~63年度の楠根川改修に伴う調査で、吉備地方産の向木見型特殊器台の小片が出土しており注目される。<sup>注5</sup>

### 古墳時代

古墳時代初頭(庄内式期)~前期(布留式期)の集落は、現在の近鉄八尾駅北側を中心とする一帯で検出されている。庄内式期では、第5次(TG 81-5)・第8次(TG 81-8)・第11次(TG 82-11)・第14次(TG 82-14)・第35次(TG 90-35)を中心に竪穴住居と掘立柱建物で構成される居住域が形成されており、この居住域に北接する第17次(TG 83-17)・第21次(TG 86-21)<sup>注6</sup>で方形周溝墓を中心とする墓域が形成されている。生産域は居住域西部の第25次(TG 87-25)<sup>注7</sup>で検出されており、さらに西部に拡がることが推定される。なお、庄内式期の居住域の南端から第46次(TG 94-46)<sup>注8</sup>調査のD区で検出されたN R-201にかけては沼沢地が拡がっていたものと推定されており、それらを総合すれば庄内式期の集落は自然河川の北側に東西方向に展開した微

高地上に形成されており、その規模は東西400m以上、南北約250mが想定される。続く、布留式期古相においては、中河内地域全般において当該期の集落が増加したことが明晰にされており、本遺跡においてもその傾向は顕著で、前代に比して集落の分散と拡大化が認められている。庄内式期の居住域を踏襲するものは第5次(T G81-5)・第28次(T G88-28)程度で、集落の中心は東部の市教委86-22・第33次(T G90-33)・第43次(T G93-43)・第47次(T G94-47)・第48次(T G94-48)の各調査区を包括して南北方向に広く展開している。さらに、遺跡範囲の南西部の市教委昭和56年度調査(八尾小学校プール)から南の成法寺遺跡に續く集落の存在が確認されており、これらを含めて少なくとも布留式期古相段階においては3箇所で居住域が想定される。この時期に成立した集落は比較的短期間の存続で、その後一時期断絶した後、布留式期新相段階に遺跡範囲の南西部の本調査地西区付近で集落が形成されている。古墳時代中期(5世紀中葉以降)の集落は遺跡範囲の東部に集中して検出されている。居住域は、遺跡東部の第1次(T G80-1)・第2次(T G81-2)・第47次(T G94-47)で検出されているほか、墓域としては、第24次(T G87-24)で円筒埴輪を伴う方墳1基が検出されている。続く、後期の居住域は第1次(T G80-1)・第6次(T G81-6)・第23次(T G86-23)で検出されており、中期の居住域に重複する形で推移している。

#### 飛鳥時代～奈良時代

飛鳥時代の集落は遺跡東部および本調査地を含む南西部で検出されている。東部では、第45次(T G93-45)で検出されている他、桜ヶ丘2丁目59では平成3年1月の市教委(90-531)の調査で東郷廃寺と命名された古代寺院跡の存在が確認されている。東郷廃寺は原山廃寺式の軒丸瓦を創建瓦とするもので、出土した屋瓦から飛鳥時代後期(7世紀中葉)～平安時代(9世紀前半)の存続が推定されている。東郷廃寺の西部を中心として、古墳時代後期から存続する集落が存在しており、これらが東郷廃寺の建立を推進した古代氏族の居住地と推定される他、寺院跡に東接する地点で行われた河川改修工事に伴う調査では統一新羅系土器が出土しており、造営氏族の出自を考える上で示唆的である。一方、遺跡南東部にあたる本調査地の東区で検出され水田については、南方の成法寺遺跡で検出された第1次(S H82-1)・第3次(S H87-3)・第7次(S H91-7)・第8次(S H91-8)の居住域に関連するものと考えられる。奈良時代の集落も前代と同様、東郷廃寺の西部を中心に展開しており、東郷遺跡の南約200m地点の若草町で平成9年～平成10年に(財)大阪府文化財調査研究センターにより実施された小阪合遺跡第1次調査では、居住域を構成する遺構群が検出されている。なお、当遺跡発見の嚆矢となった東本町2丁目(光明寺裏付近)出土の墨書き入土器については、遺物の性格からみて南方の成法寺遺跡内で検出された集落との関係が推定される。

#### 平安時代～鎌倉時代

平安時代前半の集落は、遺跡東部の東郷廃寺周辺の第1次(T G80-1)・第33次(T G90-33)・第47次(T G94-47)・第48次(T G94-48)・第52次(T G95-52)で検出されているが、この時期に集中する傾向が顕著であり、この時期に廃絶したと考えられる東郷廃寺に符合して、集落も移動を余儀なくされたものと推定される。その後、新たに集落が形成されるのは平安時代後期段階で、遺跡の中央部から西部にかけての広い範囲でその拡がりが確認されている。なかでも、遺跡西部の常光寺や式内社の栗栖神社(現八尾神社)周辺で検出された平安時代後期(12世紀前半)

の集落はその後、鎌倉時代後半(13世紀)に至るまで継続している。

#### 室町時代～戦国時代

南北朝の動乱期には、遺跡範囲西部の栗栖神社(現八尾神社)を含む八尾城一帯は南北朝攻防の最前線であったようで、延元二年(1337)には八尾城の堂舎、仏閣、矢蔵、役所が焼失したことが記されている。その後、南北朝の動乱が終息した元中三年(1386)に又五郎大夫藤原盛継により常光寺の新伽藍が建立されている。常光寺の北西位置で行われた発掘調査では、14世紀代の遺物とともに焼土が検出されており、これらが延元二年(1337)の戦記に關わる可能性が高い。室町時代末期には畠山氏の家督繼承に端を発する応仁の乱が勃発し、八尾城も若江城や萱振城などと共に、30年にわたって戦乱の巷となった。天正八年(1580)の織田信長の近畿統一後、八尾城はキリスト教大名の池田丹後守教正の配下になり、当時八尾には、800人のキリストianと仮聖堂2箇所があったことが記されている。この様に、室町時代～戦国時代の長きにわたって河内地域は戦乱の渦中で、この時期の集落は、防御を目的として集約された集村化を余儀なくされたようである。この時期の集村化は中河内地区の全域で見られる現象で、東郷遺跡においても14世紀以降の集落は、八尾城内周辺で僅かに検出されているに過ぎない。

#### 江戸時代～明治

近世初頭の慶長十一年(1606)には、東郷遺跡に西接する地に久宝寺寺内町の住人と顕証寺により八尾寺内町が形成されている。八尾寺内町は江戸時代後半には八尾の中核的な地域となり、宝永元年(1704)<sup>註38</sup>の大和川付け替え以後は、久宝寺寺内町をしのぐ河内木綿の集産地として栄えた。本調査の西区が八尾寺内町の南東部分にあたる。明治新政府の成立後は、当地は中河内の行政の中心地で、明治二年(1869)1月河内県、同年8月には堺県の管轄となり、一時期、八尾寺内町大信寺に仮役所が設けられている。

#### 註記

- 註1 高萩千秋 1989「I 東郷遺跡(第5節 第15次調査)」(財)八尾市文化財調査研究会報告17
- 註2 原田昌則 1996「IV 東郷遺跡(第49次調査)」(財)八尾市文化財調査研究会報告54
- 註3 高萩千秋 1989「I 東郷遺跡(第3節 第13次調査)」(財)八尾市文化財調査研究会報告17
- 註4 高萩千秋 1993「IV 東郷遺跡第33次調査(TG90-33)」「八尾市埋蔵文化財発掘調査報告Ⅲ」(財)八尾市文化財調査研究会報告41
- 註5 奥 和之他 1989「東郷遺跡発掘調査概要・I」大阪府教育委員会
- 註6 高萩千秋 1983「第8章 東郷遺跡発掘調査概要報告 第5節 第5次調査」「八尾市埋蔵文化財発掘調査概報1980・1981」八尾市教育委員会
- 註7 高萩千秋 1983「第8章 東郷遺跡発掘調査概要報告 第7節 第8次調査」「八尾市埋蔵文化財発掘調査概報1980・1981」八尾市教育委員会
- 註8 高萩千秋 1988「I 東郷遺跡(第11次調査)」(財)八尾市文化財調査研究会報告17
- 註9 高萩千秋 1988「I 東郷遺跡(第14次調査)」(財)八尾市文化財調査研究会報告17
- 註10 坪田真一 1993「V 東郷遺跡第35次調査(TG90-35)」「八尾市埋蔵文化財発掘調査報告Ⅲ」(財)八尾市文化財調査研究会報告41
- 註11 駒沢 敬 1985「I 東郷遺跡発掘調査概要調査」(財)八尾市文化財調査研究会報告6
- 註12 米山敏幸 1986「東郷遺跡第21次埋蔵文化財発掘調査概要」八尾市文化財報告13 八尾市教育委員会
- 註13 西村公助 1995「I 東郷遺跡(第25次調査)」(財)八尾市文化財調査研究会報告45
- 註14 西村公助 1995「IV 東郷遺跡(第46次調査)」(財)八尾市文化財調査研究会報告48

- 註15 西村公助 1989「3 東郷遺跡(第28次調査)」『八尾市文化財調査研究会年報 昭和63年度』(財)八尾市文化財調査研究会報告25
- 註16 米田敏幸 1987「東郷遺跡第22次発掘調査報告」八尾市文化財報告15 八尾市教育委員会
- 註17 高萩千秋 1993「IV 東郷遺跡第33次調査(T G90-33)」(財)八尾市文化財調査研究会報告41
- 註18 高萩千秋 1994「X IV 東郷遺跡第43次調査(T G93-43)」(財)八尾市文化財調査研究会報告42
- 註19 岡田清一 1995「19. 東郷遺跡第47次調査(T G94-47)」『平成6年度』(財)八尾市文化財調査研究会事業報告
- 註20 岡田清一 1995「20. 東郷遺跡第48次調査(T G94-48)」『平成6年度』(財)八尾市文化財調査研究会事業報告
- 註21 昭和56年度市教委調査 未報告
- 註22 高萩千秋 1981「東郷遺跡発掘調査概要」「八尾南遺跡・東郷遺跡発掘調査概要」八尾市文化財調査報告6 昭和55年度国庫補助事業
- 註23 米田敏幸 1983「第8章 東郷遺跡発掘調査概要報告 第2節第2次調査」「八尾市埋蔵文化財発掘調査概報1980・1981」八尾市教育委員会
- 註24 高萩千秋 1991「第2章 第24次調査」「東郷遺跡」-第23次・第24次発掘調査報告書(財)八尾市文化財調査研究会報告29
- 註25 白神典之・森田 実 1983「第8章 東郷遺跡発掘調査概要報告 第6節第6次調査」「八尾市埋蔵文化財発掘調査概報1980・1981」八尾市教育委員会
- 註26 高萩千秋 1991「第2章 第23次調査」「東郷遺跡」-第23次・第24次発掘調査報告書(財)八尾市文化財調査研究会報告29
- 註27 岡田清一 1995「III 東郷遺跡(第45次調査)」「東郷遺跡」(財)八尾市文化財調査研究会報告48
- 註28 沂 真 1995「東郷廐寺発掘調査報告」「八尾市文化財紀要7」八尾市教育委員会文化財課
- 註29 前掲註5
- 註30 原田昌則 1991「成法寺遺跡(第1次調査)」(財)八尾市文化財調査研究会報告33
- 註31 高萩千秋 1991「成法寺遺跡(第3次調査)」(財)八尾市文化財調査研究会報告33
- 註32 坪田真一 1996「I 成法寺遺跡(第7次調査)」(財)八尾市文化財調査研究会報告51
- 註33 坪田真一 1996「II 成法寺遺跡(第8次調査)」(財)八尾市文化財調査研究会報告51
- 註34 平成9~10年度調査
- 註35 西岡三四郎 1977「人面土器」「八尾市史(文化財編)」八尾市役所
- 註36 高萩千秋 1998「X IV 東郷遺跡第52次調査(T G96-52)」(財)八尾市文化財調査研究会報告60
- 註37 鳴村友子 1988「2. 東郷遺跡(86-531)の調査」八尾市文化財調査報告17
- 註38 櫻井敏雄・大草一憲 1988「寺内町の基本計画に関する研究-久宝寺寺内と八尾寺内を中心として」八尾市教育委員会

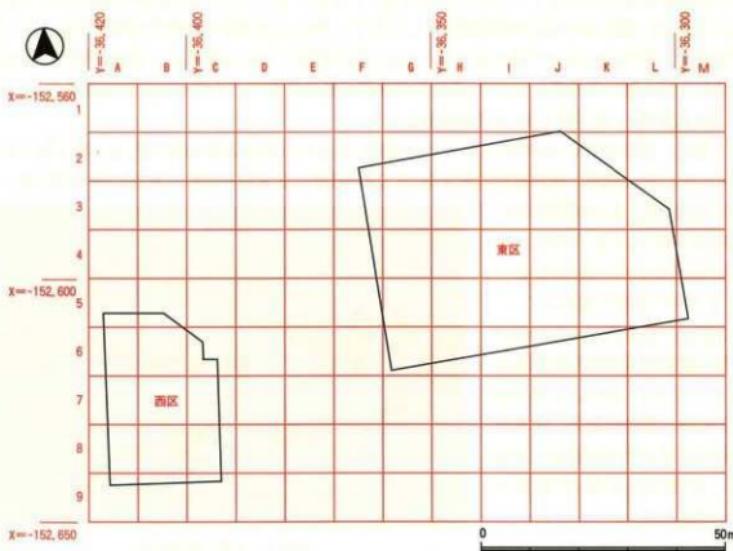
## 第3章 調査概要

### 第1節 調査の方法と経過

今回の発掘調査は、八尾市の市庁舎建て替え工事に先立って実施したもので、調査対象地が府道近鉄八尾停車場線を挟んで東西に二分されていることから、旧市庁舎跡である東側を東区、旧税務署跡である西側を西区と呼称した。調査面積は東区が2432m<sup>2</sup>、西区が745m<sup>2</sup>で総調査面積は3177m<sup>2</sup>を測る。なお、府道近鉄八尾停車場線を挟んで東が東郷遺跡、西が八尾寺内町遺跡の範疇に区別され、東区と西区で遺跡名を異にするが、ここでは便宜上東郷遺跡第37次調査(TG91-37)とした。

調査地の地区割りは、国土座標軸第VI座標系を基準として北西隅(X = -152,560,000、Y = -36,420,000)を起点として東西方向130m、南北方向90mにわたって調査地全域を区画した。一区画単位は10m四方で、地区の表示は東西方向がアルファベット(西からA～M)、南北方向がアラビア数字(北から1～9)とし、地区の表示には、1 A地区～9 M地区と呼称した。地点の表示には、国土座標(第VI系)の数値を使用した。

調査の方法は、東区では現地表下2.2m前後、西区では現地表下1.4m前後までを重機により掘削し、以下0.7m～1mについては、層理に従って人力掘削を実施し遺構・遺物の検出に努めた。



第2図 調査地設定図および地区割り図

また、最終調査面からさらに幅1m、深さ1m前後のトレンチを適宜設定し、下層部分の遺構・遺物の有無および、遺跡形成以前の環境等の把握を視野に入れた下層確認調査を行った。

調査では、東区で2面(第1面・第2面)、西区で3面(第1面～第3面)を調査対象とした。

その結果、東区では第1面で飛鳥時代と平安時代後期、第2面で古墳時代後期に比定される遺構・遺物が検出された。西区では、第1面で近世末期～近代、第2面で平安時代後期と近世初頭、第3面で古墳時代前期(布留式中相～新相)に比定される遺構・遺物が検出された。両地区で検出された遺構名の表示については、東区ではE、西区ではWを遺構略号の頭に冠し、さらに3桁目の数字で調査面を示した。

出土遺物の総数はコンテナ箱に37箱程度で、その大半が西区の第2面と第3面で検出した遺構から出土している。

なお、平成3年8月25日に東区の第2面と西区の第1面を対象に現地説明会を実施した結果、277名の参加があった。

## 第2節 調査成果

### 1. 東区の調査

市庁舎本館の建築予定地に設定した調査区で、調査面積は2432m<sup>2</sup>を測る。重機による上部掘削の結果、調査対象地の大半が、昭和25年と昭和32年による旧市庁舎の建築に関わる掘削工事等により、大規模な搅乱を受けていることが判明した。なかでも、旧市庁舎建物の基礎杭として打設された木杭が、東区全体で約800本が残存しており、特にこの部分での搅乱が顕著であった。搅乱の深度は、最も深い部分で現地表下約2.8mに及び東区での基本層序とした第13層暗青灰色シルト混じり粘土層にまで達しており、平安時代後期以降の生活面の大半が既に削平を受けていた。調査では2面(第1面・第2面)を調査対象とした。

第1面は、現地表下2.4m前後(T.P.+6.7m前後)付近に存在する第12層灰色粘土層上面を調査対象とした。その結果、飛鳥時代の溝4条(E S D-101～E S D-104)・水田12筆(水田101～水田112)・大畦畔1条(大畦畔101)・

自然河川1条(E N R-101)、平安時代後期の井戸4基(E S E-101～E S E-104)を検出した。

第2面は、第1面から0.4～0.6m下部の第14層暗青灰色粘土層上面(T.P.+6.2m～6.0m)を調査対象面とした。調査の結果、古墳時代後期の水田2筆(水田201・水田202)、自然河川1条(E N R-201)を検出した。



写真2 東区 調査風景

## 1) 東区基本層序

調査区の東部では、自然河川のE NR-101の堆積土である中粒砂～粗粒砂が優勢な層相が確認できたが、それ以外は、前述したように、旧市庁舎の建築に際して一部で第13層付近(現地表下2.8m前後)まで搅乱がおよんでいた。ここでは比較的残りの良い北壁を中心に16層(第0層～第15層)を抽出して基本層序とした。

- 第0層 盛土および搅乱層。層厚1.1～1.2m。
- 第1層 2.5Y5/1黄色シルト混じり細粒砂。層厚0.05m前後。
- 第2層 2.5Y5/4黄褐色シルト混じり細粒砂。層厚0.15m前後。
- 第3層 2.5Y4/4オリーブ褐色粘土質シルト。層厚0.1m。
- 第4層 2.5Y4/6オリーブ褐色粘土質シルト。層厚0.1m。
- 第5層 7.5Y5/3灰オリーブ色粘土質シルト。層厚0.05m前後。
- 第6層 7.5Y5/1灰色粘土質シルト。層厚0.15m前後。
- 第7層 5G Y5/1オリーブ灰色粘土質シルト。層厚0.2m前後。
- 第8層 10G Y4/1暗緑灰色粘土質シルト。層厚0.1m前後。
- 第9層 5B G4/1暗青灰色粗粒砂混じり粘土質シルト。層厚0.1m。
- 第10層 10B G4/1暗青灰色シルト混じり細粒砂。層厚0.1m。
- 第11層 10B G4/1暗青灰色シルト～粗粒砂。層厚0.4m前後。飛鳥時代の水田の上面を覆う土層。
- 第12層 N4/灰色粘土。層厚0.15m前後。飛鳥時代の水田を検出(第1面)。
- 第13層 5B4/1暗青灰色シルト混じり粘土。層厚0.25m前後。古墳時代後期の水田を検出(第2面)。
- 第14層 5B3/1暗青灰色粘土。層厚0.4m前後。古墳時代後期の水田を検出(第2面)。
- 第15層 5B4/1暗青灰色粘土。層厚0.4m前後。

## 2) 東区検出遺構

## ・第1面

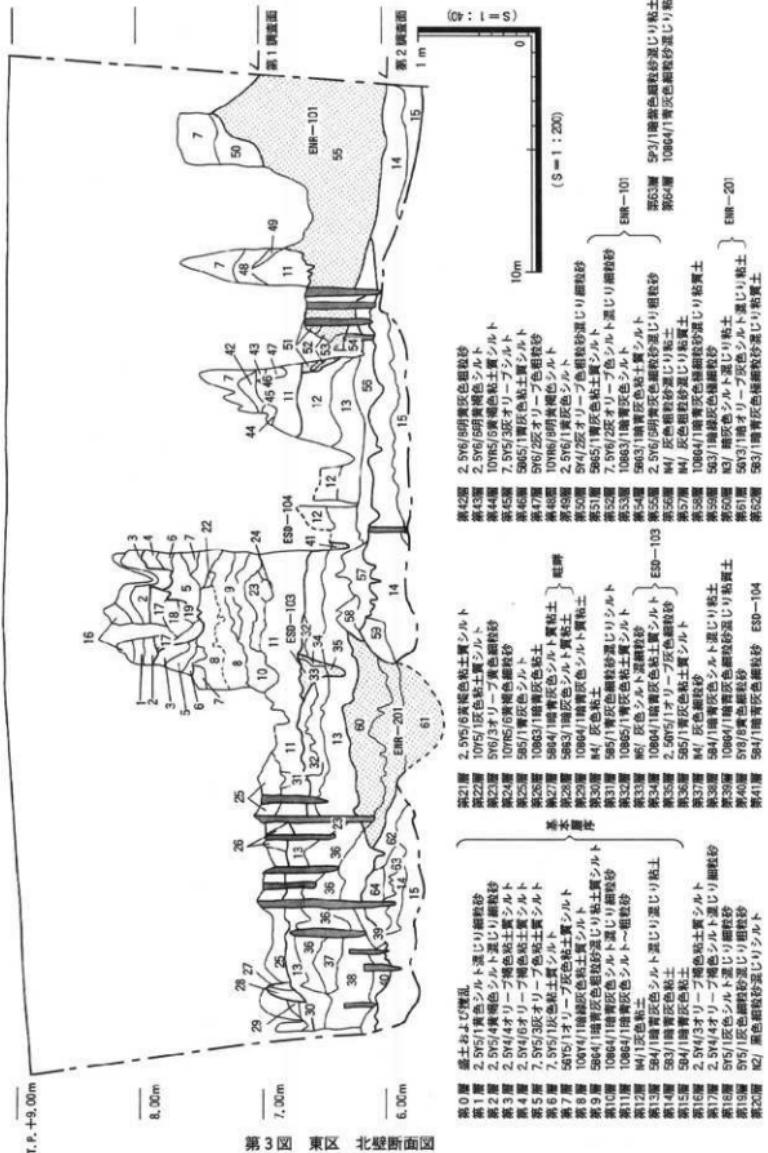
第1面は第12層灰色粘土層上面(T.P.+6.7m前後)を調査対象とした。その結果、飛鳥時代中葉～末期の溝4条(E SD-101～E SD-104)・水田12筆(水田101～水田112)・大畦畔1条(大畦畔101)・自然河川1条(E NR-101)、平安時代後期の井戸4基(E SE-101～E SE-104)を検出した。ただ、平安時代後期の井戸遺構については、一部を除き上部が既に搅乱により削平を受けており、曲物井戸側の最下部が検出されたのみであり、本来の構築面は第11層上面と想定される。

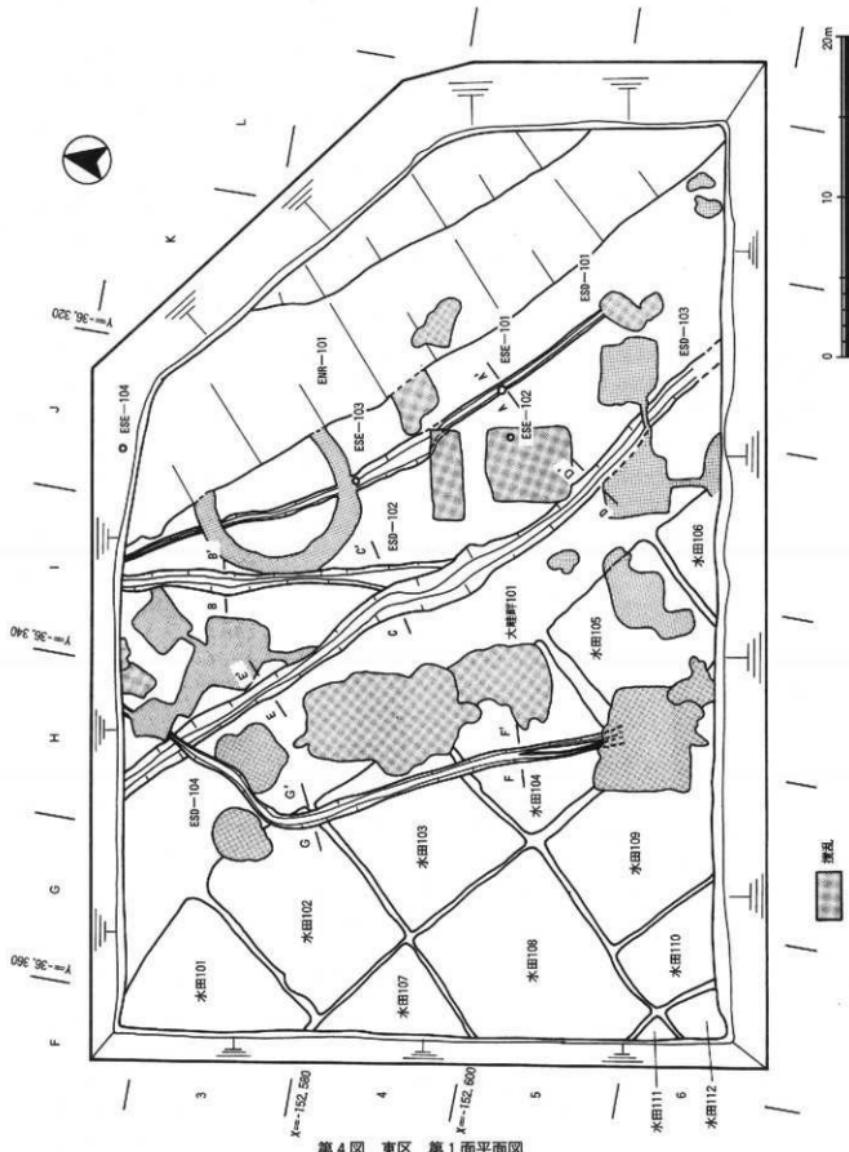
## 溝(E SD)

## E SD-101

調査区の東部で検出した。E NR-101の西岸に併行して南東～北西方向に伸びるもので、検出長34m、幅0.31～1.90m、深さ0.07～0.32mを測る。埋土は緑灰色シルトである。遺物は飛鳥時代に比定される土師器杯が1点(1)出土している。土師器杯(1)は口縁部の一部を欠く以外は完存している。口径9.6cm、器高3.2cmを測る。やや深めの体部から口縁部が直上近くに伸びるもの

第3図 東区 北壁断面図





第4図 東区 第1面平面図

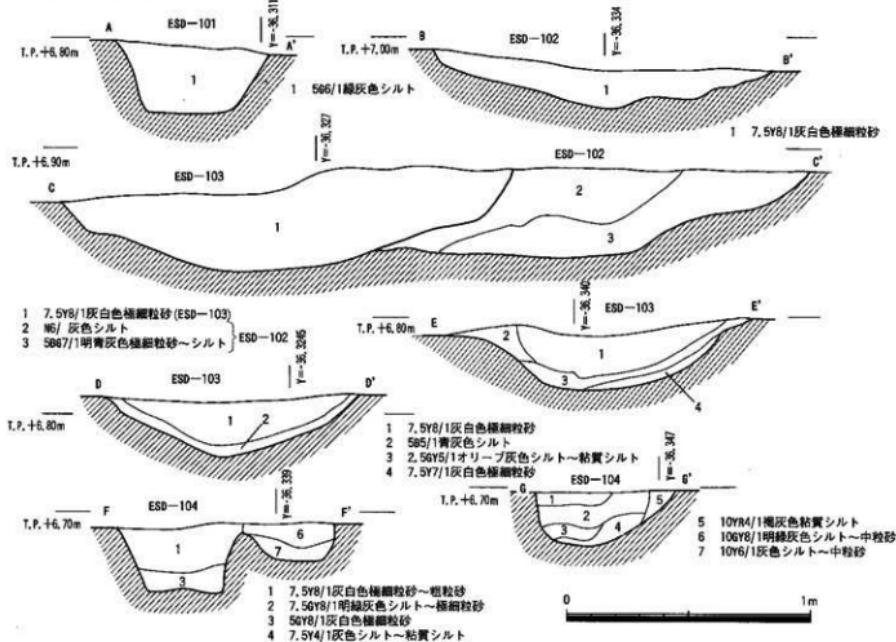
で、口縁端部内面は小さく内傾する面を有している。口縁部内外面および内面体部はヨコナデ、体部中位以下は弱いナデが施されている。体部内面に放射状暗文が認められる。形態や製作技法からみて土師器杯Cにあたり、飛鳥Ⅱ期(7世紀前葉～中葉)に比定されよう。

### ESD-102

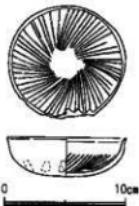
南北方向に直線的に伸びるもので、南端はESD-103に切られている。検出長18.8m、幅0.66～1.5m、深さ0.15～0.28mを測る。ただ、4I地区より南部のESD-103についても、本来はESD-102の流路であった可能性が高い。埋土は上から灰色シルト・明青灰色極細粒砂～シルトである。遺物は出土していない。

### ESD-103

大畦畔101の東側に並行して東区の中央部を南東～北西方向に伸びるもので、検出長45.8m、幅0.74～2.25m、深さ0.16～0.36mを測る。ESD-102でも触れたように、4I地区より南側については、ESD-102の流路を踏襲する形で再度開削されたことが推定される。溝底南端と北端の高低差は約0.2mで北が低く、南から北への流路方向が推定される。埋土は、4層が堆積している。遺物は出土していない。



第6図 東区 ESD-101～ESD-104断面図



第5図 東区  
ESD-101出土遺物実測図

**E S D -104**

南部は搅乱を受けており不明であるが、5 H 地区北部で2条の溝が合流して南北方向に伸びた後、3 H 地区西部で流路を北東方向に変えている。検出長35.8m、幅0.41~1.1m、深さ0.24~0.43mを測る。埋土は灰白色の色調を呈する極細粒砂~粗粒砂で充填されている。遺物は出土していない。なお、この溝は水田(水田102~水田104)、溝(E S D -103)を切っており、水田の廃絶後(7世紀中葉以降)に開削されたものである。

**水田****水田(水田101~水田112)**

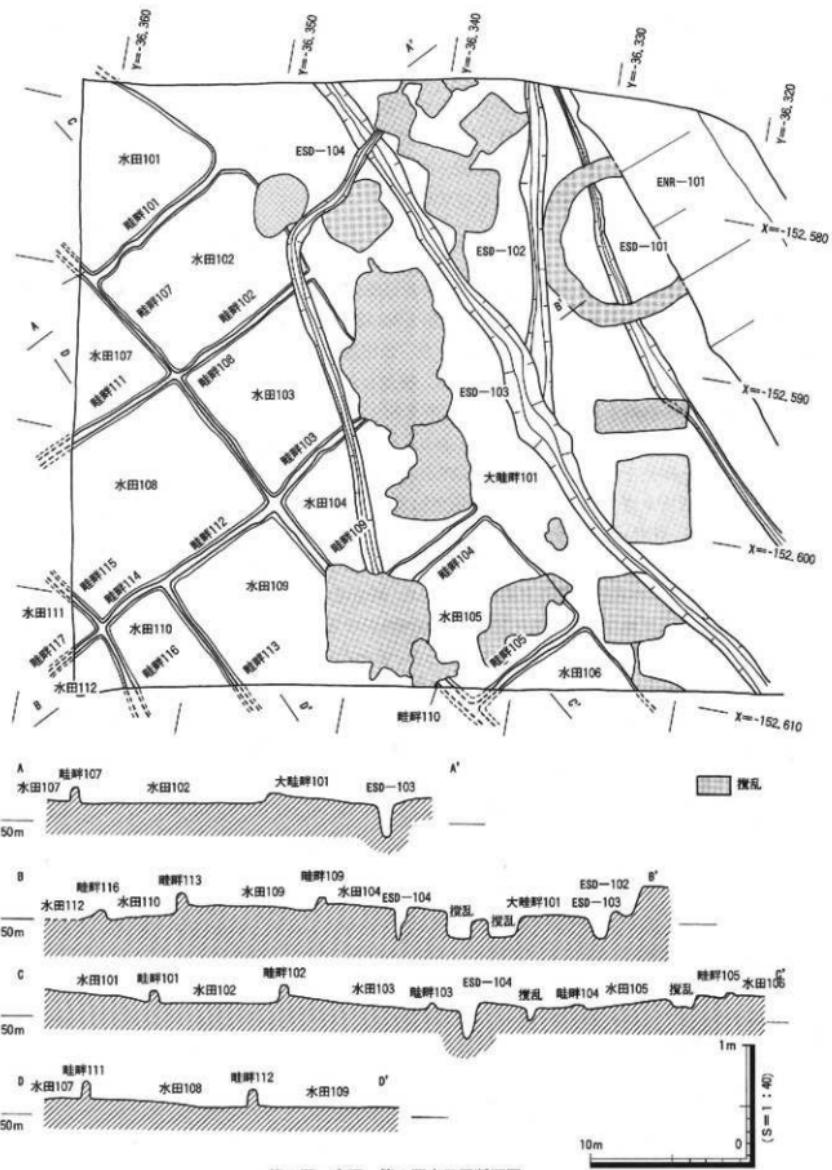
水田は調査区の中央部から西部にかけて総数12筆を検出した。上部からの搅乱により南部においては不明瞭な部分があるが、その他は水田上部に第11層暗青灰色シルトが水田全体を覆う形で堆積していたため、遺存状態は良好であった。水田遺構は灌漑水利の中核を成すE N R -101の左岸に流路方向に沿う形で形成されている。検出した部分からみて、基本的には大畦畔101に並行して伸びる小畦畔とそれに直交する小畦畔を配することで方形を呈する水田群が形成されている。水田は第12層灰色粘土を耕土としており、水田面の高さは大畦畔101に沿った部分が最も高くT.P+6.7m前後を測り、そこから西に向かってわずかに傾斜しており南西部の最も低い部分でT.P+6.5m前後を測った。畦畔は第12層灰色粘土を台形状に積み上げられたもので、上面幅0.2m、基底幅0.6m、畦畔高0.1mを測る。水田の田積は、一筆耕地が明確な水田102が89m<sup>2</sup>、水田103が86m<sup>2</sup>、水田104が64m<sup>2</sup>を測るほか、水田108のようにやや大型のものや、水田110のような小型のものがある。これらの水田の灌漑水利については、調査区内では確認できなかったが、おそらく水田遺構に並行して伸びるE N R -101から大畦畔101の東側に沿ってE S D -103に分水し、さらに水田遺構に取水したものと推定される。ただ、個々の水田に水口が設けられていないことから、緩傾斜面を利用して大畦畔101に並行する東部水田から西部の水田への順に灌漑水利を行ったものと考えられる。なお、水田耕土中の酸化鉄・マンガンの集積が未発達であることから水田土壤としては、地下水位の高い有機質低位水田土壤が想定されよう。水田上面を覆う第11層については、E N R -101を起因とする洪水堆積によるものと推定され、水田部分の第11層から出土した土師器土釜(34)から勘案して飛鳥時代中葉(7世紀中葉)には水田の機能を無くしていたものと推定される。

**大畦畔****大畦畔101**

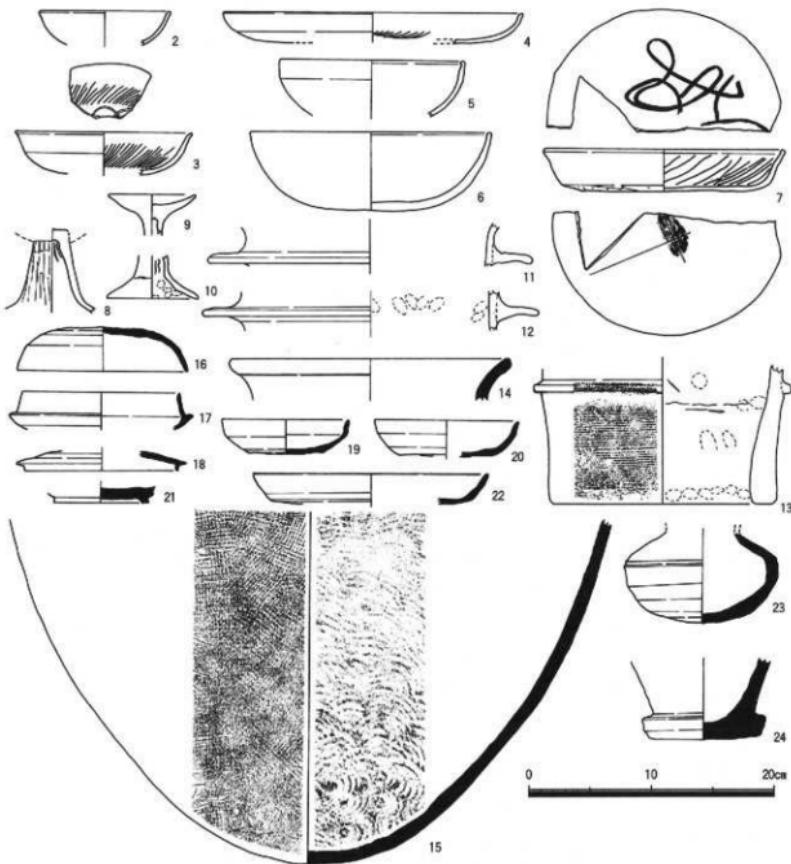
E N R -101の西岸に沿って南東~北西方向に伸びるもので、西側は水田遺構、東側はE S D -103によって画されている。検出長49.5m、幅3.9~7.0mを測る。E N R -101西岸に形成された自然堤防上に沿って伸びるもので、人工的な盛土等は行われていない。遺構の性格としては、水田区画および道路の両機能を備えたものである。

**自然河川(E N R )****E N R -101**

東区の東部で検出した。検出部分は自然河川の西岸部分で、東岸が調査区外に至るために全容は不明であるが、検出部分からみて南東から北西方向に流れるものと考えられる。検出長40m、幅10m、深さ0.79mを測る。埋土は灰白色的細粒砂~粗粒砂で充填されており、流勢が強い河川で



第7図 東区 第1面水田平面断面図



第8図 東区 第1面E N R-101出土遺物実測図

あったことが窺われる。

遺物は、弥生時代中期～奈良時代中期に比定される土器類がコンテナに1箱程度出土している。土器類の大半が小片でローリングを受けており、出土量に比して図化し得たものは少ない。23点(2～24)を図化した。その内訳は土師器・杯3点(2・3・7)・楕1点(5)・鉢1点(6)・皿1点(4)・高杯3点(8～10)・土釜2点(11・12)・円筒埴輪1点(13)・須恵器・甕2点(14・15)・短頸壺1点(23)・杯蓋2点(16・18)・杯身4点(17・19～21)・皿1点(22)・鉢1点(24)である。土師器杯は口径10.6cm、器高2.9cmを測る小型品(2)、口径14.4cm、器高3.5cmを測る中型品(3)、口径18.2cm、器高3.6cmを測る大型品(7)がある。(3)は見込みに連弧状暗文、体部内

面に放射状暗文が施文されているもので、土師器杯Cにあたる。7世紀中葉に比定されよう。(7)は土師器杯Aにあたる。内面の見込みに螺旋状暗文、体部に放射状暗文が施文されており、外面底部中央にはヘラ描きによる「×」記号の上に墨書きにより1.0~1.5cm幅の直線が記されているが、その部分以外は破損しており文字か記号かの判別はできない。外底部はヘラケズリによる調整が行われている。形態の特徴から平城宮Ⅲ期(8世紀中葉)に比定されよう。(5)は土師器碗で復元口径15.0cmを測る。鉢(6)は復元口径19.7cm、器高6.7cmを測る。内面から口縁部にかけて煤・炭化物により黒灰色に変色しており、蓋として利用されたものと推定される。外面についても熱変と風化のため調整は判然としない。皿(4)は土師器皿Aに分類されるもので、直口の口縁部を持つ。土師器高杯は3点図化した(9・10)は小型の手づくね品である。(8)は土師器高杯の柱状部で古墳時代前期に比定される。(11・12)はほぼ水平方向に伸びる鋸を有する土師器土釜である。ともに生駒西麓の胎土を有する。(13)は円筒埴輪の最下段の1/4程度が残存している。復元底径17.6cmを測る。凸帯の隆起は高く、断面形状は台形を呈する。器面調整は一次調整がタテハケ、二次調整がB種ヨコハケである。以上の特徴に加えて無黒斑であることから川西宏幸氏分類のⅣ期(5世紀中~後半)に比定されよう。(23)は須恵器短頸壺で、体部の約1/2が残存している。体部の中位に沈線が1条廻る。(14)は口縁端部が玉環状を成す須恵器壺の口縁部である。復元口径22.8cmを測る。(15)は須恵器の大型壺の体底部である。内面に青海波タタキ、外面に格子状タタキが施されている。須恵器杯蓋は6世紀中葉に比定される(16)と宝珠つまみを有し、口縁端部内面にかえりを持つ7世紀中葉の(18)がある。須恵器杯身4点(17・19~22)はいずれも小片で、残存率は(21)が1/4で、他が1/10程度である。(17)が6世紀中葉、(19・20)が7世紀中葉、高台が付くタイプの(21)が7世紀末に比定される。(22)は皿Aに分類されるもので、復元口径19.2cmを測る。(24)は円盤状を呈する底部から体部が斜上方に直線的に伸びる須恵器鉢である。7世紀後半の所産と推定される。以上のように自然河川の性格上出土遺物にも時期差が認められたが、一部のものを除けば概ね6世紀中葉~8世紀中葉を中心としており、自然河川の東岸が不明のため不確定な部分があるが、概ね奈良時代中葉(8世紀中葉)にはその機能を無くしていたようである。

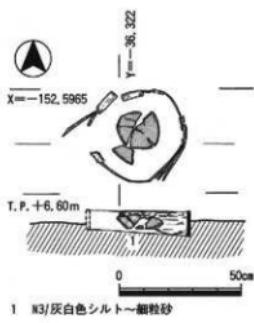
#### 井戸(E S E)

#### 井戸(E S E-101~E S E-104)

東区の東部を中心として4基が検出された。4基とも、曲物積み上げ井戸でE S E-103を除けば井戸側の最下段のみが検出されている。4基ともに上部が攪乱により削平を受けており、本来の構築面は第11層上面が推定される。時期的には平安時代後期に比定される。

#### E S E-101

4K地区で検出した。E S D-101を切っている。曲物井戸側の最下段のみを検出したが、曲物井戸側の腐食が進んでおり、辛うじて痕跡をとどめている程度であった。曲物は径0.45m、高さ0.2mを測る。井戸側内の埋土は明緑灰色シルトと灰色粘土の互層で、最下部はE S D-101の埋土である灰白色極細粒砂~



第9図 東区 E S E-102断面図

シルト層に達している。

遺物は土器小皿の小破片が2点出土したが図化し得たものはない。

#### E S E -102

4 J 地区で検出した。曲物井戸側の最下段を検出した。曲物井戸側は径0.4m、深さ0.1mを測る。井戸側内の埋土は青灰色シルトで、最下部は湧水層である灰白色シルト～細粒砂層に達している。

遺物は井戸側内から黒色土器1点(27)、瓦器碗2点(25・26)が出土している。黒色

土器(27)は底部の小破片で、両黒のB類にあたる。高台は貼り付けによるもので、偏平でやや雑な作りである。見込みおよび底部外面には一定方向の密なヘラミガキが施されている。瓦器碗(25)は完成品で口径15.0cm、器高5.2cm、高台径4.7cm、高台高0.3cmを測る。外面体部におけるヘラミガキは粗く、分割を意識せず、雑に施されている。体部内面においては、見込みから体部にかけて乱方向のヘラミガキが施されている。本例は、体部内面のヘラミガキ調整においてやや古い様相を呈するものの、体部外面のヘラミガキ調整が雑なことや高台の断面形状が台形状を呈する特徴から尾上編年のII-2期(12世紀中葉)に比定されるものと考えられる。(26)は瓦器碗の小片で、見込みに格子状ヘラミガキが施されている。時期的には(25)と同時期である。

#### E S E -103

3 J 地区で検出した。検出部分で径0.39m、深さ0.38mを測る。井戸側に使用した曲物は7段が残存していた。曲物井戸側は、上部に行くに従って径の大きいものを使用しており、最下段の井戸側が径0.17m、上部の井戸側が径0.39mを測る。井戸側内の埋土は灰白色細粒砂で、最下部はE S D -101の埋土である灰白色極細粒砂層に達している。

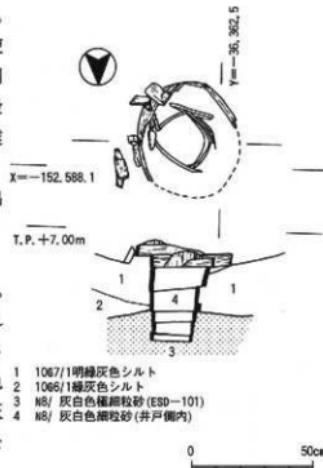
遺物は土器壺の小破片が1点出土しているが図化出来なかった。

#### E S E -104

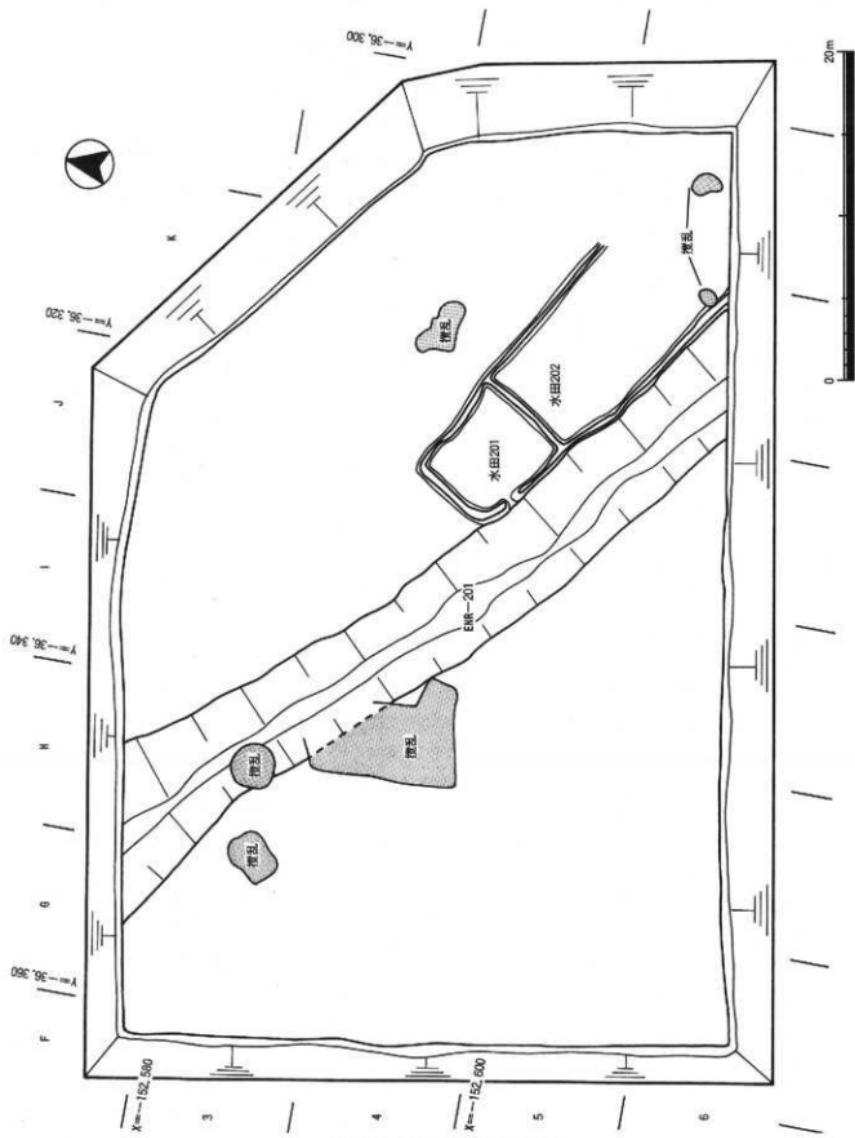
2 J 地区で検出した。曲物井戸側の最下段を検出した。E S E -101と同様、曲物井戸側の痕跡が僅かに認められる程度の遺存状況であった。井戸側の径は0.39m、深さ0.05mを測る。井戸側内部の埋土は灰色中粒砂と浅黄色細粒砂～中粒砂で、最下段はE N R -101の埋土である灰白色細粒砂～粗粒砂に達している。遺物は出土していない。



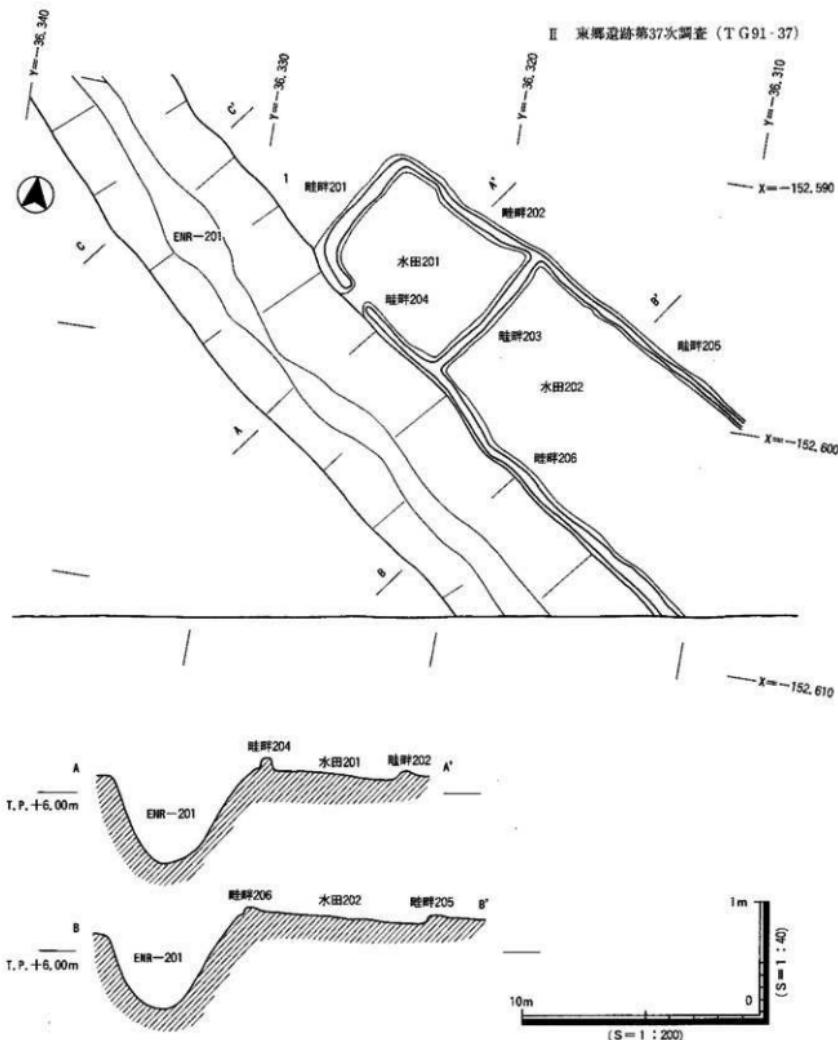
第10図 東区 E S E -102出土遺物実測図



第11図 東区 E S E -103平面図



第12図 東区 第2面平断面図



第13図 東区 第2面水田断面図

## ・第2面

第1面を検出した第12層上面から0.4~0.6m下部に存在する第14層上面 (T.P. +6.2~6.0m) で、古墳時代後期に比定される水田2筆 (水田201・水田202) と自然河川1条 (ENR-201) を検出した。

## 水田

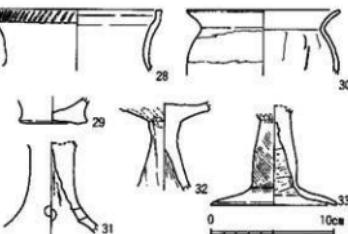
### 水田(水田201・水田202)

水田は自然河川(E NR-201)の南東部の東岸で2箇(水田201・水田202)検出した。とともに、水田の西辺がE NR-201の東岸の流路方位と一致するものである。水田は暗青灰色粘土を耕土としており、水田面の高さは南東部でT.P.+6.3m、北西部でT.P.+6.2mを測る。畦畔は灰色細砂混じり粘土を台形状に積み上げられたもので、上面幅0.4m、基底幅0.8m、畦畔高0.05~0.1mを測る。水口は、E NR-201と接する水田201の西辺の畦畔に設けられていた。水田の田積は、一筆耕耕地を確認した水田201が39m<sup>2</sup>、水田202が75m<sup>2</sup>以上を測る。なお、検出した水田の東部は、第1面で検出したE NR-101で削平を受けていることや、南部においても旧市庁舎の建築により搅乱を受けていることから、東部および南部にも水田が存在していた可能性が推定される。

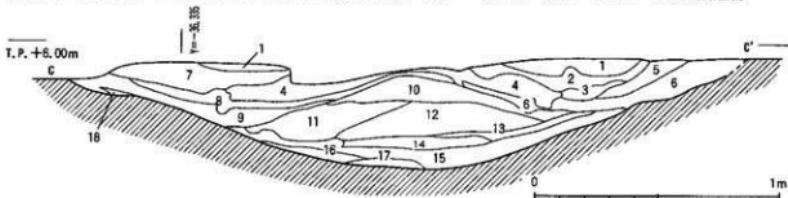
### 自然河川(E NR)

#### E NR-201

調査区の南東部から北西方向に伸びるもので、検出長46.3m、幅5.45m、深さ0.47mを測る。レンズ状の断面形状で、幅に比して深さが浅い。埋土はシルトおよび中粒砂を主体とする土層が堆積していた。堆積状況の観察からは、埋没の最終段階において東肩に沿って流れる流跡路(1~3層)が認められ、これらが水田201の西側畦畔に存在した水口のレベルと対応している。遺物は弥生時代後期から古墳時代後期に比定される土器類が極少量出土している。6点(28~33)を図化したが、いずれもローリングを受けた小片である。(28)は弥生土器短頸壺の口縁部の小片である。緩やかに外反する口縁部の上半付近からさらに短く内湾気味に上方に伸びるもので、端部は凹面を呈する。口縁部外面には、おそらく櫛搔によるものと推定される列点文が施されている。弥生時代後期の所産と考えられるが類例は少ない。生駒西麓産である。(29)は(28)と同様弥生時代後期に比定される壺底部で上げ底の形態を有する。



第14図 東区 E NR-201出土遺物



- |                                    |                                     |
|------------------------------------|-------------------------------------|
| 1 SY8/4淡黄色細粒砂と10B66/1青灰色細粒砂の互層     | 10 SY8/1灰白色細粒砂                      |
| 2 5B65/1青灰色シルト                     | 11 SY8/1灰白色細粒砂とN5/ 灰色粘質シルトの互層       |
| 3 2,5y3/1暗オリーブ灰色シルト~粘質シルト          | 12 10B67/1明青灰色細粒砂(ラミナ)              |
| 4 SY8/1灰白色細粒砂                      | 13 5y4/1灰色粘土                        |
| 5 5B65/1青灰色シルト                     | 14 5B67/1明青灰色細粒砂~シルトとSY8/1灰白色細粒砂の互層 |
| 6 SY5/1灰色シルト                       | 15 N6/ 灰色粘質シルト~細粒砂                  |
| 7 5B65/1青灰色シルト                     | 16 N5/ 灰色シルト                        |
| 8 10B67/1明青灰色細粒砂と10YR6/1褐色粘質シルトの互層 | 17 10B67/1明青灰色シルト                   |
| 9 SY5/1灰色シルト                       | 18 N6/ 灰色粘質シルト~細粒砂                  |

第15図 東区 E NR-201断面図

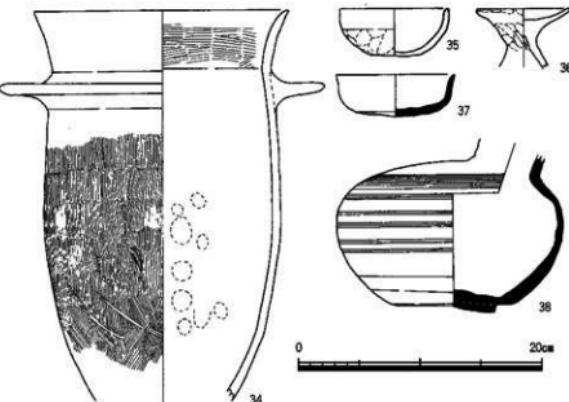
非生駒西麓産である。(30)は復元口径12.5cmを測る小型の土師器甕である。(31~33)は土師器高杯である。(32)は精良な胎土が使用されており、杯部内面に放射状暗文がある他、柱状部に面取りを行う等の特長がある。(32・33)については古墳時代の所産と推定されるが、(31)については、やや古い様相を示すもので、弥生時代後期(畿内V様式)に比定される。

### 3) 第11層出土遺物

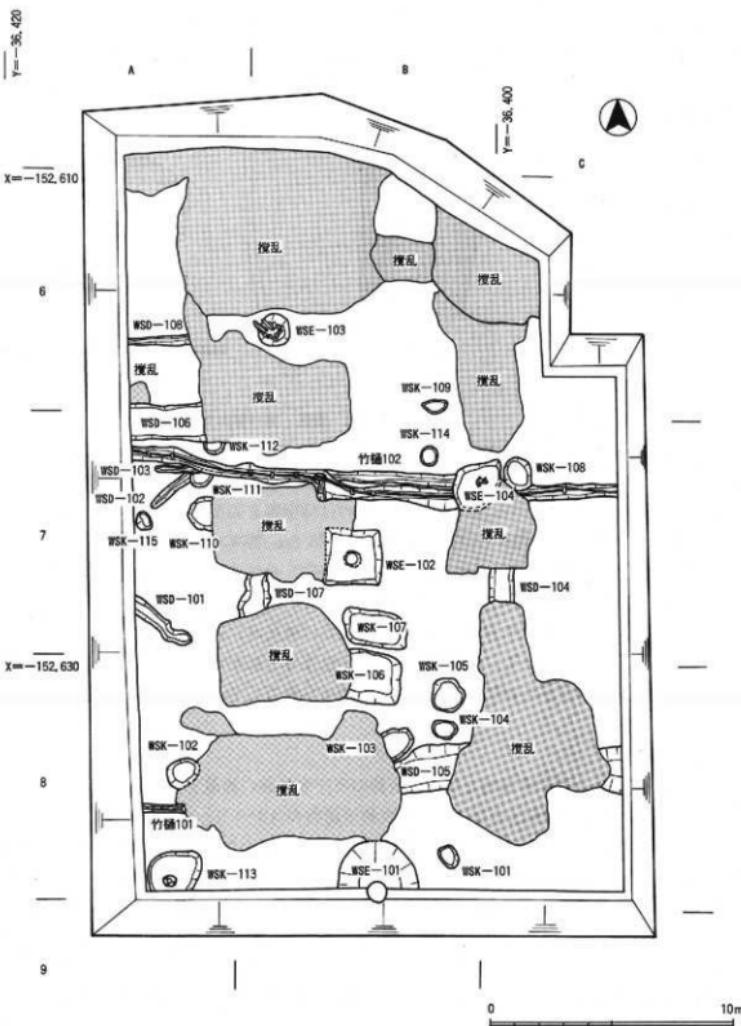
第1面上層に堆積する第11層から出土したものである。5点(34~38)を図化した。(34)は長胴形の体部上半に水平方向に伸びる鉢を境にして、上部は緩やかに外反する口縁部が付く土師器土釜で、鉢径が口縁径を凌駕している。底部を欠くもののほぼ全容を知ることができる。口径20.8cm、鉢径26.5cmを測る。(35)は土師器杯の完形品である。口径8.8cm、器高3.9cmを測る。体部中位以下の指頭圧痕が明瞭に残る。(36)は手づくねの土師器小型高杯で、全体に作りは雑である。口径7.6cmを測る。(37)は須恵器杯身である。7世紀中葉の所産である。(38)は須恵器平瓶で口縁部の大半と体部上半を欠く。扁球形の体部を有するもので、底部には焼成時に熔着した須恵器片のため内側に盛り上がった部分が認められる。外面調整は体部中位より上部がカキメ、以下は回転ケズギが行われている。口縁部外面から体部上半に自然釉が認められる。7世紀中葉の所産と考えられる。

## 2. 西区の調査

東区から府道近鉄八尾停車場線を挟んで西側の市庁舎西館の建築予定地に設定した調査区で、調査面積745m<sup>2</sup>を測る。調査区全体に旧八尾税務署建物のコンクリート基礎杭が41本残存しており、調査面積の約半分が現地表下2m前後まで攪乱を受けていた。調査では3面(第1面~第3面)を調査対象とした。第1面は、現地表下1.7m前後(T.P.+7.3m)の第5層上面で、近世末期~近代に比定される井戸4基(W S E-101~W S E-104)、土坑15基(W S K-101~W S K-115)、溝8条(W S D-101~W S D-108)、竹筒2箇所(竹筒101・竹筒102)を検出した。第2面は、第1面から約0.2m下部の第6層上面(T.P.+7.1m)で、平安時代後期の井戸2基(W S E-201・W S E-202)、室町時代の溝3条(W S D-201~W S D-203)、近世末期の竹筒1箇所(竹筒201)と時期不明の井戸1基(W S E-203)、土坑1基(W S K-201)を検出した。第3面は、第2面から約0.5m下部の第10層緑灰色シルト混じり粘土層上面(T.P.+6.6m前後)を調査対象とした。その結果、古墳時代前期(布留式期新相)の溝2条(W S D-302・W S D-303)、古墳時代中期の溝1条(W S D-301)を検出した。



第16図 東区 第11層出土遺物実測図

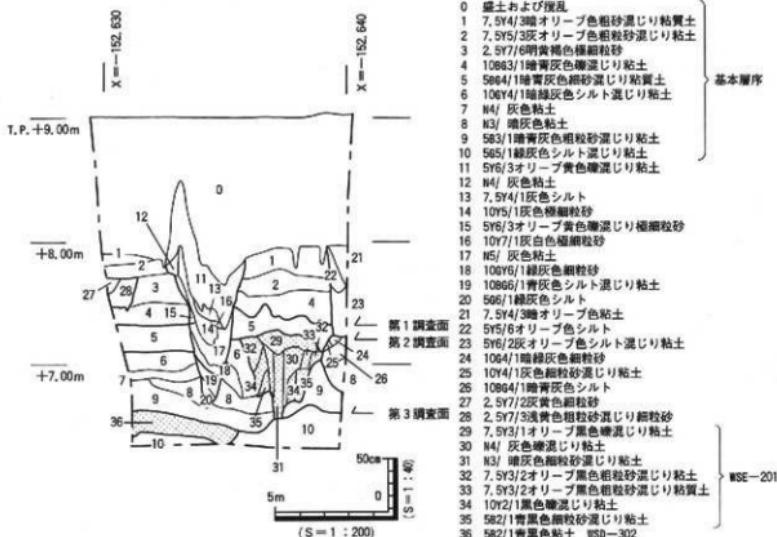


第17図 西区 第1面平面図

## 1) 西区基本層序

調査地の北部付近では深層におよぶ大規模な擾乱、および壁面崩壊により、堆積土層の確認が出来なかつたがそれ以外では比較的安定した層相が確認された。調査区南東部分の東壁で検出した11層(第0層～第10層)を抽出して基本層序とした。

- 第0層 盛土および擾乱。層厚1.1～1.2m。
- 第1層 7.5Y4/3暗オリーブ色粗粒砂混じり粘質土。層厚0.05m前後。
- 第2層 7.5Y5/3灰オリーブ色粗粒砂混じり粘土。層厚0.15m前後。
- 第3層 2.5Y7/6明黃褐色極細粒砂。層厚0.2m。
- 第4層 10B G3/1暗青灰色礫混じり粘土。層厚0.2m。
- 第5層 5B G4/1暗青灰色細粒砂混じり粘質土。層厚0.2m。近世末期～近代の遺構検出面(第1面)。
- 第6層 10G Y4/1暗緑灰色シルト混じり粘土。層厚0.15m前後。平安時代後期～室町時代の遺構検出面(第2面)。
- 第7層 N4/ 灰色粘土。層厚0.1m前後。
- 第8層 N3/ 暗灰色粘土。層厚0.05m前後。
- 第9層 5B3/1暗青灰色粗粒砂混じり粘土。層厚0.2～0.3m。
- 第10層 5G5/1綠灰色シルト混じり粘土。層厚0.45m前後。古墳時代前期(布留式期)の遺構検出面(第3面)。



第18図 西区 東壁断面図(水平1/200・垂直1/40)

## 2) 西区検出遺構

### ・第1面

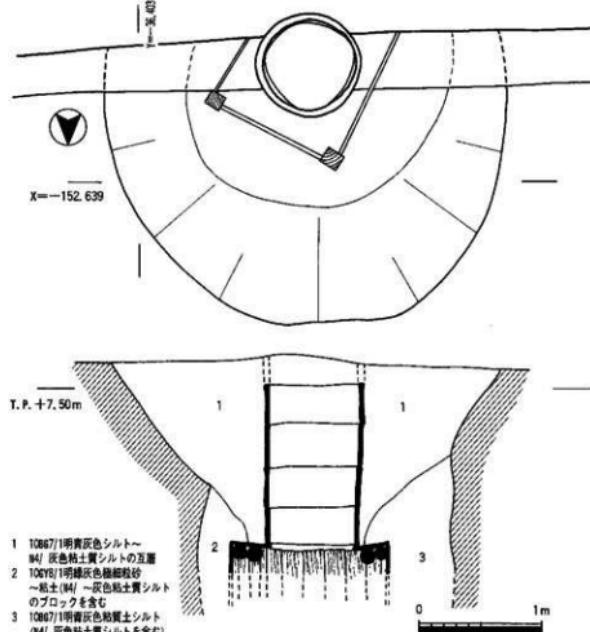
第1面では現地表下1.7m前後(T.P. +7.3m)の第5層暗青灰色細砂混じり粘質土上面で近世末期～近代に比定される井戸4基(WS E-101～WS E-104)、土坑15基(WS K-101～WS K-115)、溝8条(WS D-101～WS D-108)、竹樋2条(竹樋101・竹樋102)を検出した。なお、本調査地点は、江戸時代初頭の慶長11年(1606)～慶長14年(1609)に久宝寺寺内町の住人と顕証寺下の慈願寺が開拓した八尾寺内町の南東隅に位置するもので、近代を除く遺構群は八尾寺内町の町屋に関連した遺構と推定される。

#### 井戸(WS E)

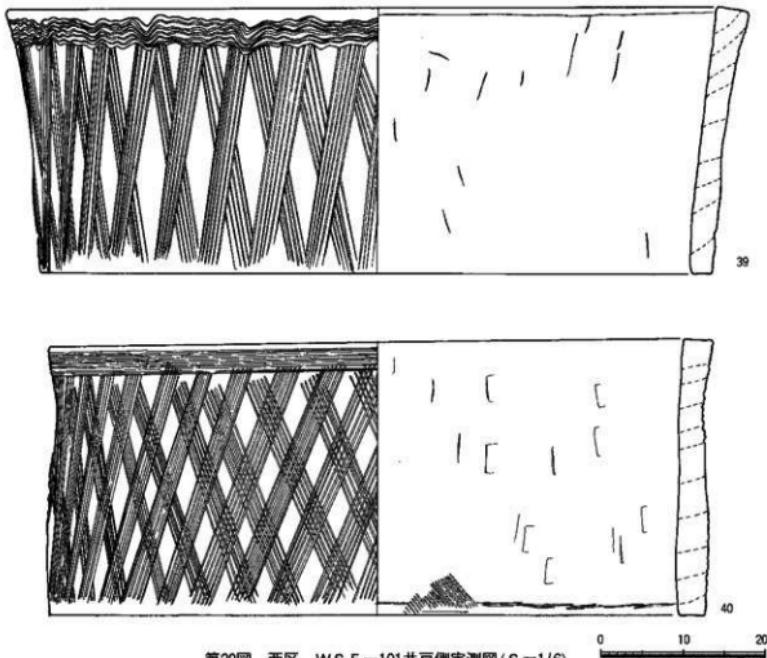
##### WS E-101

西区中央部の南端で検出した。瓦質井戸枠と方形の木枠を井戸側に使用する井戸である。掘形の南部が調査区外に至るため全容は不明であるが、残存部分からみてほぼ円形の掘形を呈するものと推定される。掘形の大きさは、径3.2m、深さ1.7m以上を測る。井戸側は掘形の中央部に設置されており、最下部に方形の木枠(板組み横棟どめ)幅1.2m、深さ0.2m以上を置き、さらに上部に瓦質井戸側(径0.8m、高さ0.33m)を4段重ねている。遺物は井戸側内から土師質土器・須恵質土器・国産陶磁器・屋瓦類の他、掘形から第3面で検出したWS D-303に伴う古墳時代前期(布留式新相)の土

器群が出土している。そのうち、瓦質井戸側2点(39・40)を図化した。共に筒状の形状で上部径が底部径に比べて大きくなるように作られている。(39)が下から3段目の井戸側で口径91.8cm、高さ32.5cm、厚さ3.3cm。(40)が最下段の井戸側で口径82cm、高さ34.2cm、厚さ3.6cmを測る。外面の調整は6本1単位とする櫛状工具により斜格子文が施文されているが、最上部には(39)が波状文、(40)は直線文が施文されている。なお、当地は土地台帳によれば明治31年



第19図 西区 WS E-101平面面図

第20図 西区 WS E-101井戸側実測図 ( $S=1/6$ )

に畠地として登記された後、昭和14年には宅地に変更され、更に昭和25年に大蔵省に売却された後は旧八尾税務署としての沿革が辿れる。従って、本遺構を宅地に伴う井戸と推定すれば、構築時期は昭和14年の宅地としての地目替え以降である可能性が高い。

#### WS E-102

西区の中央部で検出した。方形の掘形を呈する井戸で、井戸側には瓦粧と桶粧が使用されている。掘形の大きさは、幅2.4m、深さ1.7m以上で、掘形のほぼ中央部に径0.73m、長さ1.0mを測る桶を2段重ねた後、上部に井戸側用瓦(幅0.3m、高さ0.25m、厚さ0.03m)を8枚で一周させ、径0.8mを測る瓦井戸側とするもので、調査時点では3段分が確認できた。遺物は井戸側内および掘形内から土師質土器・須恵質土器・瓦質土器・国産陶磁器・屋瓦類が少量出土している。構築時期は近代初頭が推定される。

#### WS E-103

西区の北東部で検出した。円形の掘形を呈する井戸で、井戸側に桶粧が使用されている。掘形の大きさは、幅1.3m、深さ0.3mで、掘形のほぼ中央に桶粧(径0.45m、高さ1.0m)1段が置かれていた。調査時点では、土圧により桶粧が全体に北西方向に倒れていた。遺物は井戸側内および掘形内から近世初頭を中心とした土師質土器・瓦質土器・国産陶磁器・屋瓦類が少量出土して

いる。

#### WS E-104

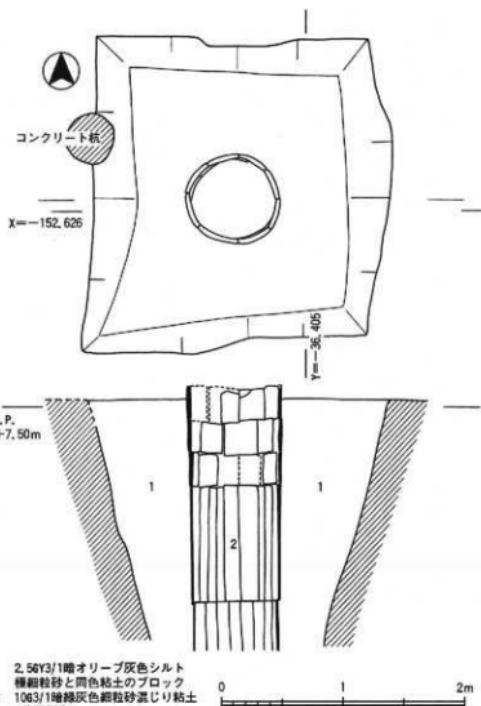
WS E-102の北東部で検出した。南部が搅乱されており、全容は不明であるが検出部からみて方形の掘形を持つものと推定される。検出部分で幅1.75m、深さ1.2mを測る。井戸側は掘形のやや北部に桶枠(径0.8m、高さ1.0m)1段が置かれていた。遺物は近世初頭を中心とし土師質土器・須恵質土器・国産陶磁器・屋瓦類が少量出土している。

そのうち図化し得たものは唐津刷毛目皿1点(41)である。(41)は井戸の掘形部分から出土したもので、口径12.4cm、器高3.4cm、底径4.7cmを測る。見込みの4箇所に砂目が認められる。高台部は露胎である。17世紀前半の所産であることから八尾寺内町に関連した遺構であると推定される。

#### 土坑(W SK)

土坑は15基(W SK-101~W SK-115)検出した。特に、西区中央の南北ラインおよび竹橋102に

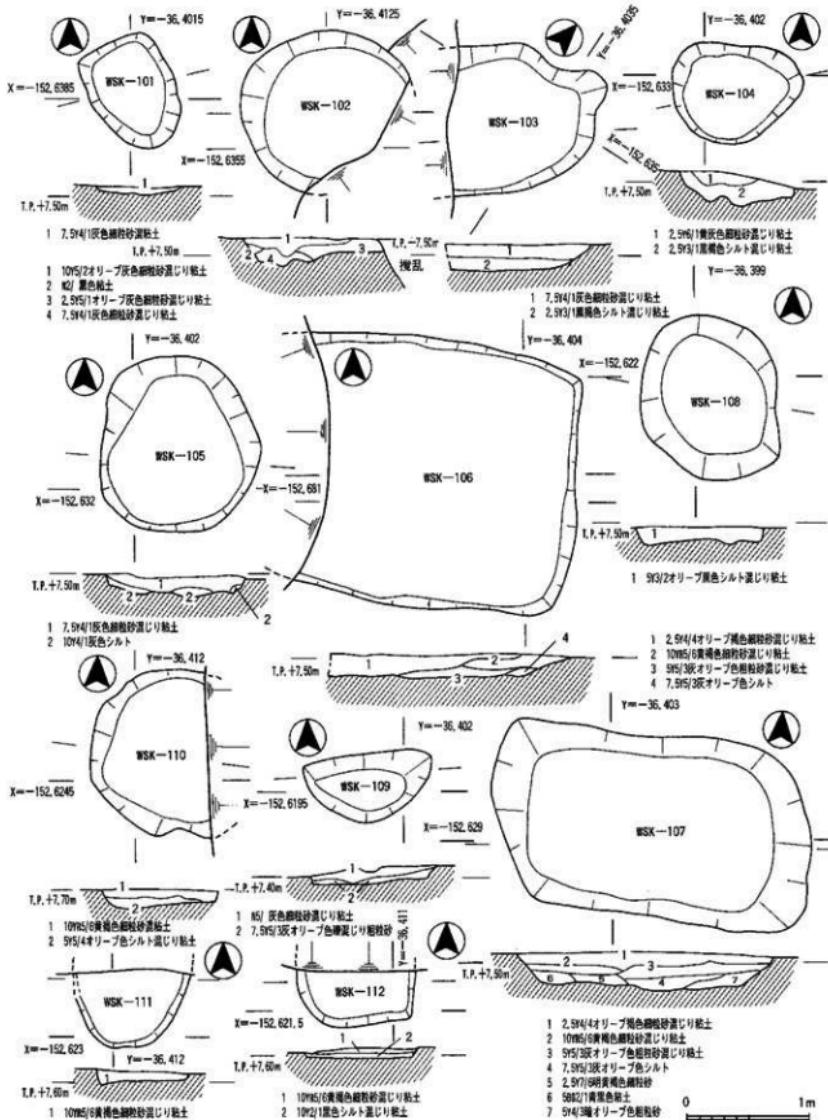
沿った部分に集中する傾向がみられた。上面の形状で、円形5基(W SK-102・W SK-105・W SK-108・W SK-114・W SK-115)、橢円形3基(W SK-101・W SK-104・W SK-109)、長方形2基(W SK-106・W SK-107)不明5基(W SK-103・W SK-110~W SK-113)に区別できる。大きさは、上面の形状が長方形を呈するものがやや大きめで幅2.1mを測るが、そのほかは1.0m前後を測るものが多い。深さは0.15~0.3m前後のものが大半を占める。埋土は一部を除けば灰色小礫混じり粘質土の単一層で、層中に植物遺体が含まれているものが多いことから、畑作に関連した堆肥の集積跡の可能性が高い。遺物は近世末期~近代に比定される日常雜器のほか屋瓦類が出土している。なお、W SK-113からは陶質甕の底部が出土しており、埋甕が設置されていたようである。図化した遺物はW S



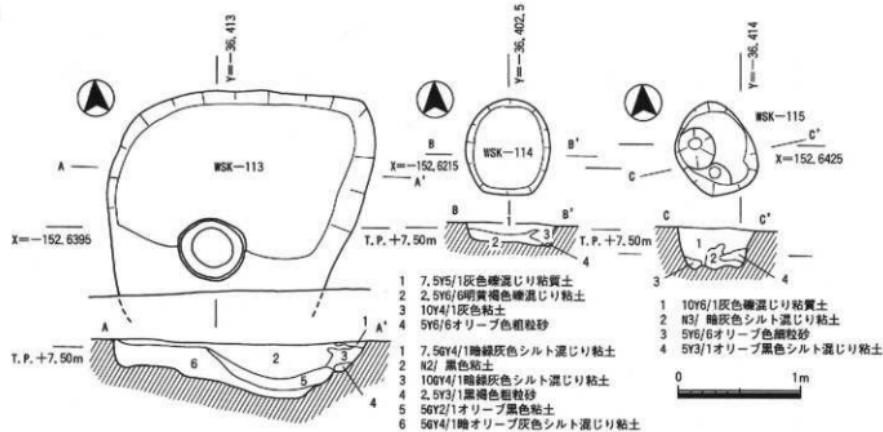
第21図 西区 WS E-102平面図



第22図 西区 W SK-104  
出土遺物実測図・写真



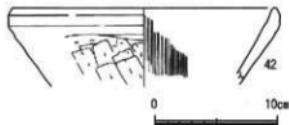
第23図 西区 W SK-101～W SK-112平面面図



第24図 西区 WSK-113～WSK-115平面図

K-103の瓦質摺鉢1点(42)、WSK-113の陶器壺1点(43)である。瓦質摺鉢(42)は口縁部が上方につまみ上げ気味になるもので、口縁端部は丸く終わる。体部内面には櫛描きによる摺目、体部内面にはヘラケズリが行われている。15世紀後半の所産と推定される。陶器壺(43)は底部が完存しており底径35.4cm、残存高31.7cmを測る。

溝(WSD)



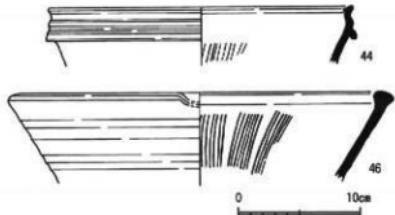
第25図 西区 WSK-103出土遺物実測図(42)



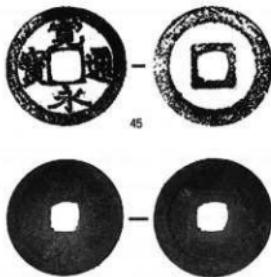
第26図 西区 WSK-113出土陶器壺(43)・写真

溝は8条(WSD-101～WSD-108)検出した。そのうち、東西方向に伸びるもの4条(WSD-103・WSD-105・WSD-106・WSD-108)、南北方向に伸びるもの2条(WSD-104・WSD-107)、南東～北西方向に伸びるもの1条(WSD-101)、南西～北東方向に伸びるもの1条(WSD-102)である。幅はWSD-105・WSD-106がやや広く1.4～1.8mを測るほかは0.4m前後のものが多い。深さは0.15～0.25mである。埋土は灰色～暗オリーブ色シルト・細砂混じり粘土である。

遺物は中世末期から近世に比定される日常雑器が少量出土している。そのうち図化したものは、WSD-103の陶器摺鉢1点(44)、寛永通寶1点(45)、WSD-106の陶器摺鉢1点(46)である。(44)の摺鉢は口縁端面下半が下部に拡張する口縁部形態を示している。いわゆる蛙目粘土と呼ばれる胎土の特徴から信楽焼と推定される。(45)の寛永通寶は径2.5cmを測る。寛永通寶の分類によれば、一文銭銅錢で書体と銭容から古寛永(1636～1659年)にあたる。(46)は口縁端部が内側に



第27図 西区 WSD-103(44)、WSD-106(46)出土遺物



第28図 西区 WSD-103出土銭貨拓影(原寸)および写真

大きく肥厚する摺鉢である。

#### 竹樋

竹樋は2条(竹樋101・竹樋102)を検出した。竹樋は、真

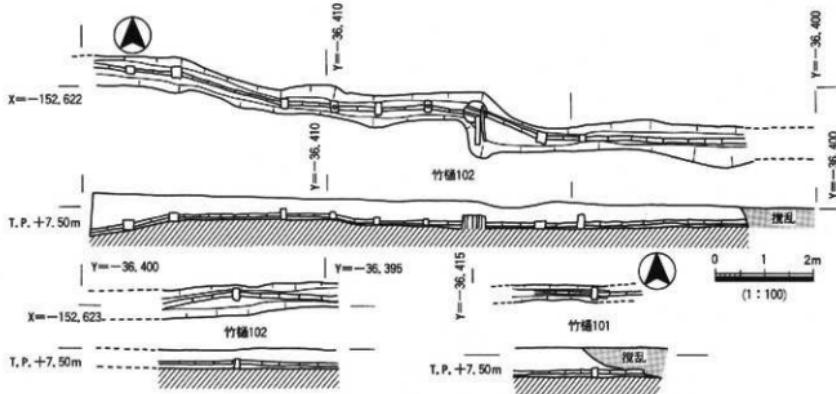
竹の内部の節を抜いたものを導水管とし、それに長方形の木材(縦0.25m、横0.1m、高さ0.2m)に径0.07m程度の穴を貫通させたものを接続具として使用することにより、上水を導く上水施設と考えられる。構築時期は、17世紀初頭以降と推定される。

#### 竹樋101

西区の南西部で検出した。東西方向に伸びるもので、東部は搅乱されており不明である。検出長2.7m、竹筒径0.07mを測る。

#### 竹樋102

東西方向に伸びるもので、検出長20m、竹筒径0.07mを測る。WSE-102の北部付近に桶(径0.5m、深さ0.12m)が備え付けられていて、そこを中心として西側と東側に下がる構造の竹樋である。



第29図 西区 竹樋101・竹樋102平面面図

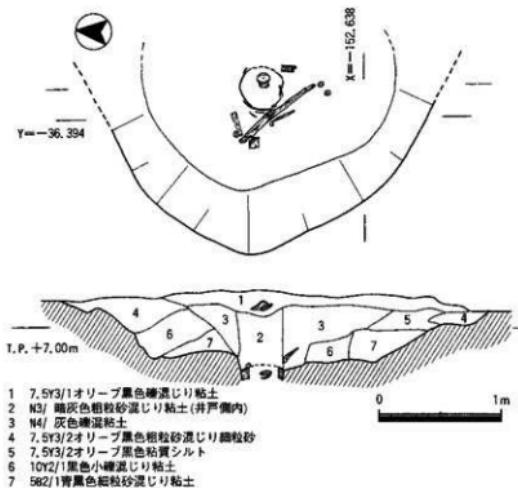
## ・第2面

第1面から約0.2m下部の第6層暗緑灰色シルト混じり粘土層上面(T.P.+7.1m)で、平安時代後期の井戸2基(WSE-201・WSE-202)、江戸時代初頭の井戸1基(WSE-203)、土坑1基(WSK-201)、溝3条(WSD-201~WSD-203)、竹樋1条(竹樋201)を検出した。江戸時代初頭の遺構群については、八尾寺内町の成立時期(17世紀初頭)とも符合しており、八尾寺内町の町屋に関連した遺構であった可能性が高い。

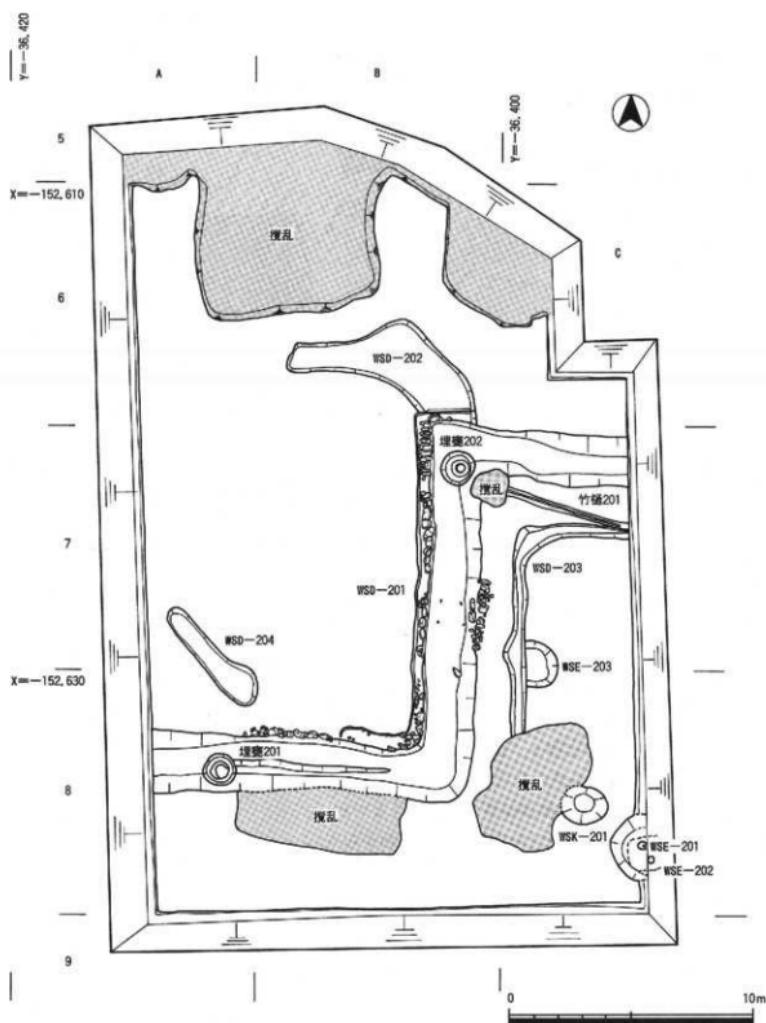
### 井戸(WSE)

#### WSE-201

西区の南東隅で検出した。東半分が調査区外に至るため全容は不明である。南側に隣接するWSE-202の掘形を切って構築されている。検出部分で南北幅3.5m、深さ0.7mを測る。井戸側には曲物が使用されており、そのうちの2段が残存していた。残存部分で深さ0.15m、径は最下段から0.34m、0.36mを測る。遺物は井戸側内から土師器小皿、瓦器碗が出土したほか、掘形内からは土師器土釜、黒色土器鉢、須恵器壺・鉢、瓦器碗、屋瓦等が出土している。井戸側内から出土した遺物からみて構築時期は11世紀後半が推定される。遺物は8点(47~54)を図化した。その内訳は、井戸側内では土師器小皿2点(47・48)、瓦器碗1点(49)、掘形内では土師器土釜1点(51)、黒色土器台付き鉢1点(53)・須恵器壺1点(52)・陶器壺1点(54)である。土師器小皿(47・48)は共に「て」の字状口縁を呈する。(47)が完形品で口径9.0cm、器高2.0cmを測る。(49)は瓦器碗の底部で、高台径7.0cm、高台高0.7cmを測る。見込みには一定方向のヘラミガキが密に施されている。形態や調整から尾上編年のI-2(11世紀後半)に比定されよう。(50)は「く」の字に屈曲する口縁部を有する土師器壺である。器面調整は内面が横方向、外面が縦方向の細かいハケナナが施されている。土師器土釜(51)は口径21.4cm、鍔径28.3cmを測る。口縁部が「く」の字に屈曲するもので、口縁端面は水平で幅広である。鍔は比較的短く、やや上向きに貼り付けられている。体部に比して鍔部から上部の器壁が厚い。(52)は大型の須恵器壺である。口径38.0cm、体部最大径78.8cmを測る。(53)は高台径15.7cm、高台高1.9cmを測る黒色土器A類の片口鉢である。体部内外面に横方向のヘラミガキ調整が行われている。(54)は常滑焼の壺底部の小片である。内外面に灰緑色の自然釉が認められる。掘形内出土の遺物については、先行するWSE-202に関連した遺物が一部含まれており、(51)の土師器土

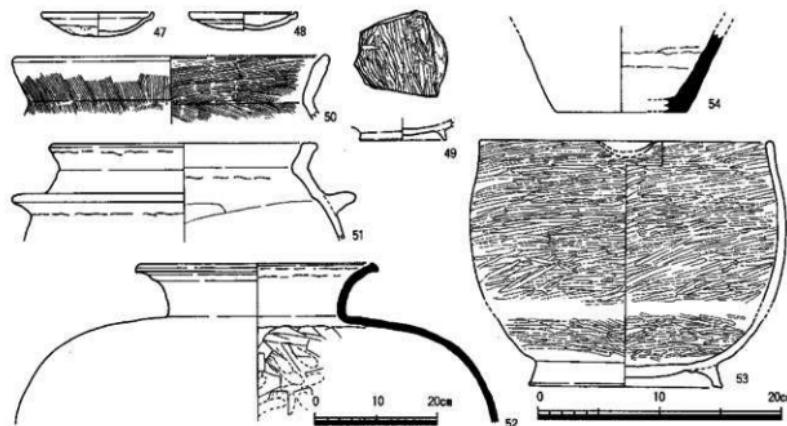


第30図 西区 第2面WSE-201平面図



第31図 西区 第2面平面図

釜および(53)の黒色土器片口鉢と同型式のものが八尾市木の本遺跡 SW-02(10世紀前半～中頃)から出土している。井戸側内の遺物とは時期差が認められ、これらの遺物が WSE-202 の構築時期に近いものと推定される。



第32図 西区 WSE-201出土遺物実測図

#### WSE-202

WSE-201の東部掘形掘削中に検出した。WSE-201の井戸側南端より約0.5m地点に井戸側が設置されている。掘形の上部はWSE-201により切られている。井戸側には曲物が使用されており、5段が残存していた。曲物井戸側は残存部で深さ0.5mを測るもので、曲物井戸側の径は最下段から(32cm・36cm・40cm・44cm・56cm)を測る。遺物は井戸側内から須恵器甕と黒色土器碗の小破片が出土している。井戸側内から出土した遺物からは構築時期を限定できないが、本遺構を切り込むWSE-201の掘形内出土遺物からみて10世紀前半～中頃の構築時期が推定される。

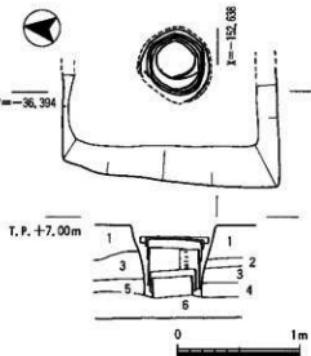
#### WSE-203

素掘り井戸で、西部はWSD-203に切られている。検出部分で径1.8m、深さ1.1mを測る。埋土は上部が粘土と細粒砂の互層、下部が灰白色極細粒砂～粘土である。遺物は土師器の小破片が極少量出土している。

#### 土坑(WSK)

#### WSK-201

WSE-201の北東部から0.7m地点で検出した。北



第33図 西区 WSE-202断面図

端部が搅乱により切られているが、上面の形状はほぼ円形を呈するものと考えられる。東西幅1.9m、深さ0.37mを測る。埋土は上からオリーブ黒色粘土・暗オリーブ灰色細粒砂混じり粘土・暗緑灰色シルト混じり粘土である。遺物は出土していないが、WSD-203に区画された建物に関連するものと考えられ、近世初頭以降の構築時期が想定される。

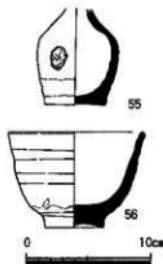
### 溝(WSD)

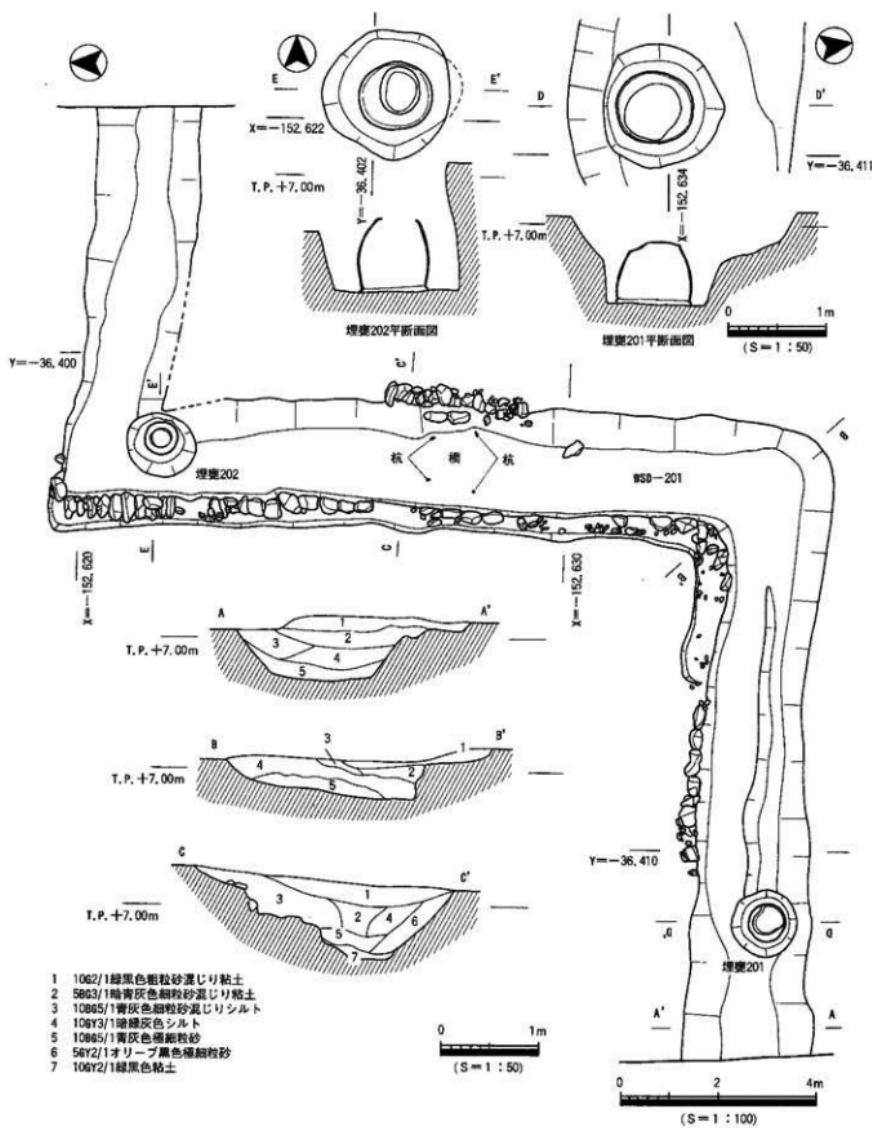
#### WSD-201

WSD-201は、西区南西部の8A地区～8B地区の東西方向に10.5m伸びた所から、北に屈曲し南北方向に13m伸びた後、さらに東に屈曲し東西方向に8mにわたって伸びている。幅2m、深さ0.95mを測る。溝の左岸の大半と右岸の一部で石垣を検出した。左岸の石垣は、8A地区～8B地区で東西方向に6.5m、8B地区～7B地区で南北方向に13m、6B地区で東西方向に1mにわたって構築されていた。右岸の石垣は、7B地区で南北方向に3mにわたって構築されていた。石垣は、人頭大から一辺が0.5m大の石材で積まれており、調査時点では石垣が一段の所と二段に積まれている部分が認められたが、構築面からみて、本来は二段に積まれていたものと推定される。石垣の構築方法は、溝の法面上部を幅0.5～0.7m、深さ0.1m前後に「L」字状に掘削した後、石材を積むもので、石材の積み方は大半が野面積みであるが、左岸7B地区北端の2.25mと右岸の石垣については小口積みが行われている。石垣に使われている石材は、大半が花崗岩であるが、ごく一部に凝灰岩が使用されていた。石垣の裏込めには14～16世紀代に比定される日常雑器のほか、さらに時期が遅る屋瓦類が多量に含まれている。溝の埋土は、1層緑黒色粗粒砂混じり粘土、2層暗青灰色細粒砂混じり粘土、3層青灰色細粒砂混じり粘質シルト、4層暗緑灰色シルト、5層青灰色極細粒砂、6層オリーブ黒色極細粒砂、7層緑黒色粘土である。とくに、左岸に沿った3層には、石垣から転落した石材や裏込めに使用された土器類・屋瓦類が多量に含まれていることから、人為的に溝が埋められたことが窺われる。なお、右岸で検出した石垣については、石垣を検出した部分の溝底に、東西方向に杭が2本づつに4本打ち込まれていたことから、この部分に左岸と右岸をつなぐ橋が設けられていたようである。遺構の性格としては、八尾寺内町の町屋内の敷地を区画する溝であったようで、時期的にも溝内から出土した(55・56)の帰属時期である17世紀初頭と符合している。

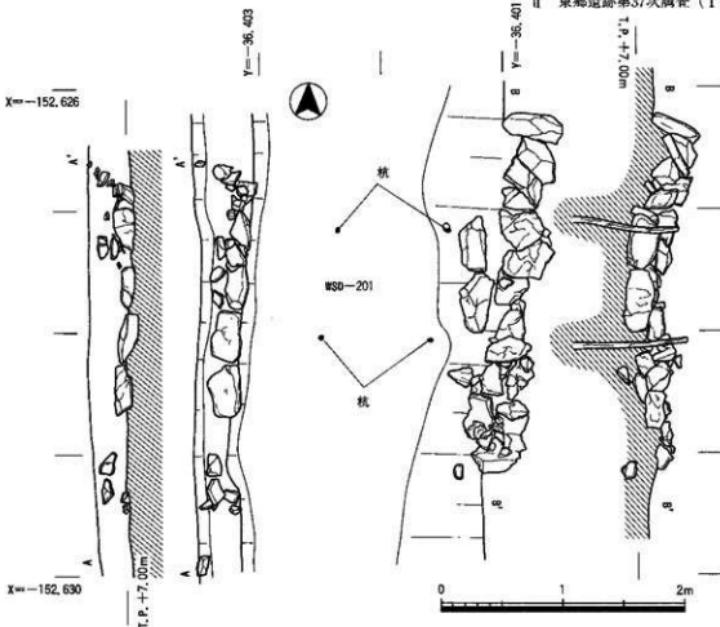
出土遺物は、溝内および石垣部分からコンテナ17箱が出土している。大半が石垣内および裏込めに使用された小片化した屋瓦・土器類を中心で、一部溝内に落ち込んだ遺物も石垣に関わる遺物に含めている。64点(55～118)を図化した。(55・56)が溝内、(57～118)が石垣出土遺物である。溝内から出土した2点(55・56)は共に陶器である。(55)は底径4.9cmを測る小型の壺で、体部外面下部より上部に鉄釉が施釉されている。瀬戸美濃焼系と推定される。(56)はやや深味のある唐津焼碗である。口径10.9cm、器高7.8cm、高台径4.8cm、高台高0.8cmを測る。内面から体部下半にかけて灰色の光沢のある釉が施釉されている。17世紀前半に比定される。石垣部分から出土した遺物で、図化した62点(57～118)の内訳は、土師質・土釜2点(57・58)、瓦質・土釜4点(59～62)・壺鉢3点(64～66)・壺3点(72～74)・火鉢3点(80～82)、須恵質・鉢1点(63)、陶器・壺鉢5点(67～70)である。

第34図 西区 WSD-201出土遺物実測図





第35図 西区 WSD-201断面図および埋塚201・埋塚202断面図



第36図 西区 WSD-201内橋構造部分平面図

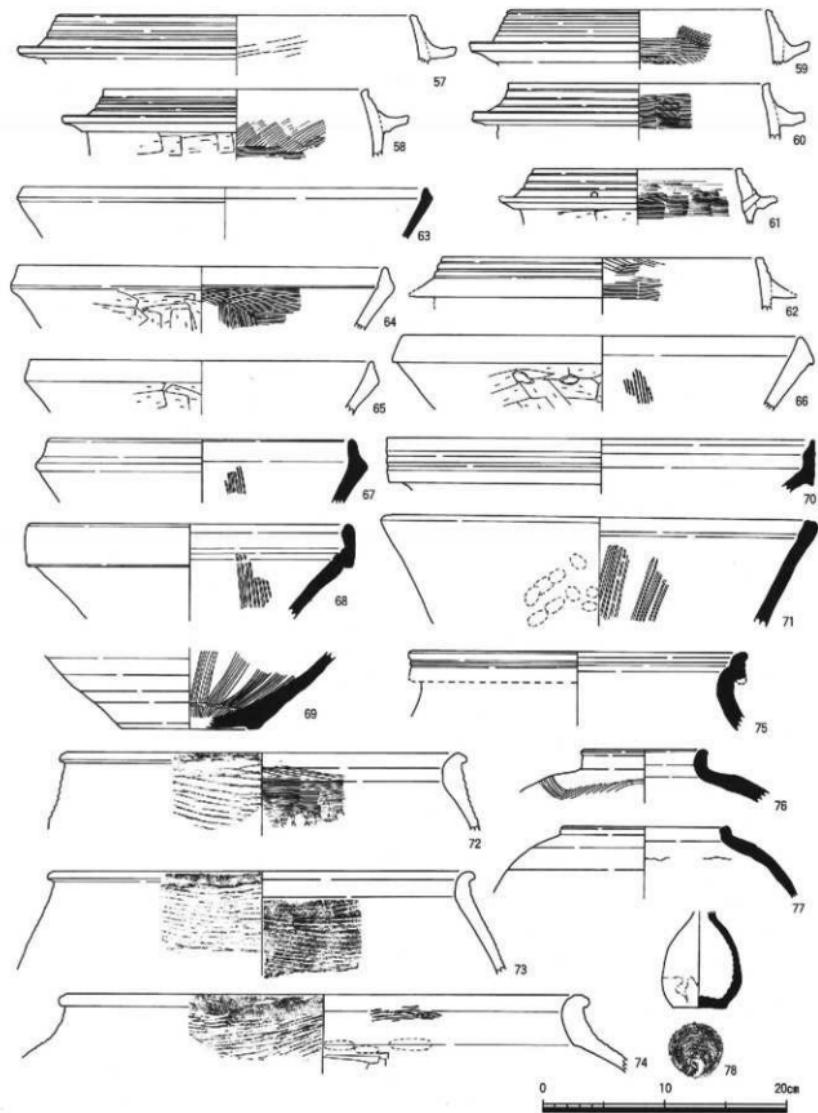
71)・壺3点(76~78)・甕1点(75)・鉢1点(79)、磁器-碗2点(83・84)・皿1点(85)、漆器-椀1点(86)、瓦-軒丸瓦5点(91~94)・軒平瓦13点(96~108)・丸瓦3点(109~111)・平瓦7点(112~118)、土製品-土錐1点(87)、円板状土製品2点(88・89)、石製品-砥石1点(90)である。

#### 土師質土器

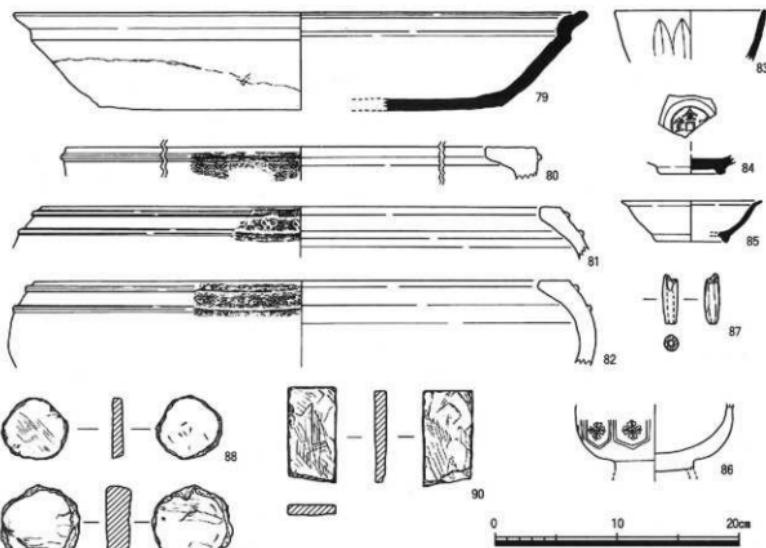
土釜は2点(57・58)を図化した。口縁部から体部上半部にかけての資料で、共に残存率が1/12程度の小片である。内傾して伸びる口縁部の外面に強いヨコナデにより段状を有する(57)と凹線が廻る(58)がある。鋸部は共に水平方向に貼り付けられており端面は外傾する面を有する。

#### 瓦質土器

瓦質土釜は4点(59~62)を図化した。口縁部から体部上半部にかけての資料で、いずれも残存率が1/10~1/12程度の小片である。内傾して伸びる口縁部の外面に強いヨコナデにより段状をなす(59・60)と凹線が廻る(61・62)がある。鋸部の形状は、(59)が上方に伸びる他は水平方向に貼り付けられている。鋸端部は面を有する(59~61)と先細りでやや丸味を帯びる(62)がある。(61)の口縁部下間に直径6mmを測る粗孔が認められる。瓦質擂鉢(64~66)は共に口縁部外面を断面三角形状に突出させるもので、体部外面はケズリが行われている。瓦質甕3点(72~74)は、口縁部の1/8~1/12程度が残存する小破片である。いずれも、体部上端から器壁幅を漸増させ直上方に



第37図 西区 W S D-201石壇内出土遺物実測図その1



第38図 西区 W S D - 201石塙内出土遺物実測図その2

向く短い頸部を形成するもので、口縁部は強く屈曲し端部は丸く終わる。器面調整は体部外面が一様に水平方向の粗いタタキであるが、体部内面は(72)が横方向の細かいハケメ、(73)が粗いハケメ、(74)が板ナデである。形態的には(72・73)に比して(74)が古い様相を呈している。前者者が15世紀後半、後者が15世紀前半の所産と考えられる。瓦質火鉢3点(80~82)は、中世後期に大和国で生産されたいわゆる「奈良火鉢」に分類されるもので、坪之内氏の分類に従えば(80)が浅鉢IV、(81・82)が浅鉢Vに分類される。完形であれば3点ともに底部外面の四隅に猫足が付くものである。3点ともに体部上半の2条の凸帯間に(80)が花文、(81)が梅花文、(82)が花菱文のスタンプが押捺されている。14世紀末~15世紀代に盛行した器種である。

#### 須恵質土器

(63)は東播系の須恵質の捏ね鉢である。口縁部外面に重ね焼痕が観察される。

#### 陶器

陶器擂鉢5点(67~71)を図化した。(67・68・70)が備前焼で、口縁部の断面形状が三角形を呈する(67)が間壁編年のIV B期(15世紀後半)、口縁部を上下に拡張し幅拡の端面に疑凹線を持つ(68・70)が間壁編年VA期(16世紀前半)に比定される。(69・71)が丹波焼である。(71)の口縁端部の形状は外側が丸く内側が角張るもので、口縁部内面付近に幅1cm前後の凹線が廻る。体部内面には横書き条線を放射状に施して擂目としている。(69)は底部に幅0.7cm、高さ0.4cmを測る高台を有する。(69・71)ともに、内面に緑灰色の自然釉が付着している。(79)は浅鉢で、口径46.6

cm、底径33.0cm、器高8.0cmを測る。水平な底部から体部が斜上方に伸び、強く外反する口縁部に至るもので、口縁部内面には上幅で1cm程度を測る突帶を形成している。口縁部の内外面に茶褐色の自然釉が付着しているほか、体部内面に陶器片を置いて重ね焼した痕跡がある。このような形態の浅鉢は備前焼や丹波焼製品にも認められるが、本例は信楽焼と推定される。16世紀代の所産である。(75)は常滑焼の壺である。復元口径27.2cmを測る。15世紀前半の所産と推定される。(76・77)は直立する短い口頭部を有する備前焼の壺である。(76)の肩部に櫛描きによる波状紋が施されている。16世紀後半の所産であろう。(78)は口頭部を欠損する以外は完存している。無花果型の体部に細い頸部が付く小型の壺である。残存高7.9cm、底径4.4cmを測る。外底面に回転糸切り痕が残る。体部下半より上部に黒褐色の釉が施釉されている。

#### 磁器

中国産磁器は3点(83~85)図化した。(83)は体部外面に錦運弁を持つ青磁碗で、釉色はくすんだ緑色で全体に粗い貫入が認められる。森田・横田氏分類の龍泉窯系碗I-5bに分類されるもので、13世紀前半に比定される。(84)は底部の約1/2程度を残す青磁碗で、全容は不明であるが残存部分からみて見込みに「金玉滿堂」の銘文がスタンプされている。釉色は淡青色である。森田・横田氏分類の龍泉窯系碗I-5-dに分類されるもので、(83)と同様13世紀前半に比定される。(85)は高台を有する白磁皿で約1/4程度が残存している。復元口径11.5cm、底径5.8cm、器高3.2cmを測る。釉色は灰白色で高台部置付を除く全体に施釉されている。16世紀前半の所産と推定される。

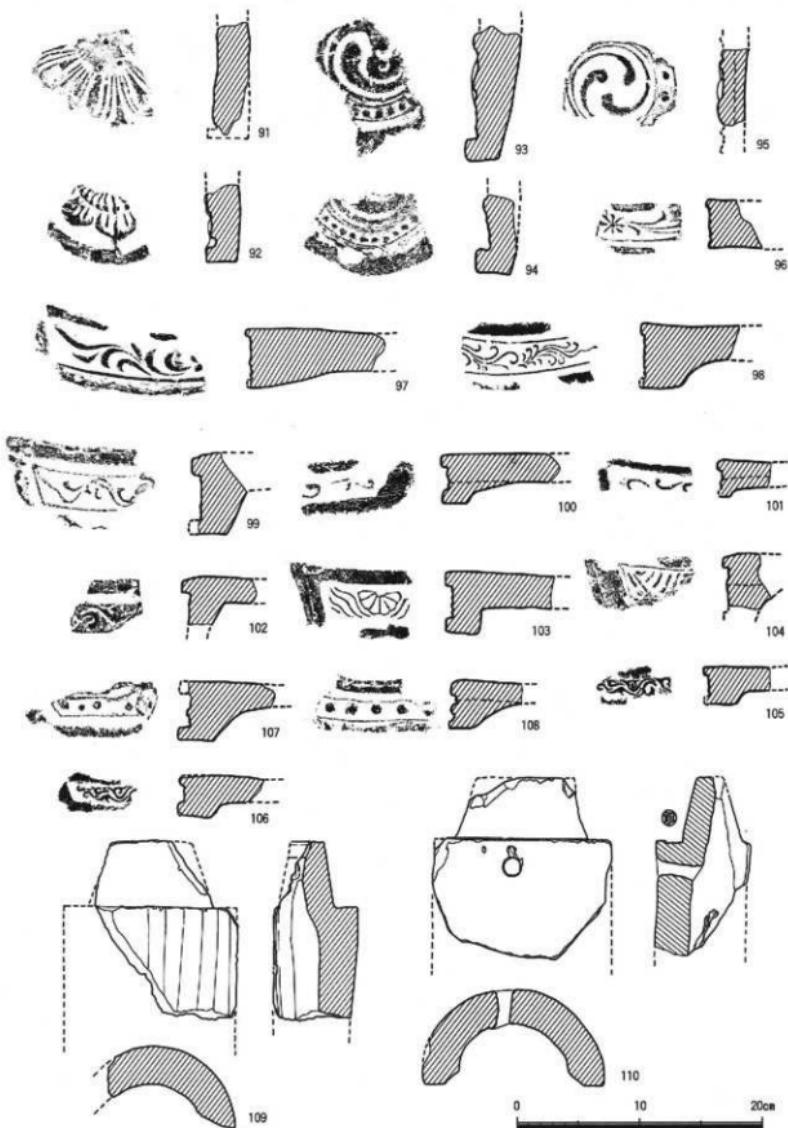
#### 漆器

漆器挽1点(86)を図化した。高台部および体部上半を欠く。おそらく高台が高く、厚手で椀部の深い形態が想定される。木地に下地を施した後、赤漆が全面に塗布されており、体部外面には黒漆によるスタンプ紋(亀甲紋内花菱紋)が施されている。

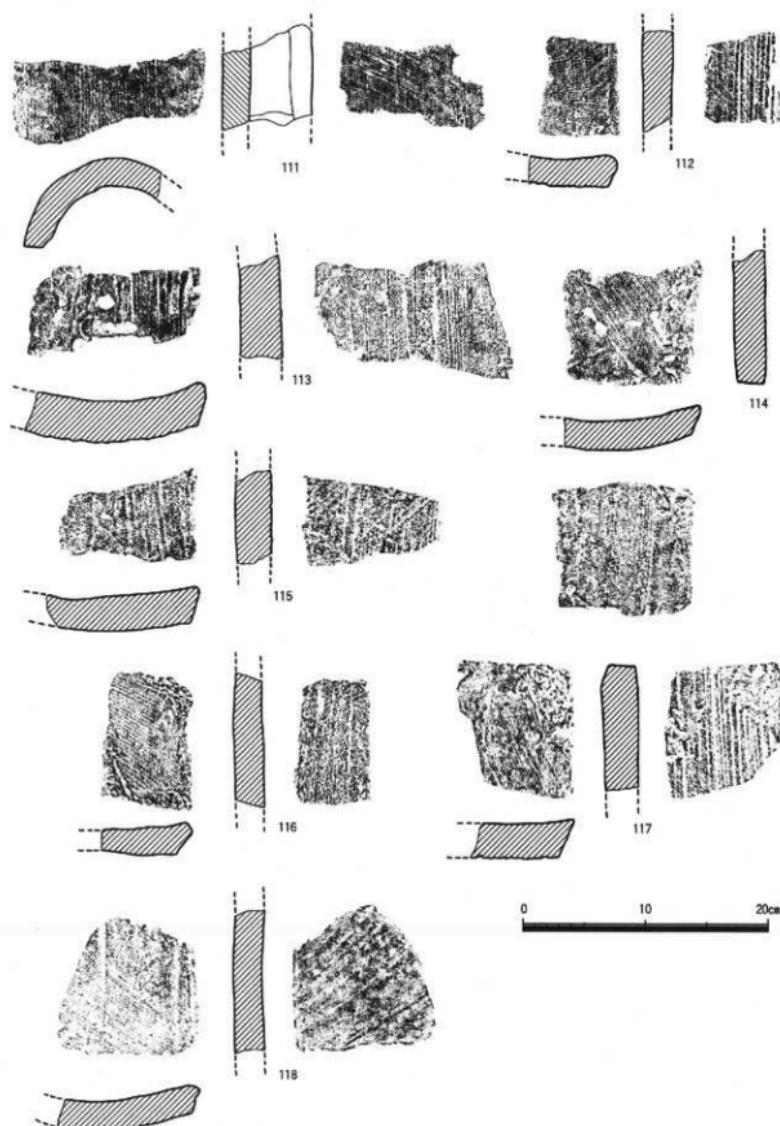
#### 屋瓦

屋瓦類は石垣から出土した遺物のなかで量的に最も多いもので、総出土量の約8割を占めている。ただ、石垣の裏込め用に再利用されたものであるため、二次的な破碎を受けており、大半が小片化していた。図化したものは28点(91~118)である。その内訳は、軒丸瓦5点(91~95)、軒平瓦13点(96~108)、丸瓦3点(109~111)、平瓦7点(112~118)である。

軒丸瓦には連華文2点(91・92)と巴文3点(93~95)がある。(91)は重弁8弁蓮華文軒丸瓦で、外縁を欠く。花弁より低い平坦な中房に1+8に蓮子が配されている。胎土に角閃石が多く含まれており河内産の瓦と推定される。焼成はややあまい。(92)は瓦当面の中房端から外縁にかけて残存する複弁8弁蓮華文軒丸瓦である。凸形中房の周りに雄蕊帯が巡る。外縁は高く直立縁である。内凹に范キズを有する。焼成は良好である。類似するものが喜連東遺跡(大阪市)、大和川今池遺跡(松原市)から出土しているが、これらは、ともに外縁に沿って1条の園線が巡っている。平安時代後期に比定される。(93・94)は同范の三巴文軒丸瓦である。巴は頭部から尾部にかけて逆時計方向の「左巻き」に約半周して終わる。外区内縁には細い園線間に小粒で隆起の小さい珠文を密に巡らせている。外縁は高く直立縁である。焼成はややあまく、胎土に長石・石英・チャート粒を多く含む。同范のものが調査地点の北西約750m地点付近に存在した千眼寺跡(八尾市宮町1丁目)から出土している。鎌倉時代後半に比定される。(95)は左巻きの三巴文を配するもので、



第39図 西区 WSD-201石垣内出土遺物実測図その3



第40図 西区 WSD-201石壇内出土遺物実測図その4

外縁は欠損している。巴は頭部が丸くくびれを有するもので、約半周して終わる。外区内縁には2本の圓線間に大粒で隆起の大きい珠文を粗く巡らせている。焼成は良好であるが、瓦当面は火熱を受けており黒色に変色している。室町時代前期のものか。軒平瓦には唐草文(96-103、105・106)、連珠文(107・108)、水波文(104)がある。(96)はやや小振りの軒平瓦で瓦当面に花文を中心飾りに持つ均正唐草文を配する。顎は直線顎である。平安時代後期に比定される。なお、本調査地の北約350m地点の小字沢堂(八尾市本町7丁目10-2付近 本書P20参照)から同意匠の瓦が出土している。(97)は瓦当面に対して右半分を欠損する。中心飾りの大半は欠損しているが、他例からみておそらく花文を中心飾りに持ち、左右に肉厚で幅のある唐草文が2反転するもので、下外区に隆起の高い圓線が巡る。外縁は直立線で幅が狭くやや低い。顎は踏顎で、瓦当裏面から平瓦凸面にかけて補足粘土を多く用いて接合した後、板状工具で粗いナデ調整を行う。平瓦凹面はやや粗めの布目痕を残すが、瓦当面から3cm前後がケズリ取られている。平安時代後期に比定される。(98)は繊細で隆起の小さい唐草文を配する。外縁は直立線で上外縁より下外縁がやや高い。段顎である。同范のものが千眼寺跡(八尾市宮町1丁目)から出土している。(99)は唐草文を配するもので、瓦当面に離れ砂が認められる。顎は段顎で深い。瓦当部と平瓦の接合においては、平瓦の広端縁を斜方向に切った面と瓦当部の背面とを接合する形を取っている。胎土には多量の角閃石が含まれており、河内産の瓦と推定される。鎌倉時代の所産である。(100)は瓦当面の右端が残存するもので、上下縁に比して側縁幅が広い。瓦当面は離れ砂が認められる。浅い段顎である。(101)は小型品で、主葉のみを反転させる唐草文である。顎は浅い段顎である。(102)は瓦当面に離れ砂が認められる。顎は段顎である。(103)は残存部分で唐草文と半截の菊花文を配する。顎は浅い段顎である。全体に丁寧な作りで、焼成は良好堅緻である。同范のものが本調査地の北約200m地点で市教育委員会により実施された調査(94-303)で出土している。また、類似した意匠をもつものが法隆寺の応永年間(1394-1428年)の修理瓦に認められることから、室町時代中期の所産と推定される。(104)は水波文を配する。室町時代中期の所産であろう。(105・106)は同范で細密な唐草文を配する。(101)と同様小型の瓦で、顎は浅い段顎である。(106)の平瓦凹面に布目痕が残る。胎土中に角閃石を含む河内産の瓦である。(107・108)は全周する圓線内に連珠文を配している。珠文は(108)がやや大粒で隆起の大きいものを配するが、(107)は小粒で隆起が小さく不揃いである。外縁は共に直立線で、幅狭で高位置に付く(107)と低位置に付く(108)がある。顎は段顎である。鎌倉時代の所産である。丸瓦は3点(109-111)図化した。そのうちの2点が玉縁付近の資料である。(109)は胴部凸面から玉縁にかけて丁寧なナデが施されている。胴部凹面は布目痕が残るほか、胴部凹面側縁および胴部凹面玉縁端面には幅広い面取りが行われている。室町時代前期~中期に比定されよう。(110)は(109)に比してやや大きいもので、玉縁部との連結部分に近い胴部凸面に径1.5cmを測る釘穴を有する。胴部凸面は丁寧なナデ、胴部凹面は布目痕と吊り紐痕が認められる。胴部凹面の側縁・側面および凹面玉縁端面には幅広い面取りが行われている。玉縁部と胴部との連結面にスタンプ印が押捺されている。(111)は基本的には胴部凸面の縄引き痕跡をナデ消しているが、完全ではなく一部その痕跡が残る。凹面は細かい布目痕を残す。平瓦は7点(112-118)図化した。凹面に布目痕が残るもの(112・114・117)、凸型木型の痕跡を残すもの(113・115)、布目痕と凸型木型の痕跡を残すもの(118)、糸切りの痕跡が残るもの(116)がある。凸面は(118)が糸切りの痕跡を残す以外は、平瓦

の長軸に沿って縄叩きが行われている。離れ砂の使用が(117)を除く凸面と(113・116)の凹面に認められた。なお、(113)は掲載したなかで器壁が厚い。平安時代後半～鎌倉時代前半の特徴を示しているが限定できない。

#### 土製品

土製品としては土錐1点(87)と円盤状土製品2点(88・89)がある。土錐(87)は一方端が欠損している。中央部が厚く両端すぼむ形態の管状土錐で、残存部分で長さ4.0cm、厚さ0.2～0.4cm、紐孔径0.5cm、重さ5.5gを測る。円盤状土製品は(88)が土師器片を加工したもので径5cm前後、厚さ0.8cmを測る。(89)は平瓦片を加工したもので、径6cm前後、厚さ1.6～2.0cmを測る。

#### 石製品

石製品としては、砥石1点(90)が出土している。長方形を呈するものと推定されるが一部欠損している。残存部分で長さ7.6cm、幅4cm、厚さ0.8cmを測る。側面は研磨され平滑であるが、平面は両面ともに未加工である。石材は粘板岩である。

#### W S D - 202

6 B 地区で検出した。弓状に伸びるもので、南東部はW S D - 201に切られている。検出長7m、幅2.05m、深さ0.15mを測る。埋土はオリーブ黒色細砂混じり粘土である。遺物は出土していない。

#### W S D - 203

西区の東部で検出した。一部搅乱により不明な点があるが、検出部分で逆「L」字状を呈する。検出長は東西4.5m・南北10m、幅0.45～0.55m、深さ0.27mを測る。埋土は上から灰オリーブ色粗粒砂混じり粘質土・暗オリーブ灰色細粒砂混じり粘土・暗オリーブ灰色粗粒砂混じり粘土・暗灰色細粒砂混じり粘土である。遺物は出土していない。なお、形状や位置関係さらには内部埋土中に細粒砂から粗粒砂が堆積していることから、雨落ち溝であった可能性が高い。従って、この溝で区画された東部に建物が想定されるとともに、本遺構とW S D - 201との約1.5m幅が道路状遺構の機能を果たしたものと推定される。

#### W S D - 204

7 A ・ 8 A 地区で検出した。検出長5.0m、幅0.95m、深さ0.15mを測る。埋土は上からオリーブ色疊混じり粘質土・灰オリーブ色粗粒砂混じり粘土・オリーブ色極細粒砂・灰オリーブ粘土である。遺物は出土しなかった。

#### 竹櫛

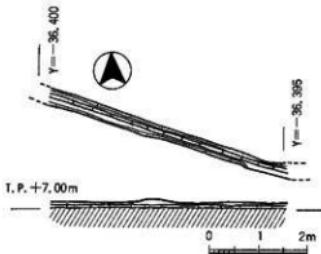
#### 竹櫛201

7 C 地区の北部で検出した。北東～南東方向に伸びるもので、検出長5m、竹筒径0.07mを測る。第1面で検出した竹櫛とは構築方向を異にしている。

#### 埋甕

#### 埋甕201

埋甕201は、8 A 地区から8 B 地区かけて東西方向に伸びるW S D - 201の西部付近の溝底で検出された。

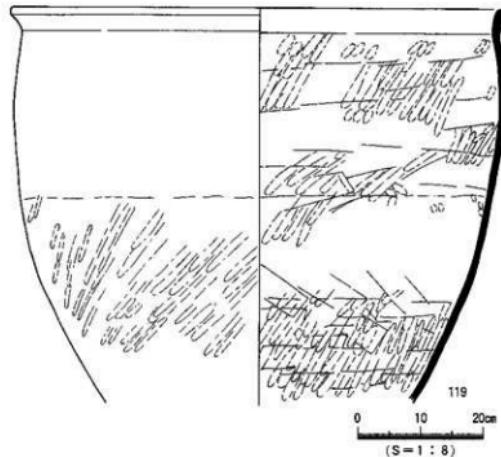


第41図 西区 竹櫛201断面図

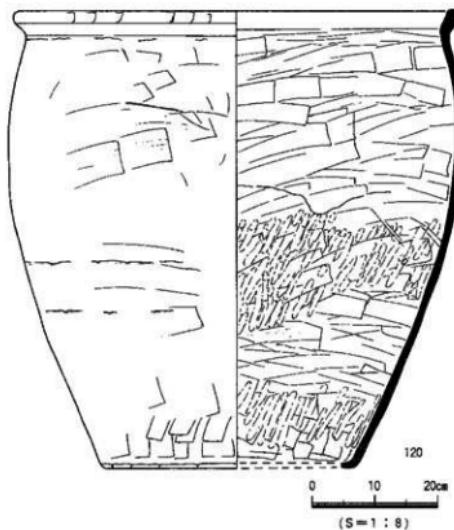
径1.2mを測る円形の掘形の中央に、溝底から約0.5m掘り下げた位置に甕の口縁部を下にして埋置されており、検出時点では底部が欠損していた。内部からは甕の破片以外は出土していない。甕(119)は瓦質で、底部を欠く。口径76cm、現存高63cmを測る。口縁部が外反して器壁を漸増させるもので、端面は幅広で平坦な面を形成している。粘土紐巻き上げによるもので、接合部分を指ナデにより密着した後、ヨコナデが行われている。器形が大きいにも拘わらず、全体に器焼が薄い。

#### 埋甕202

埋甕202は、WS D-201が南北方向に伸びた後、東に屈曲する部分の溝底で検出した。埋甕は径1.3mを測る円形の掘形の中央に、溝底から約0.6m掘り下げた位置に甕の口を下にして埋置されている。甕(120)は瓦質で、口径72cm、高さ75cm、底径39.6cmを測る。埋甕201と同様、甕の底部は欠損している。甕(120)は、埋甕201に使用された甕(119)と形態や製作技法の共通点が認められ同一工人の手による可能性が高い。ただ、(119)に比して全体に炭素付着が不良であるほか、体部外面上半以下は風化のため退色している。なお、これらの埋甕の性格としては、埋甕201・埋甕202の上面の高さと、WS D-201の底部レベルがほぼ一致することから、WS D-201の水位が低下した時に水溜めの機能を果たした施



第42図 西区 埋甕201出土遺物実測図



第43図 西区 埋甕202出土遺物実測図

設と考えられるが、具体的な使用法は判然としない。

#### ・第3面

第2面から0.5~0.6m下部の第10層緑灰色シルト混じり粘土層上面(T.P.+6.6m前後)で古墳時代前期(布留式期新相)の溝2条(WSD-302・WSD-303)、古墳時代中期の溝1条(WSD-301)を検出した。

#### 溝(WSD)

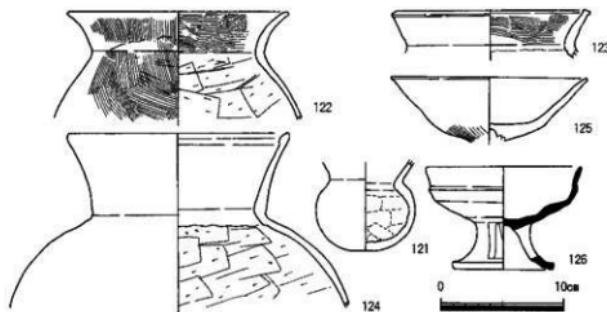
##### WSD-301

西区の北東部で検出した。南東-北西方向に伸びる。調査では西肩を検出したが東肩は調査区外に至るため全容は不明である。検出部分で長さ20m、幅3.5m以上、深さ0.4m以上を測る。埋土は青黒色粘土の單一層である。

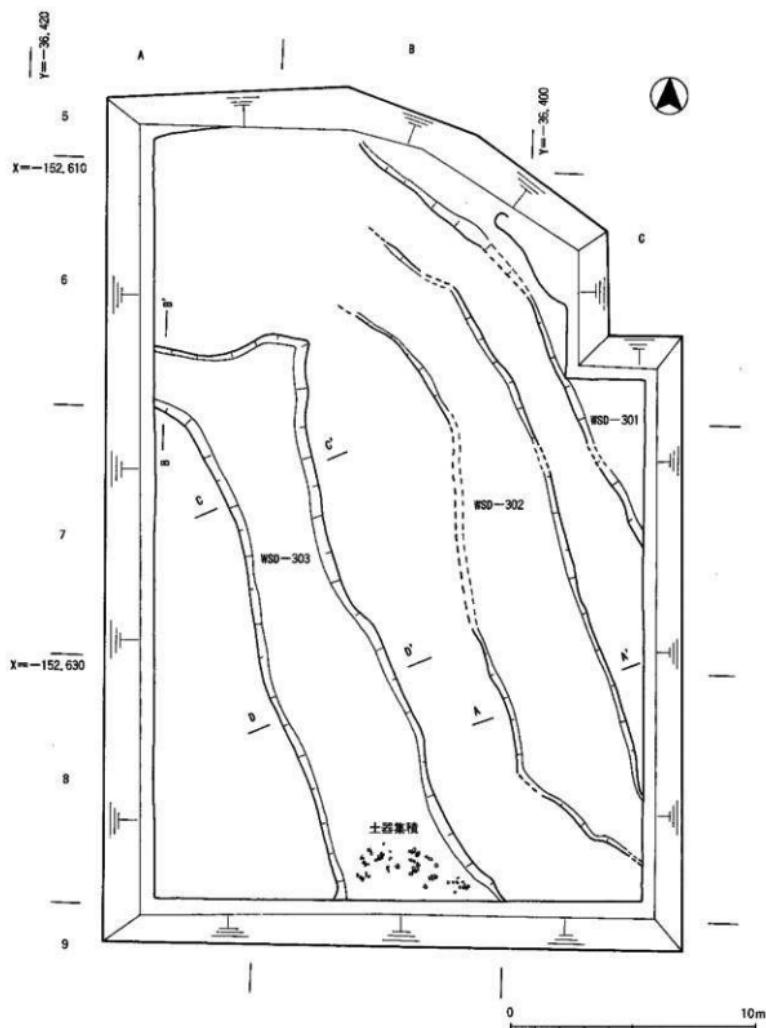
遺物は土師器壺・甕・高杯のほか、須恵器高杯が出土している。岡化したものは6点(122~126)である。(121)は小型丸底壺で体部最大径7.9cm、体部高5.4cmを測る。全体にやや雑な造りのもので器壁も厚い。生駒西麓産である。(122・123)は共に口縁部が「く」字に屈曲する長胴甕の小片である。口縁端部は小さく外反して水平な面をもつ(122)と内傾する端面がやや凹線状に窪む(123)がある。(124)は大型直口壺である。口縁端部内側は大きく肥厚している。(125)は高杯杯部の小片である。杯体部体部から緩やかに内湾して口縁部が斜上方に直線的に伸る。杯体部には放射状のハケ調整が施されている。(126)は須恵器の無蓋高杯で、脚部は短く3方に長方形の透かし窓がある。完形品で口径12.4cm、器高8.2cm、脚部高3.8cm、裾部径7.8cmを測る。初期須恵器の範疇に比定されるものと推定されるが、透かし窓の形状や脚部下部に凸帯が巡らない等の違いがある。5世紀中葉に比定されよう。出土遺物のなかには、一部古い要素を示しているものがあるが、遺構存続時期は5世紀中葉が推定される。

##### WSD-302

WSD-301の西で検出した。南東-北西方向に伸びる溝で、検出長26m、幅2.5~4.2m、深



第44図 西区 WSD-301出土遺物実測図



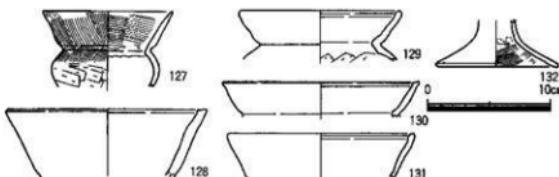
第46図 西区 第3面平面図

さ0.3mを測る。埋土は上から1層緑黒色粘土・2層暗青灰色シルト・3層青黒色粘土の3層がほぼ水平に堆積している。遺物は土師器の細片が少量出土している。そのうち、壺2点(127・128)、甕3点(129~131)、高杯1点(132)を図化した。(以下、古式土師器の分類については参考文献P-84を参照。)(127)は口縁部径が体部最大径を凌駕する小型甕<sub>4</sub>で復元口径10.4cmを測る。体部外面上半から口縁部にかけて縦方向のハケ調整の後ヨコナデが施されている。体部下半はケズリの後ナデ調整が行われている。淡褐色~褐色の色調で胎土は密である。(128)は直口壺Aの口縁部片である。口縁部が上外方に伸びるもので器壁はやや厚めである。

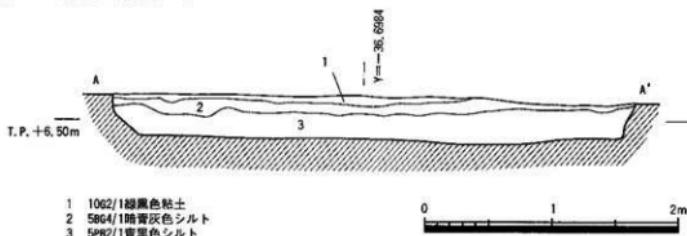
(129~131)はいずれも布留式甕の甕F<sub>2</sub>に分類される甕の口縁部である。口縁端部の形状は3点ともに内傾肥厚する。(132)は高杯脚部である。概ね古墳時代前期(布留式期新相)に比定されよう。

W S D - 303

W S D - 302の西で検出した。南東~北西方向に伸びる溝で、検出長25m、幅2.5~5m、深さ0.4mを測る。埋土は上から1層暗青灰色シルト混じり粘土・2



第46図 西区 W S D - 302出土遺物実測図

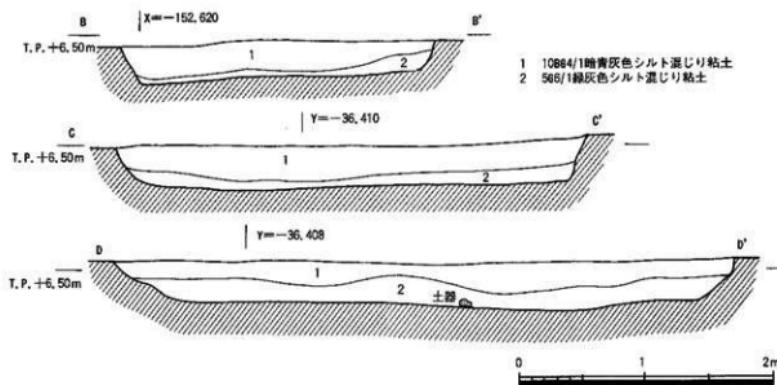


第47図 西区 W S D - 302断面図

層縁灰色シルト混じり粘土の2層が造構の断面形状に沿ってほぼ水平に堆積している。遺物は特に南端部分に集中して出土しており、コンテナ箱に6箱程度が出土している。出土した遺物には、土師器壺・甕・高杯・小形器台・小形鉢・鼓形器台等の土器類の他、砥石等の石製品がある。出土した土器類は、筆者分類の布留Ⅲ(布留式期中相)~布留Ⅳ(布留式期新相)の特徴を示しており、やや時期幅がある資料と考えられる。図化した遺物は85点(133~217)である。その内訳は小型壺11点(133~143)、複合口縁壺5点(144~145・156~158)、広口壺3点(146~148)、直口壺2点(149~150)、大型直口壺4点(151~154)、中型鉢1点(158)、甕24点(159~182)、高杯31点(183~213)、鼓形器台1点(214)、台付き鉢1点(215)、砥石1点(216)がある。

・小型壺(133~143)

いわゆる小型丸底壺と呼称される壺である。11点を図化したが大半が1/4程度の残存であり全容を知り得たものはない。口径5.4~9.6cmを測る小型のI類(133~141)と口径10.0cm以上を測る



第48図 西区 WS D-303断面図

中型のII類(142・143)に分類される。I類のうち、口径と体部最大径が等しい(133・134)が小型壺B<sub>1</sub>、口径が体部径を凌駕するもの(135・136・140)が小型壺B<sub>2</sub>、小型壺B<sub>2</sub>より体部が小型化し口頸部が増大したもの(137~139)小型壺B<sub>4</sub>、と口径5.4cmを測るミニチュア品の(141)に分類される。II類では2点とも体部最大径が口径を凌駕する小型壺B<sub>1</sub>に分類される。全体に成形や胎土において粗製化が進行しており、精良と言えるものは(138・139・143)の3点に過ぎない。色調においても、精良なものが赤褐色系を呈するのに比して粗製のものは黒灰色系を呈するものが多いことが指摘できる。外壁面の調整は、口頸部ヨコナデ、体部ハケ調整ないしはナデを行うものが大半である。

・複合口縁壺(144・145・155~157)

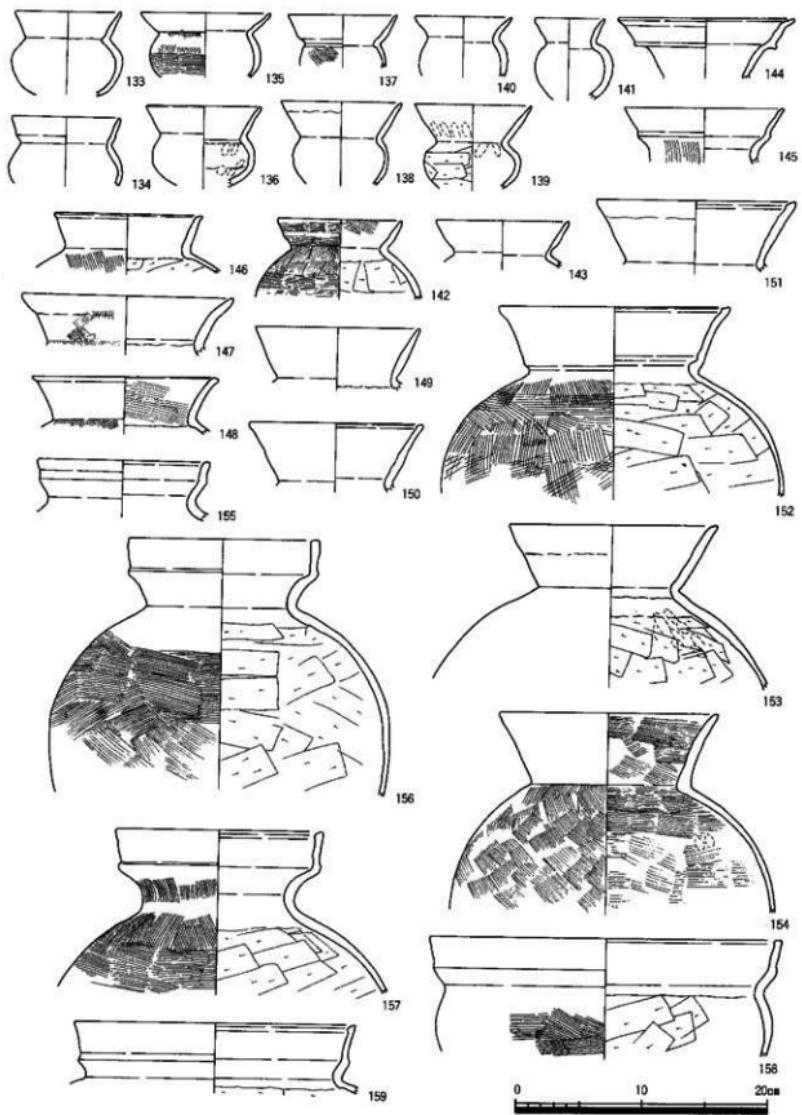
(144)は頸部が斜上方に直線的に伸びるもので複合口縁壺B<sub>3</sub>、(145)は頸部が直上方に伸びる複合口縁壺B<sub>1</sub>に分類される。(144)は頸部と口縁部の境を肥厚させ稜を強調するもので、口縁部は強く外折して終わる。(145)は強いヨコナデにより頸部と口縁部の境に稜を形成している。共に生駒西麓産である。(155~157)は二段に屈曲して上方に直線的に伸びる口縁部を持つもので、複合口縁壺E<sub>2</sub>に分類される。口縁端部が丸く終わる(155)、平坦な面を持つ(156)、内面に大きく肥厚する(157)がある。3点ともに乳褐色系の色調で、胎土はやや粗い。

・広口壺(146~148)

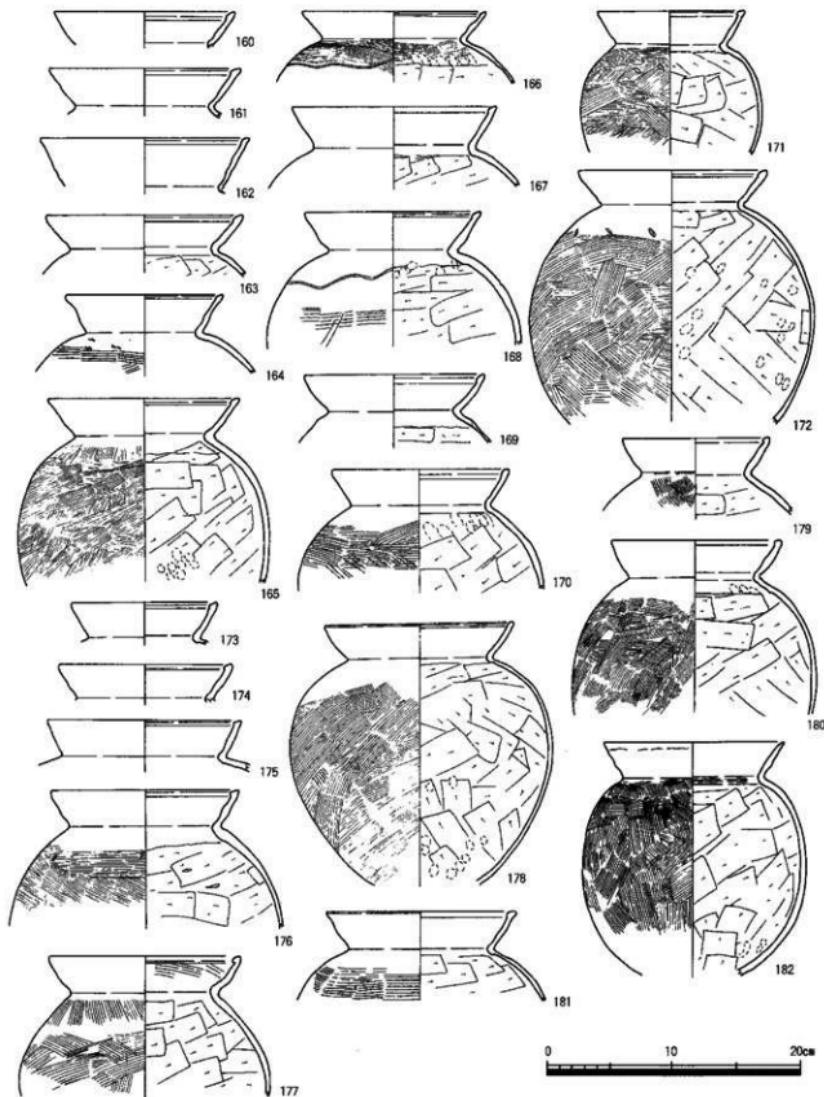
(146)は口縁部が上外方に直線的に伸びるもので、口縁端部は外折し内側に水平な面を有する。(147・148)は口頸部が外反気味に伸びるもので、口縁端部が尖り気味に終わる(147)と外傾する平坦面を持つ(148)がある。3点ともに広口壺Aに分類される。

・直口壺(149・150)

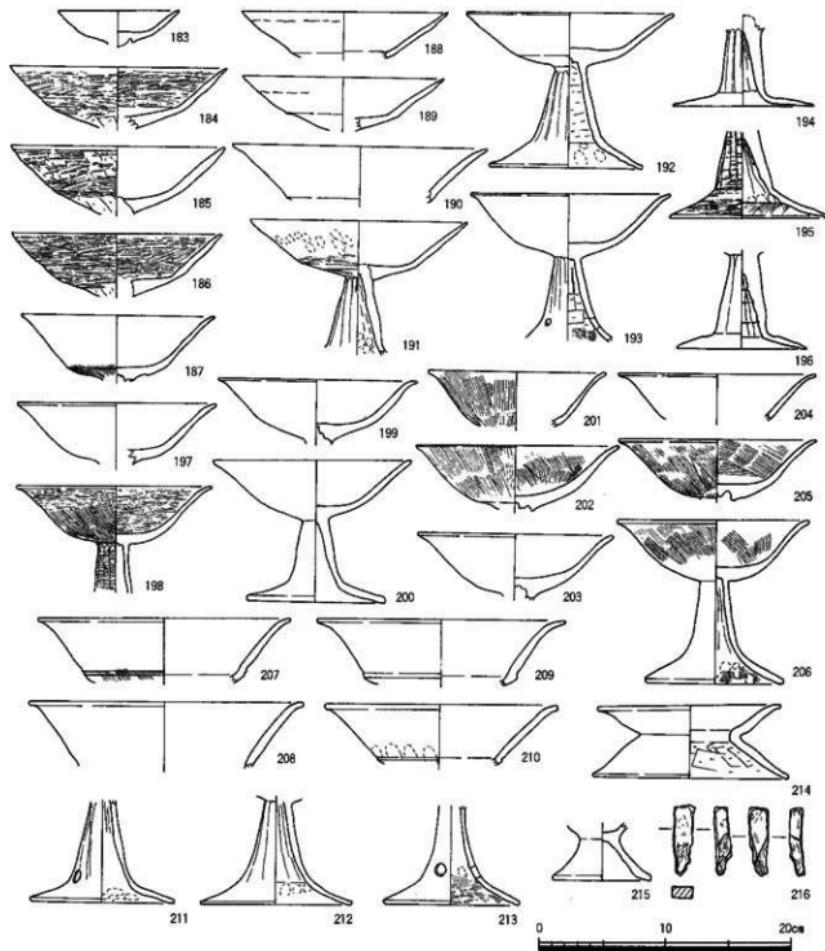
2点ともに、口頸部の小片で残存率は(149)が1/8、(150)が1/4程度である。口径14cm前後、頸部高4.4~4.8cmを測る。直口壺Aに分類される。



第49図 西区 WSD-303出土遺物実測図その1



第50図 西区 W S D-303出土遺物実測図その2



第51図 西区 WS D-303出土遺物実測図その3

・大型直口壺 (151~154)

球形の体部から斜上方に直線的に口頭部が伸びるもので、大型直口壺Aに分類される。内面屈曲部から口頭部下半にかけて、強いヨコナデにより凹線状の窪みが巡る(152)のはか、口縁端部は内側に大きく肥厚し水平な面を有する(151)、尖り気味に終わる(153・154)がある。

・中型鉢 (158)

半球形の体部二段に屈曲する口縁部が付く山陰系の鉢で、鉢 I<sub>1</sub>に分類される。復元口径28.5cmを測るもので、中型鉢のなかでも大きい部類に入る。

・壺 (159~182)

(159)は屈曲した頸部から口縁部が斜上方に伸びるもので、口縁端部は内側に肥厚している。山陰系の壺で壺Kに分類される。布留式壺は21点(160~181)図化した。球形の体部に斜上方から上外方に口縁部が内湾気味に伸びて端部が内側に肥厚する形状の壺F<sub>2</sub>に分類される。一部を除き大半が小片である。口縁端部の肥厚部分の形状から、肥厚部分が大きく内傾し内側が丸味を持って終わるA類(160~172)、A類よりやや角度が浅く肥厚部分内側が尖り気味に終わるB類(173~177)、小さく肥厚し端面が水平な面を呈するものC類(179~180)、口縁端部付近で小さく外反するもので、内側への肥厚は小さいD類(178~181)に区別される。各部位の調整は、口縁部内外面がヨコナデ、体部内面が屈曲部下半までヘラケズリする点で共通している。体部外面の調整は、上位に横方向のハケメおよび波状文を施すものと縦方向のハケメを施すものに二分されるが、以下は方向を一定せず底部までハケメが施されている。また、(164·171·172·176)の体部上半にはヘラ先による押圧文が施されている。(182)は体部が張らず長胴形を呈する。口縁部は斜上方に直線的に伸び、口縁端部は尖り気味で終わる。壺Gに分類される。

・高杯 (183~213)

(183~193)は稜を有する杯部屈曲部から口縁部が斜上方に直線的に伸びるもので、高杯A<sub>5</sub>に分類される。(183)は小型品で口径9.7cm、杯部高2.6cmを測る。(184~193)は口径15.4~20.3cm、器高12.4cm、裾部径12.0cm程度を測る。この形態の高杯の内、杯部外面に横方向のヘラミガキが行われているものが相対的に胎土が良好である。(193)は口縁部付近で強く外反するもので、形態的には新しい要素を示している。(194~196)は脚部で柱状部外面は縦方向に細かい単位で面取りした後、横方向に密なヘラミガキが行われる。柱状部上端の破面からみて、杯部との接合法は円盤充填法が推定される。(197~200)は高杯A<sub>6</sub>に分類されるもので高杯A<sub>5</sub>に比して屈曲部が丸味をもち、斜上方に伸びる口縁部は端部付近で外反するものである。杯部外面の調整では(198)が放射状にハケ調整が行われている以外はヨコナデ調整が行われている。(201~206)は杯部の形態が半球形を呈し、口縁部が外反するもので高杯A<sub>7</sub>に分類される。杯部外面の調整は放射状にハケ調整を行うものが大半を占めている。杯部と柱状部との接合においては、杯部にヘソ状の突起帯を作りそこに中空の柱状部を挿入して接合している。従って、柱状部の上端の破面は中空の輪状になっているものが多い。脚部3点(211~213)はおそらく高杯A<sub>6</sub>ないしはA<sub>7</sub>のものと推定される。(207~210)は杯部屈曲部に明瞭な段を有し、強く外反して終わる口縁部を形成する高杯A<sub>9</sub>に分類される。4点共に小破片であるが、口径は20.0cm前後が推定される。

・鼓形器台 (214)

山陰地方に系譜を持つ鼓形器台である。裾部径が受部径を凌駕するものでほぼ完形品である。口径14.7cm、器高5.8cm、裾径15.6cmを測る。屈曲部に段を持たないもので器台C<sub>2</sub>に分類される。ただ、同時期のものとしては小型のものが一般的であるのに比して本例は大型品である。

・台付き鉢 (215)

「ハ」の字形に開く台部が付く鉢と推定される。台部裾径7.8cm、台部高3.2cmを測る。

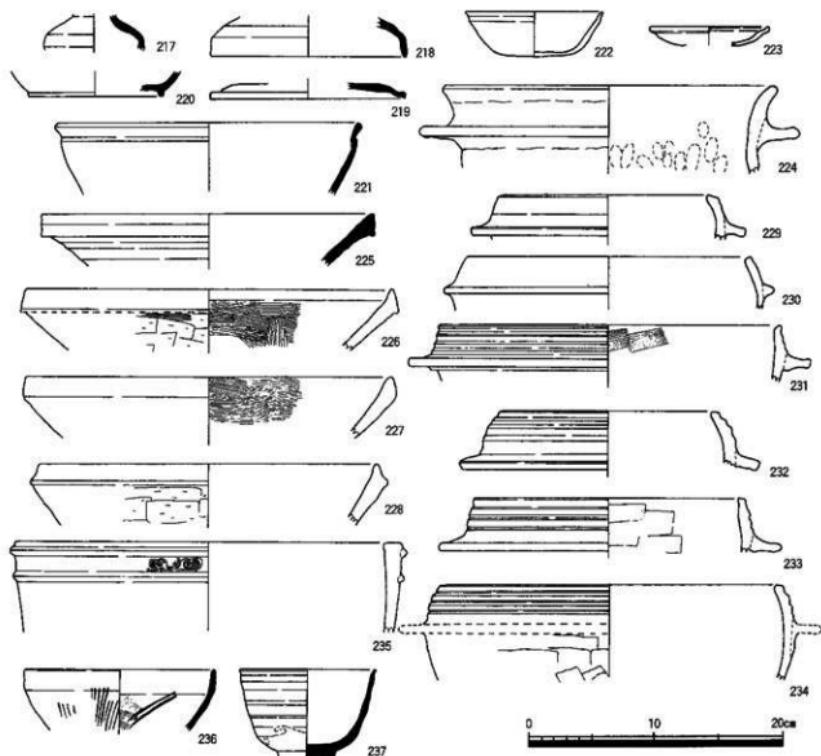
・砥石 (216)

長方形の棒状を呈しており、残存部分で、幅1.4cm、長さ5.2cm、厚さ0.8cmを測る。石材は粘板岩である。

W S D-302の出土遺物については、溝遺構という性格上、時期幅のある土器群であることは言うまでもないが、一部を除いて筆者分類の布留IV期(布留式新相)の特徴とした小型壺B<sub>1</sub>-II(142・143)、複合口縁壺E<sub>2</sub>(155~157)、高杯A<sub>7</sub>(201~206)、高杯A<sub>9</sub>(207~210)、壺F<sub>2</sub>、壺G(182)の器種組成と概ね符合した結果が得られている。その一方で、小型壺においては布留IV期の主流を成す小型壺B<sub>5</sub>が共伴しない点や、高杯においても布留II期(布留式古相)~布留III期(布留式中相)に隆盛を極める高杯A<sub>5</sub>が数量的に優位であることが認められた。以上の点から勘案して、概ね布留III期~布留IV期がW S D-302の存続期間と推定される。

### 3) 第9層出土遺物

第2面と第3面の中間を成す第9層から出土した遺物群である。総数で21点(217~237)を図化した。須恵器は5点(217~221)を図化した。(217)は平城宮分類の壺Cと推定される。8世紀前半の所産である。(218・219)が杯蓋で(219)は宝珠がつくものである。(218)が7世紀代、(219)が8世紀中葉に比定される。(220)は高台を有する杯身である。8世紀代のものである。(221)は鉢小片である。平城宮分類の鉢Dに該当する。9世紀前半に比定される。土師器は3点(222~224)を図化した。(222)は土師器杯である。口径11.0cm、器高3.6cm、底径5.2cmを測る。口縁部外面は強いヨコナデのため明瞭な段を有する。10世紀後半の所産か。(223)は口縁部が「て」の字状を呈する土師器小皿である。11世紀後半の所産である。(224)はほぼ水平に貼り付けられた鈸部から口縁部が外反する土釜である。角閃石を多く含む生駒西麓産の胎土が使用されている。8世紀代のものと推定される。鉢は4点図化した。いずれも口縁部の1/10程度の小破片である。そのうち、須恵質のものが1点(225)、瓦質のものが3点(226~228)である。(225)は東播系の捏ね鉢で12世紀後半のものである。瓦質のものは(226)に見られるように櫛描きによる櫛目を持つ擂鉢である。口縁部の形態的には、口縁部が内傾気味に伸び端部が丸く終わる(226・227)と口縁部外面が強いヨコナデでにより尖り気味で終わる(228)がある。14世紀中~後半に對比されよう。(229・230)は三足を有する瓦質の足釜である。口縁部は共に内傾して伸びるもので、端面がわずかに外傾し、平坦な面を持つ(229)と丸味を持って終わる(230)がある。鈸は長めでやや下向きに貼り付けられ端面が平坦な(229)と短く端面が丸い(230)がある。形態的には前者が古い要素を示している。13世紀後半から14世紀前半に比定されよう。土釜は4点(231~234)図化した。土師質の(231)と瓦質の(232~234)がある。土師質の(231)は、口縁部が直立気味に伸びるもので、外面は強いヨコナデにより3段に形成されている。15世紀後半の所産である。瓦質土釜は、口縁部が内湾して伸びる(232)と内傾して伸びる(233・234)がある。口縁部外面はヨコナデにより段を形成する(232・234)と凹線により段を形成する(233)がある。15世紀後半の所産である。(235)は坪之内氏分類の奈良火鉢の深鉢Iに分類されるものである。口縁部上半の2本の突帯間に花文のスタンプが押捺されている。14世紀末期に成立した器種とされている。本米は瓦質焼成であるが、本例は炭素付着が認められない。(236)は体部内面上半に1条の沈線文以下、刻花文と櫛描き文、外面に又複線文を施文する青磁碗である。この形式の碗の釉色は一般的には黄味を帯びたものが多いが、本例は淡青灰色で光沢がある。森田・横田分類の同安窯系統I-1-bに分類される。



第52図 西区 第9層出土遺物実測図

12世紀中葉～13世紀初頭に比定される。(237)は唐津焼の碗である。1/2程度が残存している。口径10.8cm、器高7.4cm、高台径4.3cmを測る。釉色は灰色で薄く掛けられており、体部下半から高台内は露胎である。17世紀前半に比定される。

## 参考文献

- ・八尾寺内町  
櫻井敏雄・大草一憲 1988「寺内町の基本計画に関する研究－久宝寺寺内と八尾寺内を中心として」八尾市教育委員会
- ・埴輪  
川西宏幸 1978「円筒埴輪総論」「考古学雑誌」第64巻第2号 日本考古学会
- ・古式土師器  
原田昌則 1993「第5章　まとめ　3) 中河内地域における庄内式から布留式土器の編年試案」「Ⅱ久宝寺遺跡(第1次調査)」(財)八尾市文化財調査研究会報告37
- ・古代～中世の土器  
古代の土器研究会編 1992「古代の土器I　都城の土器集成」  
古代の土器研究会編 1993「古代の土器II　都城の土器集成」  
近江後秀・岡田清一 1989「河内南部における古代末期から中世の土器の諸問題－木の本遺跡SW-02出土遺物を中心として」「八尾市文化財紀要4」八尾市教育委員会文化財室
- ・中国産磁器  
横田賢次郎・森田 勉 1978「太宰府出土の輸入中国磁器について－型式分類と編年を中心として」「九州史資料館研究論集4」
- ・瓦器焼  
尾上 実 1983「南河内の瓦器焼」「藤沢一夫先生古希記念論集 古文化論集」  
森島康雄 1992「畿内瓦器焼の併行關係と層年代」「大和の中世土器II」大和古中近研究会
- ・大和火鉢  
坪之内徹 1990「中世南都の瓦器・瓦質土器」「中近世土器の基礎研究VI」日本中世土器研究会  
・土釜  
森島康雄 1990「中河内の羽釜」「中近世土器の基礎研究VI」日本中世土器研究会
- ・備前焼  
間壁忠彦・間壁成子 1966～68・84「備前焼ノート」1～5『倉敷考古館研究集報』1・2・5・18号
- ・東播系須恵器  
丹治康明 1985「東播系須恵器について」「中近世土器の基礎研究」
- ・屋瓦類  
宮本佐知子・佐藤 隆 1996「第IV章 第2節四天王寺とその周辺出土の古代瓦」「四天王寺旧境内遺跡発掘調査報告I」(財)大阪市文化財協会
- ・原田昌則・成海佳子 1983「八尾市埋蔵文化財発掘調査概要56・57年度」「(財)八尾市文化財調査研究会報告3」(財)八尾市文化財調査研究会
- ・法隆寺 1978「法隆寺の古瓦」
- ・酒 斎 1995「13. 東郷遺跡(94-303)の調査」「八尾市内遺跡平成6年度発掘調査報告書」八尾市文化財調査報告31平成6年度国庫補助事業
- ・錢貨  
永井久美男 1996「日本出土錢總覽」兵庫埋錢調査会

## 第3節 出土遺物観察表\*

・凡例 級径—L 1mm以上 M 0.5~1mm未満 S 0.5mm未満 量—○多量 □多い △少ない ▲一番少 色素—赤色酸化土

通 番 号 分 合	國 名 格 級	法量(cm) 口 器 底 ( )復元度	調整・手法	色 素	施 工					焼 成 保 存	残 存 率	地 区 備 考			
					外 面		内 面								
					素 質 石 英 母	長 石 英 母	青 石 英 母	角 閃 石 英 母	チ ヤ ト チ チ の 盐						
1 二	土師器 杯	9.5 3.2 —	外面：口縁部ヨコナデ。体部以下指振 正成形後いナデ。 内面：口縁部から体部下半ヨコナデ。 底部から体部中位放射状紋。	に赤い褐色 無	△M	□S	△S	—	良好	はぼ 光沢	東区第1面 E S D - 101				
2	土師器 杯	(10.6) 2.9 —	外面：口縁部ヨコナデ。体部ナデ。 内面：口縁部ヨコナデ。体部ナデ。	に赤い褐色 無	△S	—	△S	▲M	良好	口縫部 1/10	東区第1面 E N R - 101				
3	土師器 杯	(34.4) 3.5 —	外面：口縁部ヨコナデ。体部以下弱い ナデ。 内面：口縁部から体部下半ヨコナデ。 底部迷張状紋。体部下位放射状紋。	に赤い褐色 無	△S	—	△S	▲S	良好	口縫部 1/15	*				
4	土師器 組	(24.6) 2.6 —	外面：口縁部ヨコナデ。体底ナデ。 内面：口縁部から底部止ヨコナデ。底部 から体部下位放射状紋。	灰褐色 無	△S	▲S	△S	○S	良好	口縫部 1/8	*				
5	土師器 碗	(15.0) — —	外面：口縁部ヨコナデ。体部中位以下 ナデ。 内面：口縁部および底部ヨコナデ。	に赤い褐色 無	○S	—	△S	—	良好	口縫部 1/6	*				
6 二	土師器 外	(19.7) 6.7 —	外面：全体に引鉛が剥離で調整不明。 内面：全体に塗が付着しており調整不明。	赤茶褐色 黒褐色	やや無 M	○S	—	△S	△S	良好	外漏風化 1/2	内面に塗付着			
7 二	土師器 杯	(18.2) 3.6 —	外面：口縁部ヨコナデ。底部ヘラケズ リ。一部剥離調整。 内面：口縁部ヨコナデ。体部ナデ。口 縫部放射状紋。見込みに體部放射状紋。	淡黃褐色 灰白色	無	○S	—	△S	—	良好	外漏一部剥離 1/2	* 表面に 墨着あり			
8	土師器 高杯	— — —	外面：柱状部束方向のナデ。 内面：柱状部ナデ。シザリ目。	に赤い褐色 無	△S	—	△S	○S	良好	柱状部 完存	*				
9	土師器 高杯	7.0 — —	外面：口部および柱状部ナデ。 内面：口部ナデ。	灰白色 無	△S	—	△S	○S	良好	口部 完存	手づくね土着				
10	土師器 高杯	— 番部径(5.6)	外面：柱状部および頭部ナデ。 内面：柱状部および頭部。指揮正成形 後ナデ。	に赤い褐色 無	○S	△S	▲S	○S	赤△S	良好	底部 1/3	*			
11	土師器 土釜	— 身径(26.7)	外面：口縁部および頭部ヨコナデ。 内面：口縁部ヨコナデ。	に赤い褐色 無	○S	○S	○S	M	—	良好	側部 1/10	*			
12	土師器 土釜	— 身径(27.0)	外面：調整全体ヨコナデ。 内面：体部ナデ。頭部の接合部内面に 捺印痕有。	に赤い褐色 無	○S	○S	○S	—	良好	口縫部 1/10	*				
13 二	円筒 埴輪	(17.6)	外面：一次複数のタテハケ後、二次調 整の目棒ヨコハケ。 内面：ナデ。一部、指揮正直。	灰白色 無	○S	○S	○S	—	良好	全体にローリ ングを受ける 最下段 1/4	*				
14	須恵器 史	(22.8) —	外面：口縫部から頭部ヨコナデ。 内面：口縫部から頭部ヨコナデ。	灰白色 無	○S	○S	○S	—	良好	全体にローリ ングを受ける 口縫部 1/8	*				
15 二	須恵器 史	— —	外面：体部筋状タキの後水平方向 のカキメ。 内面：体部青滑波文。	灰白色 無	△S	—	△S	△S	—	良好	全体にローリ ングを受ける 底部 1/2	*			
16	須恵器 杯兼	(14.0) 3.8 —	外面：口縫部頭部ヘラケズリ。 内面：口縫部から大井部同軸ナデ。	灰白色 無	△S	—	—	—	—	盤破	全体にローリ ングを受ける 1/5	*			
17	須恵器 杯身	(12.8) —	外面：立ち上りから受け部下半同軸ナ デ。底付ナデ。 内面：立ち上りから底部同軸ナデ。	淡灰色 無	○S	—	△S	—	—	盤破	1/8	受け部以下灰 かぶり			

\*遺物観察においては斜面観察およびナショナルライトスコープF F-393(×30)を使用。

・凡例 粒径-L 1mm以上 M 0.5~1mm未満 S 0.5mm未満 粒度○多量 △多い △少い ▲希少 ○赤赤一赤色酸化土

地 名 推 定 番 号	目 標 種 類	法量(m) 口 径 高 度 ( <sup>ー</sup> 復元量)	調整・手法		色		质			土	地 成 性 質	充 有 率	地 区 備 考	
			外側 内面		外側 内面		黄 石 英 質	白 石 英 石 母	石 墨 石 母	角 閃 石 母	その他			
			外 面	内 面	白 石 英 質	白 石 英 石 母	石 墨 石 母	角 閃 石 母	その他					
18	傾倒器 杆蓋	(12.5) — —	外側: 外部灰かぶりの為不明。 内側: 天井部からえり部同軸ナダ。	淡灰色 淡青灰色	白 石 英 質	○ S	△ S	△ S	△ S			堅硬	1/10	東区第1面 E N R -102
19	傾倒器 杆身	(30.4) 3.0 —	外側: U鋼部回転ナダ。休眠ナダ。底部未調整。 内側: U鋼部から底部回転ナダ。底部ナダ。	灰色 *	粗 粒 砂 石 等	○ S M	△ S					堅硬	口縫部 1/2 以上	* 口縫部外側灰 かぶり
20	傾倒器 杆身	(13.8) 3.1 —	外側: U鋼部から底部回転ナダ。底部未調整。 内側: U鋼部から底部回転ナダ。底部ナダ。	青灰色 灰青色	やや粗 粒 砂 石 等	○ S M			▲ M			堅硬	約 1/6	*
21	傾倒器 杆身	— — (7.8)	外側: 高台部コナダ。底部ナダ。 内側: 底部ナダ。	淡青灰色 *	やや粗 粒 砂 石 等	○ S M	△ S					堅硬	底部 1/4	*
22	傾倒器 盤	(19.2) 2.6 —	外側: U鋼部回転ナダ。 内側: U鋼部から底部回転ナダ。	淡青灰色 *	白 石 英 質	○ S		▲ S				堅硬	口縫部 1/16	*
23	二 重 底 盤 底 底	原部径(6.2) 2.0 体部最大径(13.1)	外側: 体部上半から底に凹むナダ。体部底に凹むナダ。 内側: 体部底から底部回転ナダ。	淡青灰色 *	やや粗 粒 砂 石 等	○ S M	△ S	○ S				堅硬	体部 1/2	*
24	二 重 底 盤 外	— — 9.2	外側: 体部および底部表面凹凸ナダ。 内側: 体部ナダ。	淡灰色 *	白 石 英 質	△ S M	△ S	△ S				堅硬	底部 充存	*
25	三 重 瓦器 鉢	10.0 5.2 高台径4.7 高台厚0.3	外側: 口縫部コナダ。体部指揮筋成形後壁へハケメ。開窓。 内側: 分合にナダ。見込みから体部に丸み付の繊維なハミガキ。	淡灰色～ 黒灰色 *	白 石 英 質	○ S						良好	完形	東区第1面 E S E -102 内外曲面、 窓ねじり模
26	丸器 鉢	(14.4) — —	外側: U鋼部コナダの後壁ハミガキ。 内側: 体部指揮筋成形。	灰白色～ 黑灰色 *	白 石 英 質	○ S	△ S	○ S				良好	3/4	* 内外面油ぬれ、 窓ねじり模
27	黑色土器 B 模範	高台径(5.6) 高台厚0.2	外側: 高台部コナダ。底部一定方向の迷なーハミガキ。 内側: 見込みと一定方向の密なハミガキ。	黒灰色 *	白 石 英 質		○ S	○ S				良好	底部 1/4	*
28	洗生土器 模範	(35.5) — —	外側: 全体にローリングを受けており調節不可能。口縫部外側に接着による死正反。 内側: U鋼部および底部ナダ。	灰白色 にぶい褐色 灰白色	粗 粒 砂 石 等	○ S M	△ S	△ S	○ S			良好 ローリングを 受ける	口縫部 1/8	東区第2面 E X R -201
29	洗生土器 型	— — 4.6	外側: 体部ナダ。底部ナダ。 内側: 底部ナダ。	浅灰色 *	粗 粒 砂 石 等	○ S M	△ S L	○ S M L	△ S L			良好	底部 充存	*
30	土脚器 型	(12.5) — —	外側: 口縫部コナダ。休眠ナダ。 内側: U鋼部水平方向のハケメ。体部板ナダの後ナダ。	にぶい褐色 *	粗 粒 砂 石 等	○ S M	○ S M L					良好	U縫部 1/4	*
31	洗生土器 高杯	— — 高杯径(10.2)	外側: Uローリングの第一部調整不明瞭。初期ナダ。 内側: 柱状部ナダ。	にぶい褐色 *	粗 粒 砂 石 等	○ S M	○ S M		△ S			良好 ローリングを 受ける	柱状部 1/2	*
32	土脚器 高杯	— — —	外側: 体部指揮筋成形後ナダ。柱脚方向の開窓。 内側: 柱脚ナダ。放射状端。	淡灰褐色 *	粗 粒 砂 石 等	△ S		△ S				良好	柱状部 1/2	*
33	土脚器 高杯	— — 高杯径(10.2)	外側: 柱状部タナ方向のハケメ後ナダ。初期ナダ。 内側: 柱状部ハケゼリ。初期ナダ。	にぶい褐色 *	粗 粒 砂 石 等	○ S L	○ S M L	△ S				良好	柱状部 充存 高杯部 1/3	*
34	二 重 土脚器 土釜	(20.8) — — 鉢径(26.5)	外側: 口縫部コナダ。体部上半以下、 腹内面のハケメ。 内側: 口縫部模様方向のハケメ。体部ナダ、一部指揮筋端。	褐灰色 *	粗 粒 砂 石 等	△ S M	△ S M	○ S	○ S			良好	1/2	四区 第11号

## II 東郷遺跡第37次調査 (TG91-37)

・凡例 粒径-L 1mm以上 MO.5~1mm未満 SO.5mm未満 量=多量 ○=多い △=少ない ▲=希少 ■赤=赤色酸化土

遺物 番号	器 種	粒度 (mm) 口 部 高 度 ( 保元 値 )	測定・手法		色		鉱			土		液成 保育	残存率	地 質
			外観		外観		系 質	石 英	零 母	角 閃	チ ケ ート	モ の 細		
			内面		内面									
35	三 土器 杯	8.8 3.9 -	外観：口縁部ヨコナギ。底部から底部 深部底反彎部ナギ。 内面：体部ヨコナギ。底部ナギ。	にぶい褐色 +	無 無	△S	○S	○S	△S	○S	△S	良好	光形	東区 第1層
36	土器 高杯	7.6 - -	外観：杯底ナギ。柱状部指痕直形成後 ナア。 内面：杯底ナギ。	にぶい褐色 +	無 無	○S	△S	△S	○S	△S	△S	良好	杯底 1/2 完形	手づくね土器
37	三 須恵器 杯身	9.7 3.9	外観：口縁部底反彎ナギ。体部ナギ。底 部四輪ヘラカズリの横ナギ。 内面：口縁部四輪ナギ。底部ナギ。	淡灰色 +	無 無	○S	△S	△S	△S	△S	△S	堅微	口縁部 3/4	*
38	三 須恵器 平板	- 9.2 体部最大径(8.5)	外観：体部半下から下半カキメ以下底 部底反彎ヘラカズリ。 内面：体部横ナギ。底部ナギ。	灰色 +	無 無	○S	△S	△S	△S	△S	△S	堅微	体部1 /2	* 体部上半自然 底部に須恵器 平板滑着
39	三 瓦質 井戸桶	91.8 32.5 厚さ3.3	外観：体部上半椎状工具による波状 紋、以下斜筋文。 内面：板ナギの後ナギ。	灰色 +	やや無 無	△S	△S	△S	△S	△S	△S	良好	光形	西区第1面 WSE-101
40	三 瓦質 井戸筒	82.0 34.2 厚さ3.6	外観：体部上半椎状工具による直筋 紋、以下斜筋文。 内面：板ナギの後ナギ。	灰色 +	やや無 無	△S	△S	△S	△S	△S	△S	良好	光形	西区第1面 WSE-101
41	陶器 壺形目 皿	12.4 3.4 高台厚2.7 高台厚3.3	外観：口縁部から体部下半に施積、高 台斜筋紋。 内面：全面に白泥による刷毛文捺。	赤褐色 褐色	無 無	△S	△S	△S	△S	△S	△S	堅微	ほほ 完形	西区第1面 WSE-104 底漆燒
42	瓦質 擂鉢	(21.6) - -	外観：口縁部ヨコナギ。体部ヘラカズ リ。 内面：口縁部ヨコナギ。体部横擦きに よる捺目。	灰色 +	やや無 無	○S	○S	△S	○S	○S	○S	良好	口縁部 1/8	西区第1面 WSK-103
43	陶器 壺	残存高31.7 35.4	外観：体部ヨコナギ。 内面：体部半幅の広いハケメ感覚。	灰赤色 淡灰色	やや無 無	○S	○S	△S	△S	△S	△S	良好	底部江 元市 都部外 表面處理	西区第1面 WSK-113
44	陶器 擂鉢	(24.8) - -	外観：口縁部2条の粗糞の凹輪ナギに よる捺目。体部横擦ナギ。 内面：口縁部同様ナギ。体部横擦きに よる捺目。	灰白色 にぶい褐色	無 無	○S	○S	△S	△S	△S	△S	堅微	口縁部 1/14	西区第1面 WSD-103 底漆燒
45	陶器 擂鉢	(28.0) - -	外観：口縁部から体部横擦ナギ。 内面：口縁部同様ナギ。体部1本を1 単位とする捺目。	灰黃褐色～ にぶい褐色 灰色	やや無 無	○S	△S	△S	△S	△S	△S	堅微	1/10	西区第1面 WSD-106
47	三 土器 小皿	9.0 2.0	外観：口縁部ヨコナギ。底部指痕压成 形後ナギ。 内面：口縁部ヨコナギ。底部ナギ。	灰白色 +	無 無	△S	△S	△S	△S	△S	△S	良好	光形	西区第2面 WSD-201
48	土器 小皿	8.8 1.4	外観：口縁部ヨコナギ。底部ナギ。 内面：口縁部ヨコナギ。底部ナギ。	灰白色 +	無 無	△M	△M	△M	△M	△M	△M	良好	1/3	*
49	瓦器 盤	- 高台厚7.0 高台厚0.7 ガキ。	外観：高台部ヨコナギ。底部ナギ。 内面：見込み部一定方向の寄なヘラミ ガキ。	黒灰色 +	無 無	○S	○S	○S	○S	○S	○S	良好	底部 2/3 以上	*
50	土器 盤	(25.6) - -	外観：口縁部から薄部下位迄ヨコナ ギ。底部ナギ。 内面：口縁部ヨコナギ。底部横方向の ハケメ。	赤褐色 褐色	無 無	○S	○S	○S	○S	○S	○S	良好	口縁部 1/12	外表面付着
51	三 土器 上蓋	(21.4) - -(23.3)	外観：口縁部から薄部下位迄ヨコナ ギ。底部ナギ。 内面：口縁部ヨコナギ。底部横方向の ハケメ。	褐色 +	無 無	○S	○S	○S	○S	○S	○S	良好	口縁部 1/2 都部1 /2	* 都部下半以下 薄付着
52	須恵器 裏	38.0 - 体部最大径28.8	外観：口縁部横擦ナギ。 内面：指痕压成後板ナギ。	灰色 +	無 無	○S	○S	△S	△S	△S	△S	堅微	口縁部 1/6	外表面かぶり

・凡例 粒径—L 1mm以上 M 0.5~1mm未満 S 0.5mm未満 量—○多量 △多い ▲少ない ▲—希少 ●赤—赤色顔化土

遺物番号	器種	法面 □ 洋高 高 度 〔 〕復元値	高さ・手法	色調	胎土:						焼成 保存	残存率	単区 備考
					外面 内面	太 質 右 直 左 裏 母 角 圓 石 モ リ ト	セ イ ト	その 他					
53 三	黑色し器 片口鉢	— 高台径15.7 高台径1.9	外面: 体部後方のヘラミガキ、底部ナデ。高台部ヨコナデ。 内面: 体部から底部後方向のヘラミガキ。	黒灰色 ＊	骨灰 ◎ S △ S △ S ○ S	▲ M △ M △ M △ M	▲ M △ M △ M △ M	▲ M △ M △ M △ M	▲ M △ M △ M △ M	▲ M △ M △ M △ M	良好	口縁部 1/8 底部 完全	西区第2面 WSE-201
54 一	陶器壺	— (10.6)	外面: 体部ヨコナデ。底部ナデ。白色は灰褐色で細い入裂がある。 内面: 体部ヨコナデ。柄は外面と同じ。	灰褐色 ＊	骨灰 ◎ S △ S △ S ○ S	▲ M △ M △ M △ M	▲ M △ M △ M △ M	▲ M △ M △ M △ M	▲ M △ M △ M △ M	▲ M △ M △ M △ M	堅硬	底部 1/4	＊ 常滑燒
55 二	陶器壺	— 4.9	外面: 体部四輪ナデ。底部ナデ。体部鉄錆斑紋。体部下半以下鉄錆斑紋。 内面: 体部から底部四輪ナデ。	灰赤色 (褐色-基褐色) 灰黄褐色	骨灰 ◎ S △ S △ S ○ S	▲ M △ M △ M △ M	▲ M △ M △ M △ M	▲ M △ M △ M △ M	▲ M △ M △ M △ M	▲ M △ M △ M △ M	堅硬	体部 1/2	西区第2面 WSD-201 廻り無施灰系
56 二	陶器壺	10.9 7.8 高台径4.8 高台高0.8	外面: 体部側面ナデ。体部下半から高台部側面凹入り。 内面: 柄は明るオーブル灰褐色。光沢あり細い入裂。	黄赤色 (褐色-基褐色) 灰白	骨灰 ◎ S △ S △ S ○ S	▲ M △ M △ M △ M	▲ M △ M △ M △ M	▲ M △ M △ M △ M	▲ M △ M △ M △ M	▲ M △ M △ M △ M	堅硬	ほぼ 完形	＊ 吉津燒
57 四	土器器 土釜	(28.6) — 鉢径(27.7)	外面: 口縁部から脚部ヨコナデ。 内面: 口縁部ヨコナデ。	褐褐色 灰褐色 にぼい青褐色	骨灰 ◎ S △ S △ S ○ S	▲ M △ M △ M △ M	▲ M △ M △ M △ M	▲ M △ M △ M △ M	▲ M △ M △ M △ M	赤 M ▲ M	良好	口縁部 1/12	西区第2面 WSD-201 石縫内
58 二	土器器 土釜	(21.6) — 鉢径(28.4)	外面: 体部側面ナデ。体部後方のハマツリ。 内面: 口縁部から体部上半斜方向のハケメ。	褐色 灰褐色	骨灰 ◎ S △ S △ S ○ S	▲ M △ M △ M △ M	▲ M △ M △ M △ M	▲ M △ M △ M △ M	▲ M △ M △ M △ M	▲ M △ M △ M △ M	良好	口縁部 1/12 脚部 1/12	＊ 内面化物付
59 二	瓦質 土釜	(21.0) — 鉢径(27.8)	外面: 口縁部から脚部ヨコナデ。 内面: 口縁部ヨコナデ。以下水平方向のハケメ。	淡灰色 褐色	骨灰 ◎ S △ S △ S ○ S	▲ M △ M △ M △ M	▲ M △ M △ M △ M	▲ M △ M △ M △ M	▲ M △ M △ M △ M	花瓶 M ▲ L	良好	口縁部 1/10 脚部 1/10	＊
60 二	瓦質 土釜	(21.4) — 鉢径(27.1)	外面: 口縁部から脚部ヨコナデ。 内面: 口縁部ヨコナデ。以下水平方向のハケメ。	淡灰色 ＊	骨灰 ◎ S △ S △ S ○ S	▲ M △ M △ M △ M	▲ M △ M △ M △ M	▲ M △ M △ M △ M	▲ M △ M △ M △ M	▲ M △ M △ M △ M	良好	口縁部 1/12 脚部 1/12	＊
61 二	瓦質 土釜	(27.0) — 鉢径(22.7)	外面: 口縁部から脚部ヨコナデ。体部 へタクズリ。 内面: 口縁部ヨコナデ。以下水平方向のハケメ。	淡灰色 ＊	骨灰 ◎ S △ S △ S ○ S	▲ M △ M △ M △ M	▲ M △ M △ M △ M	▲ M △ M △ M △ M	▲ M △ M △ M △ M	▲ M △ M △ M △ M	良好	口縁部 1/8 脚部 1/8	口縁部下に凹孔
62 二	瓦質 土釜	(26.2) — 鉢径(21.6)	外面: 口縁部から脚部ヨコナデ。 内面: 口縁部上半斜方向のハケメの後 ヨコナデ。以下水平方向のハケメ。	淡灰色 ＊	骨灰 ◎ S △ S △ S ○ S	▲ M △ M △ M △ M	▲ M △ M △ M △ M	▲ M △ M △ M △ M	▲ M △ M △ M △ M	▲ M △ M △ M △ M	良好	口縁部 1/12	＊
63 二	埴生器 鉢	(33.0) —	外面: 口縁部から体部ヨコナデ。 内面: 口縁部から体部ヨコナデ。	淡灰色 淡青灰色	骨灰 ◎ S △ S △ S ○ S	▲ M △ M △ M △ M	▲ M △ M △ M △ M	▲ M △ M △ M △ M	▲ M △ M △ M △ M	▲ M △ M △ M △ M	良好	口縁部 1/10	口唇側面丸窓
64 二	瓦質 松井	(30.0) —	外面: 口縁部ヨコナデ。体部ヘラケズ リ。 内面: 口縁部ヨコナデ。体部水平方向 のハケメ。体部上半から幅2.7cm/11本 の縦目。	淡灰色 ＊	骨灰 ◎ S △ S △ S ○ S	▲ M △ M △ M △ M	▲ M △ M △ M △ M	▲ M △ M △ M △ M	▲ M △ M △ M △ M	▲ M △ M △ M △ M	良好	口縁部 1/10	＊
65 二	瓦質 松井	(28.0) —	外面: 口縁部ヨコナデ。体部ヘラケズ リ。 内面: 口縁部ヨコナデ。以下背面側縫 の内面不明。	不赤 にぼい青褐色 灰色	骨灰 ◎ S △ S △ S ○ S	▲ M △ M △ M △ M	▲ M △ M △ M △ M	▲ M △ M △ M △ M	▲ M △ M △ M △ M	▲ M △ M △ M △ M	良好	口縁部 1/10	＊
66 二	瓦質 松井	(32.4) —	外面: 口縁部ヨコナデ。体部ヘラケズ リ。 内面: 口縁部ヨコナデ。体部上半から幅 7cm/9本の縦目。	淡灰色 ＊	骨灰 ◎ S △ S △ S ○ S	▲ M △ M △ M △ M	▲ M △ M △ M △ M	▲ M △ M △ M △ M	▲ M △ M △ M △ M	▲ M △ M △ M △ M	良好	口縁部 1/10	＊
67 一	陶器 鋸鉢	(24.6) —	外面: 口縁部から体部ヨコナデ。 内面: 口縁部から体部ヨコナデ。体部 上半から幅1.6cm/6本の縦目。	黒褐色 灰白色	骨灰 ◎ S △ S △ S ○ S	▲ M △ M △ M △ M	▲ M △ M △ M △ M	▲ M △ M △ M △ M	▲ M △ M △ M △ M	▲ M △ M △ M △ M	堅硬	口縁部 1/10	＊ 燒造燒
68 二	陶器 鋸鉢	(26.2) —	外面: 口縁部から体部ヨコナデ。 内面: 口縁部から体部ヨコナデ。体部 上半から幅1.8cm/9本の縦目。	口縁部にぼい青褐色 体部程色 褐色	骨灰 ◎ S △ S △ S ○ S	▲ M △ M △ M △ M	▲ M △ M △ M △ M	▲ M △ M △ M △ M	▲ M △ M △ M △ M	▲ M △ M △ M △ M	堅硬	口縁部 1/8	＊ 備後燒
69 一	陶器 鋸鉢	(11.4) —	外面: 体部ヨコナデ。両台部ヘラケズ リ。底部内面ナデ。 内面: 体部ナデ。锯目幅1.5cm/6本。	にぼい青褐色 灰黃褐色	骨灰 ◎ S △ S △ S ○ S	▲ M △ M △ M △ M	▲ M △ M △ M △ M	▲ M △ M △ M △ M	▲ M △ M △ M △ M	▲ M △ M △ M △ M	堅硬	口縁部 1/3	＊ 丹波燒

・凡例 粒径-L 1mm以上 M0.5~1mm未満 S0.5mm未満 □多量 ○多い △少い ■希少 ×赤×青色酸化土

遺物 番号	器 種	法量 (ml) 口 器 高 度 ( ) 後元値	調査・手法		色 相 外面 内面	地 下 土 質 石 英 母 岩 石 チ ヤ ー ト そ の 他	燃 成 保 存	残 存 率	地 質 考 察									
			外面	内面		石	長	右	英	母	岩	石	チ ヤ ー ト	そ の 他				
70	二四 陶器 瓶鉢	(34.8)	外面: □縁部から体部ヨコナデ。口縁部2条の凹。	灰赤色 褐色	△ S	△ S	△ S	△ S	△ S	△ S	△ S	△ S	△ S	△ S	堅硬	口縁部 1/10	西区第2回 WS10-201 石畑内 堆積層	
71	二四 陶器 鉢鉢	(35.1)	外面: □縁部から体部上ヨコナデ、以下唇正面後ナデ。 内面: □縁部および体部ヨコナデ。体部上半からcm~6本の縦目。	灰褐色 淡灰褐色	△ S	△ M										堅硬	口縁部 1/12	*
72	二四 瓦質 壺	(30.0)	外面: □縁部から体部上ヨコナデ。体部左上がりヨコナデ。 内面: □縁部ヨコナデ。腹部から体部横方向のハケメ。	淡灰色 *	やや 青	△ S	△ S	△ S	△ S	△ S	△ S	△ S	△ S	△ S	良好	口縁部 1/10	*	
73	二四 瓦質 壺	(34.0)	外面: □縁部から体部上半ヨコナデ、以下水半側のタタキ。 内面: □縁部から腹部ヨコナデ。腹部横方向のハケメ。	淡灰褐色 灰色	△ S	△ S	△ S	△ S	△ S	△ S	△ S	△ S	△ S	△ S	良好	口縁部 1/8	*	
74	二四 瓦質 壺	(42.1)	外面: □縁部ヨコナデ。体部上半ヨコナデ。 内面: □縁部から腹部ヨコナデ。腹部横方向のハケメ。	淡灰褐色 灰色	△ S	△ S	△ S	△ S	△ S	△ S	△ S	△ S	△ S	△ S	良好	口縁部 1/8	*	
75	二四 陶器 壺	(27.2)	外面: □縁部から腹部ヨコナデ。口縁部2条の凹。 内面: □縁部から腹部ヨコナデ。	灰青褐色~ 黒褐色 灰青褐色	△ S	△ S	△ S	△ S	△ S	△ S	△ S	△ S	△ S	△ S	堅硬	口縁部 1/10	* 常滑燒	
76	二四 陶器 壺	(9.6)	外面: □縁部ヨコナデ。体部上半に撓付状文。体部底に凹。	灰褐色 灰青褐色	△ S	△ S	△ S	△ S	△ S	△ S	△ S	△ S	△ S	△ S	堅硬	口縁部 1/4 肩部 1/4	*	
77	二四 陶器 壺	(34.2)	外面: □縁部から体部ヨコナデ。口縁部から体部ヨコナデ。	灰褐色 褐色	△ S	△ S	△ S	△ S	△ S	△ S	△ S	△ S	△ S	△ S	堅硬	口縁部 1/8 肩部 1/8	*	
78	二三 陶器 壺	-	外面: 体部斜削ナデ。底部斜削糸切り。 内面: □縁部下に弦紋施帳。 4.4 内面: 不明。	灰褐色 (褐色~墨褐色) 灰褐色	△ S	△ S	△ S	△ S	△ S	△ S	△ S	△ S	△ S	△ S	堅硬	体部 充存	鹿戸光澤燒系	
79	二三 陶器 壺	(46.6)	外面: □縁部から体部ヨコナデ。底部ヨコナデ。体部に蓋ね模様自然彫。 内面: □縁部から体部ヨコナデ。底部ヨコナデ。体部に模様付付着。	浅黄色 (褐色~墨褐色) 灰褐色	△ S	△ S	△ S	△ S	△ S	△ S	△ S	△ S	△ S	△ S	堅硬	口縁部 1/3	*	
80	二三 瓦質 火鉢	-	外面: □縁部ヨコナデ。体部上半に花文のステンプ。 内面: □縁部ナデ。	淡灰色 +	△ S	△ S	△ S	△ S	△ S	△ S	△ S	△ S	△ S	△ S	良好	口縁部 小片	奈良火鉢	
81	二三 瓦質 火鉢	(42.4)	外面: □縁部ヨコナデ。体部上半の2分の凸面部に花文のステンプ。 内面: □縁部から体部ヨコナデ。	灰褐色 +	△ S	△ S	△ S	△ S	△ S	△ S	△ S	△ S	△ S	△ S	良好	口縁部 1/24	*	
82	二三 瓦質 火鉢	(43.7)	外面: □縁部ヨコナデ。体部上半の2分の凸面部に花文のステンプ。 内面: □縁部から体部ヨコナデ。	灰褐色 淡灰色	△ S	△ S	△ S	△ S	△ S	△ S	△ S	△ S	△ S	△ S	良好	口縁部 1/8	*	
83	二三 中國青白 陶器	(32.2)	外面: 体部斜削ナデ。斜削はすくんだ線色。參は光沢があり全体に板目。 内面: 口入孔がある。	くすんだ緑色 +	△ S	△ S	△ S	△ S	△ S	△ S	△ S	△ S	△ S	△ S	堅硬	口縁部 1/10	*	
84	二五 中國青白 陶器	高台律(5.5) 高台六(0.6)	-	外面: 軸は淡青色で一部高台斜削部分及ぶ。 内面: 見込みに「金下酒池」の鉢文入タブ。金文の2字のみ遺存。	淡青色 +	△ S	△ S	△ S	△ S	△ S	△ S	△ S	△ S	△ S	堅硬	底部 1/3	龍泉窯系	
85	二五 中國青白 陶器	高台律(5.8) 高台六(0.6)	(11.5)	外面: 軸は淡青色で光沢があり、高台斜削部分及ぶ。 内面: 軸は淡青色の軸	淡青色 +	△ S	△ S	△ S	△ S	△ S	△ S	△ S	△ S	△ S	堅硬	底部 1/4	*	
87	上製品 土錐	直径 1.2 長さ(4.0)	外面: ナデ。 内面: 体状W孔による孔。	灰白色 +	△ S	△ S	△ S	△ S	△ S	△ S	△ S	△ S	△ S	△ S	良好	一方端 を欠損	*	

・凡例 鉛錠一L 1m以上 M0.5~1m未満 S0.5m未満 量一○多量 ○一多い △一少ない ▲一希少 \*赤一赤色顔化土

道 番 号	国 名 稱	法 量(cm) 門 高 度 往 來 ( ) 復元度	周 覽 手 法		色 調		始 上 土					地 區 備 考	
			外 面	内 面	赤 黃 石 英 法	白 石 英 法	角 石 英 法	チ オ リ ト	その 他	地 成 程 序	残 存 率		
88	二 五	円盤状 土製品	直径5.0 厚5.0	外観：ナゲ。 内面：ナゲ。	黒灰色 淡褐色	白 黄 石 英 法	○ S M	○ S M			良好	完形 西区第2面 WSD-201 石面内 上部断面を加工	
89	二 五	円盤状 土製品	直径6.0 厚21.8	外観：ナゲ。 内面：ナゲ。	淡灰色 +	白 黄 石 英 法	△ S M	○ S M	△ S		良好	完形 平板片を加工	
90	瓦質 灰	76.0 (53.0)	外観：口縁部から体部指鏡形成後ナ ゲ。 内面：口縁部から体部指鏡形成後ナ ゲ。	暗灰色～ 黑色 黑色	白 黄 石 英 法	△ S M	△ S M	△ S	○ S		良好	体部下 半以下 欠損 西区第2面 粗粒201	
91	瓦質 灰	72.0 75.0 39.6	外観：口縁部ヨコナゲ。以下底部底丁 字ナゲ。 内面：口縁部ヨコナゲ。体部から底部 指鏡形成および板ナゲ。	淡褐色～ 黑色 黑色	白 黄 石 英 法	△ S M	○ S M	△ S			良好	底部欠損 西区第2面 埋藏202	
92	二 八	七脚器 小型丸底 盆	体部底大径7.8	外観：口縁部から体部中位底ヨコナ ゲ。以下ナゲ。 内面：口縁部から体部中位底ヨコナ ゲ。中位以下側面底直角引出	淡褐色 +	白 黄 石 英 法	△ S M	○ S M	△ S M	○ S M		良好	体部は はげ 西区第3面 WSD-301
93	土 脚器 長脚器	(17.6)	外観：口縁部底大径のハメ後ヨコナ ゲ。 内面：体部左上げのハケメ。	淡黄色 +	白 黄 石 英 法	△ S M	○ S M	△ S M	○ M L		良好	口縫部 1/6 底部 1/6 *	
94	土 脚器 短脚器	(15.0)	外観：口縁部ヨコナゲ。	にぶい橙色 +	白 黄 石 英 法	○ S L	○ S M	▲ S	○ S	水 ▲ S	良好	口縁部 1/4 *	
95	土 脚器 大型直口 壺	(17.6)	外観：口縁部から体部ヨコナゲ。 内面：口縁部から体部上半ヨコナゲ。 体部上半凹ハケメ。	浅黄色 +	白 黄 石 英 法	△ S M	△ S M	▲ S	○ S		良好	口縫部 1/3 内部 1/3 *	
96	土 脚器 高杯	(15.6)	外観：口縁部ヨコナゲ。杯体部放射狀 ハケメ。 内面：口縁部ヨコナゲ。杯底直ナゲ。	灰黄色 +	白 黄 石 英 法	○ S L	○ S M	▲ S	○ S		良好	杯部 1/5 造りし惡3個	
97	二 八	須恵器 無蓋壺	12.4 8.2 肩部高3.8 柄部径7.8	外観：口縁部および脚部ヨコナゲ。内 部は仰以下降ハケメ。 内面：口縁部ヨコナゲ。杯底部ナゲ。 脚部ヨコナゲ。	淡灰色 +	白 黄 石 英 法	○ S L	○ S L		△ M	堅致	完形 *	
98	二 八	土 脚器 小型丸底 器F:	10.4	外観：口縁部から底部上半斜め方向のハメ 後ヨコナゲ。底部上半凹ハケメの後ナゲ。 内面：口縁部ヨコナゲの體部。	褐色 にぶい黄褐色	白 黄 石 英 法	△ S L	△ S M	○ S	○ S		良好	口縫部 3/4 体部 2/3 西区第3面 WSD-302
99	土 脚器 直口壺	(15.8)	外観：口縁部ヨコナゲ。 内面：口縁部ヨコナゲ。	灰白色 +	白 黄 石 英 法	○ S L	○ S M	○ S	△ S		良好	口縫部 1/8 口縫部に底直	
100	土 脚器 壺F:	(12.7)	外観：口縁部ヨコナゲ。 内面：口縁部ヨコナゲ。体部思慮部以 下ハケメ。	にぶい黄褐色 +	白 黄 石 英 法	○ S L	△ S M	△ S M	○ S		良好	口縫部 1/4 *	
101	土 脚器 要F:	(35.4)	外観：口縫部ヨコナゲ。 内面：口縫部ヨコナゲ。	灰白色 灰白色～ にぶい黄褐色	白 黄 石 英 法	○ S M	○ S M	△ S			良好	口縫部 1/10 *	
102	土 脚器 器F:	(14.7)	外観：口縫部ヨコナゲ。 内面：口縫部ヨコナゲ。	褐灰色 淡褐色	白 黄 石 英 法	△ S M	○ S M	△ S M	○ S		良好	口縫部 1/12 口縫部外側面有	
103	土 脚器 高杯	柄部径(9.6)	外観：口縫部から体部中位ヨコナゲ。 内面：柱状部ナゲ。把部斜め方向のハ ケメ。	にぶい黄色 +	白 黄 石 英 法	△ S M	○ S M	△ S M	○ S	水 ○ S	良好	把部 1/3 *	
104	二 八	土 脚器 小底丸底 器D:-1	(8.4)	外観：口縫部から体部中位ヨコナゲ。 内面：口縫部ヨコナゲ。	にぶい褐色 +	白 黄 石 英 法	○ S M	○ S M	△ S M	○ S	良好	1/2 西区第3面 WSD-303	

・凡例 粒径 L 1mm以上 M0.5~1mm未満 S0.5mm未満 量=○多量 △=多い ▲=少い ▲赤=赤色酸化土

地 物 名 称 番 号	面 積 (m <sup>2</sup> )	法 量 (m)	清 整 手 法	色 底	上 下 面	燒 成 保 存	残存率	地 区 備 考			
					外 面						
					素 質	長 石	石 英	云 母	角 閃 石	チ ヤ ト の 鉄 鉱	
					内 面						
134 二 八 土 師 器 小 型 九 底 盤 B-1	(8.6)	-	外面：口縫部から体部中位ヨコナダ、以テナダ。 内面：口縫部ヨコナダ。体部ナダ。	灰白色～淡赤褐色 △	粗 粒 M	○ S M	○ S M	△ S	▲ L	良好 一部風化	1/3 西区第3面 WSD-303
135 二 八 土 師 器 小 型 九 底 盤 B-1	(0.2)	-	外面：口縫部ヨコナダ。体部東平方向 のハケナダ。 内面：口縫部ヨコナダ。体部ナダ。	淡褐色 +	粗 粒 M	○ S M	△ S	△ S	△ S	良好	1/4 *
136 二 八 土 師 器 小 型 九 底 盤 B-1	(9.0)	-	外面：口縫部ヨコナダ。体部ナダ。 内面：口縫部ヨコナダ。体部ナダ。	淡褐色～ 極天色 極天色	粗 粒 M	○ S M	○ S M	○ S	○ S	良好	1/4 *
137 二 八 土 師 器 小 型 九 底 盤 B-1	(8.8)	-	外面：口縫部ヨコナダ。体部側め方向 のハケナダ。 内面：口縫部ヨコナダ。体部ナダ。	灰褐色 +	粗 粒 M	△ S	△ S	△ S	○ S	良好	1/4 外面に焼付着
138 二 八 土 師 器 小 型 九 底 盤 B-1	(9.6)	-	外面：口縫部ヨコナダ。体部ナダ。底 部ナダ。 内面：口縫部ヨコナダ。体部ナダ。	褐色 +	粗 粒 M	○ S M	○ S M	○ S	△ S	良好 全体に風化	1/4 *
139 二 八 土 師 器 小 型 九 底 盤 B-1	(9.2)	-	外面：口縫部から体部ヨコナダ。 体部中位以下ドヘラマツリ。 内面：口縫部ヨコナダ。体部ナダ。	にぶい褐色 +	粗 粒 M	△ S N	○ S M	○ S M	○ S	良好	1/4 *
140 二 八 上 師 器 小 型 九 底 盤 B-1	(9.0)	-	外面：口縫部ヨコナダ。体部ナダ。 内面：口縫部ヨコナダ。体部ナダ。	淡褐色 +	粗 粒 M	○ S M	△ S	△ S	▲ S	良好 全体に風化	1/4 *
141 二 八 土 師 器 小 型 九 底 盤 B-1	(5.4)	-	外面：口縫部ヨコナダ。体部ナダ。 内面：口縫部ヨコナダ。体部ナダ。	褐褐色 +	粗 粒 M	○ S M	○ S M	△ S	▲ S	良好	1/3 *
142 二 八 上 師 器 小 型 九 底 盤 B-1	(10.0)	-	外面：口縫部横方向のハケナメ。体部縱 方向のハケナメ後、東平方向のハケナメ。 内面：口縫部横方向のハケナメ。体部上 以下ドヘラマツリ。	褐色 +	粗 粒 M	△ S M	△ S M	△ S	△ S	良好	1/4 *
143 二 八 土 師 器 小 型 九 底 盤 B-1	(10.4)	-	外面：口縫部ヨコナダ。一部風化の為 小明瞭。 内面：口縫部ヨコナダ。体部ナダ。	淡黃褐色 +	粗 粒 M	○ S M	○ S M	△ S	△ S	良好 一部風化	口縫部 1/4 *
144 二 九 土 師 器 復 合 山 腹 盤 B-1	(14.0)	-	外面：口縫部から腹部ヨコナダ。 内面：口縫部から腹部ヨコナダ。	淡黄色 +	粗 粒 M	○ S M	○ S M	△ S	△ S	良好	口縫部 2/3 *
145 土 師 器 復 合 山 腹 盤 B-1	(2.5)	-	外面：口縫部ヨコナダ。腹部縱方向の ハケナメ後ヨコナダ。 内面：口縫部から腹部ヨコナダ。	淡黄色 +	粗 粒 M	○ S M	○ S M	○ S M	○ S	良好	口縫部 1/12 *
146 土 師 器 底 山 腹 盤 A	(11.6)	-	外面：口縫部ヨコナダ。腹部縱方向の ハケナメ。 内面：口縫部ヨコナダ。屈曲部底ドヘ ラマツリ。	褐褐色 +	粗 粒 M	○ S M	○ S M	○ S M	△ S	良好	口縫部 1/4 *
147 土 師 器 底 山 腹 盤 A	(16.7)	-	外面：口縫部纵方向のハケナメの後ヨコ ナダ。 内面：口縫部ヨコナダ。	淡黃褐色 +	粗 粒 M	△ M L	△ M L	△ M L	△ M	良好	口縫部 1/12 *
148 土 師 器 底 山 腹 盤 A	14.5	-	外面：口縫部纵方向のハケナメ。 内面：口縫部纵方向のハケナメ。体部ナダ。	灰白色～ にぶい褐色 +	粗 粒 M	○ S L	○ S L	△ S	△ S	良好 一部風化	口縫部 2/3 口縫部に黒斑
149 土 師 器 底 山 腹 盤 A	(13.1)	-	外面：口縫部ヨコナダ。 内面：口縫部ヨコナダ。	にぶい褐色 +	粗 粒 M	△ S M	△ S M	△ S M	△ S	良好	口縫部 1/12 *
150 土 師 器 底 山 腹 盤 A	(13.8)	-	外面：口縫部ヨコナダ。 内面：口縫部ヨコナダ。	淡褐色 +	粗 粒 M	○ S M	○ S M	△ S	△ S	良好	口縫部 1/4 *

・凡例 鉛錠 L 1 m以上 M 0.5~1 m未満 S 0.5m未満 黒一○多量 ○一多い △一少ない ▲一希少 条赤一赤色酸化土

順 番 号	固 定 種 類	法量(m) 口 留 底 ( <sup>1</sup> )復元度	調 査 手 法	色 成	粘 土						成 分	地 区 概 要		
					外 面	内 面	水 質	長 石	石 墨	角 閃 石	チ ヤ ート			
151 <sup>二</sup> 丸	上部砂 大型底口 盤A	(15.8) —	外観：口縫部ヨコナデ。 内面：口縫部ヨコナデ。	にぶい黄褐色 ＊	外 面	内 面	水 質	長 石	石 墨	角 閃 石	チ ヤ ート	その 他	良好 ＊	口縫部 1/4 四区第3面 WSD-303
152 <sup>二</sup> 丸	土縫砂 大型底口 盤A	(18.4) —	外観：口縫部から全体上半ヨコナデ。 内面：口縫部から底部ヨコナデ、以下ハラケズリ。	にぶい褐色 ＊	外 面	内 面	水 質	長 石	石 墨	角 閃 石	チ ヤ ート	その 他	良好 ＊	口縫部 1/3 四区第1面 1/2
153 <sup>二</sup> 丸	土縫砂 大型底口 盤A	16.5 —	外観：口縫部ヨコナデ。体部ナデ。 内面：口縫部ヨコナデ。体部上半ナデ、以下ハラケズリ。	褐色 ＊	外 面	内 面	水 質	長 石	石 墨	角 閃 石	チ ヤ ート	その 他	良好 ＊	口縫部 ほぼ完 存
154 <sup>二</sup> 丸	土縫砂 大型底口 盤A	(17.3) —	外観：口縫部ヨコナデ。体部ハケメ。 内面：口縫部横方向のハケメ。体部上半横方向のハケメ。	淡灰褐色 灰褐色	外 面	内 面	水 質	長 石	石 墨	角 閃 石	チ ヤ ート	その 他	良好 ＊	口縫部 ほぼ完 存
155 <sup>二</sup> 丸	上縫砂 後合口縫 盤E	(13.6) —	外観：口縫部から脇部ヨコナデ。 内面：口縫部から脇部ヨコナデ。体部上半ナデ。	灰白色 ＊	外 面	内 面	水 質	長 石	石 墨	角 閃 石	チ ヤ ート	その 他	良好 ＊	口縫部 1/3
156 <sup>二</sup> 丸	土縫砂 後合口縫 盤E	(15.1) —	外観：口縫部から全体上半ヨコナデ。 内面：口縫部から底部ヨコナデ、以下ハラケズリ。	にぶい褐色 ＊	外 面	内 面	水 質	長 石	石 墨	角 閃 石	チ ヤ ート	その 他	良好 ＊	口縫部 脇部 後合口縫 盤E
157 <sup>二</sup> 丸	土縫砂 側合口縫 盤E	16.5 —	外観：口縫部ヨコナデ。延長方向のハケメ。 内面：口縫部ヨコナデ。体部上半横と水平方向のハケメ。	浅灰褐色 ＊	外 面	内 面	水 質	長 石	石 墨	角 閃 石	チ ヤ ート	その 他	良好 ＊	口縫部 脇部 側合口縫 盤E
158 <sup>二</sup> 丸	土縫砂 中間体 I	(28.1) —	外観：口縫部から全体上半ヨコナデ。 内面：口縫部ヨコナデ。体部上半ハケメ。	にぶい黄褐色 ＊	外 面	内 面	水 質	長 石	石 墨	角 閃 石	チ ヤ ート	その 他	良好 ＊	1/8
159 <sup>二</sup> 丸	土縫砂 壁K	(22.4) —	外観：口縫部から脇部ヨコナデ。 内面：口縫部ヨコナデ。体部ハラケズリ。	にぶい黄褐色 ＊	外 面	内 面	水 質	長 石	石 墨	角 閃 石	チ ヤ ート	その 他	良好 ＊	口縫部 1/8
160 <sup>二</sup> 丸	土縫砂 壁F	(14.3) —	外観：口縫部ヨコナデ。 内面：口縫部ヨコナデ。	灰白色 ＊	外 面	内 面	水 質	長 石	石 墨	角 閃 石	チ ヤ ート	その 他	良好 ＊	口縫部 1/4
161 <sup>二</sup> 丸	土縫砂 壁F	(05.1) —	外観：口縫部ヨコナデ。 内面：口縫部ヨコナデ。	灰黃褐色 ＊	外 面	内 面	水 質	長 石	石 墨	角 閃 石	チ ヤ ート	その 他	良好 ＊	口縫部 1/4
162 <sup>二</sup> 丸	土縫砂 発F	(06.6) —	外観：口縫部ヨコナデ。 内面：口縫部ヨコナデ。	淡褐灰色 灰褐色	外 面	内 面	水 質	長 石	石 墨	角 閃 石	チ ヤ ート	その 他	良好 ＊	口縫部 1/4
163 <sup>二</sup> 丸	土縫砂 発F	(05.5) —	外観：口縫部ヨコナデ。体部ナデ。 内面：口縫部ヨコナデ。体部ハラケズリ。	灰白色 ＊	外 面	内 面	水 質	長 石	石 墨	角 閃 石	チ ヤ ート	その 他	良好 ＊	口縫部 1/5
164 <sup>二</sup> 丸	土縫砂 発F	(12.4) —	外観：口縫部ヨコナデ。体部上半水平方向のハケメ。 内面：口縫部ヨコナデ。体部風化の鼻不明瞭。	淡褐灰色 ＊	外 面	内 面	水 質	長 石	石 墨	角 閃 石	チ ヤ ート	その 他	良好 ＊	口縫部 1/4 肩部 1/4 口縫部風化 鼻不明瞭
165 <sup>二</sup> 丸	土縫砂 発F	(05.0) —	外観：口縫部ヨコナデ。体部上半威力方向のハケメ。 内面：口縫部ヨコナデ。体部ハラケズリ。	灰黃褐色 ＊	外 面	内 面	水 質	長 石	石 墨	角 閃 石	チ ヤ ート	その 他	良好 ＊	口縫部 1/5 体部 1/2 体部風化付着
166 <sup>二</sup> 丸	土縫砂 発F	(04.6) —	外観：口縫部ヨコナデ。体部ナデ。 内面：口縫部ヨコナデ。体部ハラケズリ。	にぶい褐色 ＊	外 面	内 面	水 質	長 石	石 墨	角 閃 石	チ ヤ ート	その 他	良好 ＊	口縫部 1/8 体部 1/6 口縫部黒瓦
167 <sup>二</sup> 丸	土縫砂 発F	(04.2) —	外観：口縫部ヨコナデ。体部ナデ。 内面：口縫部ヨコナデ。体部ハラケズリ。	洪褐色 ＊	外 面	内 面	水 質	長 石	石 墨	角 閃 石	チ ヤ ート	その 他	良好 ＊	口縫部 1/8 肩部 1/8

・凡例 粒径-L 1mm以上 M0.5~1mm未満 S0.5mm未満 量一〇多量 □一多い △少ない ▲一条少 ■赤一赤色酸化土

重 量 物 質 番 号	目 標 種	法量(g) 泥口 泥 器 類 ( -) 混合 物	曲 線 手 法	色 調	上:								焼 成 保 存	残 存 率	地 區 偏 差					
					外 面				内 面											
168	土師器 變F <sub>2</sub>	(13.8)	外面: □縫隙部から体部ヨコナダ。体部上半以下 に凹い褐色 内面: □縫隙部から屈曲部ヨコナダ。 以下ヘラケズリ。	に凹い褐色	■ S やや粗 質	△ S L	○ S M	△ S M	○ S M	△ S L	○ S M	△ S M	○ S M	△ S L	○ S M	△ S L	良好	□縫隙 部 1/4 体部 1/4	西区第3箇 WS.D-303	
169	土師器 變F <sub>2</sub>	(14.2)	外面: □縫隙部ヨコナダ。体部ナダ。 内面: □縫隙部ヨコナダ。体部上半以下 ヘラケズリ。	褐灰色	△ S L	○ S S	△ S S	○ S S	△ S L	○ S M	△ S M	○ S M	△ S L	○ S M	△ S L	○ S M	△ S L	良好	口縫隙 部 1/6	*
170	土師器 變F <sub>2</sub>	(33.6)	外面: □縫隙部ヨコナダ。体部外面上半 以下水平方向のハケス。 内面: □縫隙部ヨコナダ。体部ヘラケズ リ。	に凹い黄褐色	○ S やや粗 質	○ S L	○ S L	○ S L	○ S L	○ S M	○ S M	○ S M	○ S M	○ S M	○ S M	○ S M	○ S M	良好	□縫隙 部 1/2 体部上? 1/2	外面探付着
171	土師器 變F <sub>2</sub>	11.7	外面: □縫隙部から体部上半ヨコナダ。 体部上半以下乱方向のハケス。 内面: □縫隙部から屈曲部ヨコナダ。 体部ヘラケズリ。	灰白色~ に凹い褐色 灰白色	△ S やや粗 質	○ S M	△ S L	○ S M	△ S L	○ S M	△ S L	良好	□縫隙 部 寄附 部体部 2/3	側面斜面に露出						
172	土師器 變F <sub>2</sub>	(14.8)	外面: □縫隙部から体部上半ヨコナダ。 体部上半以下乱方向のハケス。 内面: □縫隙部から屈曲部ヨコナダ。 以下ヘラケズリ。	に凹い黃褐色	○ S やや粗 質	○ S M	○ S M	△ S S	○ S S	△ S S	○ S S	○ S S	○ S S	○ S S	○ S S	○ S S	○ S S	良好	□縫隙 部 1/2 体部 1/2	側面中央下に露出
173	J. 鋼器 變F <sub>2</sub>	(11.4)	外面: □縫隙部から体部上半ヨコナダ。 内面: □縫隙部から屈曲部ヨコナダ。 体部ヘラケズリ。	褐灰色	△ S L	○ S S	△ S S	○ S S	△ S L	○ S M	△ S M	○ S M	△ S L	○ S M	△ S L	○ S M	△ S L	良好	□縫隙 部 1/4	*
174	土師器 變F <sub>2</sub>	(33.6)	外面: □縫隙部ヨコナダ。 内面: □縫隙部ヨコナダ。	褐灰色	△ S やや粗 質	△ S M	○ S M	△ S M	○ S M	△ S L	○ S M	△ S M	○ S M	△ S L	○ S M	△ S L	○ S M	良好	□縫隙 部 1/4	*
175	土師器 變F <sub>2</sub>	(15.4)	外面: □縫隙部から屈曲部ヨコナダ。 内面: □縫隙部から屈曲部ヨコナダ。 以下体部ヘラケズリ。	淡灰黄色	△ S L	△ S M	○ S M	○ S M	○ S M	○ S M	○ S M	良好	□縫隙 部 1/8	*						
176	土師器 變F <sub>2</sub>	(34.6)	外面: □縫隙部から体部上半ヨコナダ。 体部上半以下乱方向のハケス。 内面: □縫隙部から屈曲部ヨコナダ。体 部ヘラケズリ。	灰白色~ に凹い褐色 に凹い褐色	○ S やや粗 質	○ S M	○ S M	○ S M	○ S M	○ S M	良好	□縫隙 部 1/2 体部 1/2	側面斜面に露出							
177	三 O 土師器 變F <sub>2</sub>	(15.1)	外面: □縫隙部ヨコナダ。体部上半左 より以下乱方向のハケス。 内面: □縫隙部ヨコナダのハケス。体部上 半斜面压、以下ヘラケズリ。	灰白色~ に凹い褐色 に凹い褐色	○ S L	○ S M	○ S M	○ S M	○ S M	○ S M	良好	□縫隙 部 1/3 体部 1/4	*							
178	三 O 土師器 變F <sub>2</sub>	(14.9)	外面: □縫隙部ヨコナダ。体部上半以下 右よりのハケス。 内面: □縫隙部ヨコナダ。体部ケズリ。 体部最大径 (21.0)	灰褐色 に凹い褐色	○ S やや粗 質	○ S M	△ S M	○ S M	○ S M	○ S M	○ S M	○ S M	良好	□縫隙 部 B寄附 部体部 1/5	外面探付着					
179	土師器 變F <sub>2</sub>	(11.5)	外面: □縫隙部ヨコナダ。体部左: ガリ のハケス後ヨコナダ。 内面: □縫隙部ヨコナダ。体部ヘラケズ リ。	に凹い褐色	△ S L	○ S S	○ S S	○ S S	○ S S	○ S M	○ S M	○ S M	○ S M	○ S M	○ S M	○ S M	○ S M	良好	□縫隙 部 1/6	*
180	OII 土師器 變F <sub>2</sub>	13.2	外面: □縫隙部ヨコナダ。体部上半以下 亂方向のハケス。 内面: □縫隙部ヨコナダ。体部上半以下 ヘラケズリ。	灰褐色	△ S M	△ S S	△ S S	○ S S	△ S S	○ S M	△ S S	○ S M	△ S S	○ S M	△ S S	○ S M	△ S S	良好	□縫隙 部 完 存	*
181	土師器 變F <sub>2</sub>	(55.0)	外面: □縫隙部ヨコナダ。体部横方向の ハケス。 内面: □縫隙部ヨコナダ。屈曲部以下ヘ ラケズリ。	淡灰褐色~ 深灰色 灰褐色	○ S やや粗 質	○ S M	○ S M	○ S M	○ S M	○ S M	良好	□縫隙 部 3/4 M部 1/3	*							
182	OII 土師器 變F <sub>2</sub>	(44.2)	外面: □縫隙部ヨコナダ。体部亂方向の ハケス。 内面: □縫隙部ヨコナダ。体部ヘラケズリ。 体部最大径 (17.8)	灰褐色 に凹い褐色	○ S やや粗 質	○ S M	○ S M	○ S M	○ S M	○ S M	良好	□縫隙 部 1/2 体部 1/2	外面探付着							
183	土師器 高杯A <sub>1</sub>	(9.7)	外面: □縫隙部ヨコナダ。体部ナダ。 内面: □縫隙部ヨコナダ。底杯部ナダ。	黄褐色 黄褐色	○ S やや粗 質	○ S L	○ S S	△ S S	○ S S	○ S L	○ S M	○ S M	○ S M	○ S M	○ S M	○ S M	○ S M	良好	杯部 1/2	*
184	土師器 高杯A <sub>1</sub>	(75.5)	外面: □縫隙部ヨコナダ。体部都合ナ ハラミガキ。 内面: □縫隙部ヨコナダ。底杯部都合ナ ハラミガキ。	に凹い褐色 淡褐色	△ S M	△ S S	△ S S	○ S S	△ S S	○ S M	△ S S	○ S M	△ S S	○ S M	△ S S	○ S M	△ S S	良好	杯部 1/4	*

・凡例 粒径一L 1mm以上 M0.5~1mm未満 S0.5mm未満 ■一〇多量 □一多い △一少ない ▲一希少 △赤一赤色酸化土

調 査 書 サ イ ズ	固 形 版 番 号	器 種	法 律 規 定 高 度 ( cm )	法 律 規 定 高 度 ( cm )	測 量 手 法		外 面 内 面	地 面 施 工						地 区 備 考			
					上	下		* 石 英 質	長 石 英 質	石 英 質	砂 英 質	角 四 石 英 質	チ ク シ 英 質	そ の 他			
					底 成 保 存	底 存 在		底 部 存 在	底 部 存 在	底 部 存 在	底 部 存 在	底 部 存 在	底 部 存 在	底 部 存 在			
185	三 〇	土師器 高杯A <sub>3</sub>	15.0	15.0	外面：口縁部ヨコナデ。口縁部中央から下段へラミガキ。杯体部ケズリの後倒ヘラミガキ。 内面：口縁部ヨコナデ。杯底部ナデ。	褐色 +	良好 良好	△ S M	△ S M	▲ S M	○ S M	△ S M	○ S M	△ S M	良好	杯底 3/4	西区第3番 WSD-303
186	-	七脚器 高杯A <sub>3</sub>	(16.6)	(16.6)	外面：口縫部から杯体部上方傾斜方向の昔なラミガキ。 内面：口縫部横方向の遅なラミガキ。 杯底部ナデ。	褐色 +	良好 良好	○ S M	○ S M	△ S M	○ S M	△ S M	○ S M	△ S M	良好	杯部 1/2	*
187	-	土師器 高杯A <sub>3</sub>	(15.4)	(15.4)	外面：口縁部ヨコナデ。杯体部下平ハラケメ。 内面：口縁部ヨコナデ。杯底部ナデ。	淡黄褐色 +	やや良 良好	○ S M	○ S M	△ S M	○ S M	△ S M	○ S M	△ S M	良好 内面とともに表面風化	杯部 1/4	*
188	-	土師器 高杯A <sub>3</sub>	(16.4)	(16.4)	外面：口縁部ヨコナデ。杯体部ハラケメ。 内面：口縁部ヨコナデ。杯底部ナデ。	褐色 +	良好 良好	△ S M	△ S M	○ S M	○ S M	△ S M	○ S M	△ S M	良好	杯部 1/2	*
189	-	土師器 高杯A <sub>3</sub>	(16.1)	(16.1)	外面：口縁部ヨコナデ。杯体部ハラケメ。 内面：口縁部ヨコナデ。杯底部ナデ。	にぶい褐色 +	良好 良好	○ S M	△ S M	▲ S M	○ S M	△ S M	○ S M	△ S M	良好	杯部 1/4	*
190	-	土師器 高杯A <sub>3</sub>	(20.3)	(20.3)	外面：口縁部ヨコナデ。 内面：口縁部ヨコナデ。	褐灰色 +	良好 良好	△ S M	○ S M	▲ S M	○ S M	△ S M	○ S M	△ S M	良好 内面とともに表面風化	杯底 1/8	*
191	三 〇	土師器 高杯A <sub>3</sub>	(17.2)	(17.2)	外面：口縫部から杯体部ヘラミガキ、枝状茎状方向のぬり痕、表面向のラミガキ。 内面：口縫部から杯底部ナデ。枝状茎状シボ付。	にぶい黄褐色 +	良好 良好	○ S M	○ S M	△ S M	○ S M	△ S M	○ S M	△ S M	良好	杯部 1/2 柱狀根 充満	*
192	三 〇	七脚器 高杯A <sub>3</sub>	16.4 12.4 脚部径12.6 脚部高8.1	16.4 12.4 脚部径12.6 脚部高8.1	外面：口縁部ヨコナデ。杯体部ナデ。 内面：口縫部ヨコナデ。杯底部ナデ。 枝状茎状ヘラミガキ。	褐色 +	良好 良好	△ S M	○ S M	▲ S M	○ S M	△ S M	○ S M	△ S M	良好	杯部 3/4 柱狀根 充満	■に付せられていなかったものに付せられたもの
193	三 〇	土師器 高杯A <sub>3</sub>	15.9	15.9	外面：口縁部ヨコナデ。杯体部ナデ。枝状茎状方向のぬり痕、表面向のラミガキ。 内面：口縫部シボ付。杯底部ナデ。枝状茎状シボ付。	褐色 +	良好 良好	○ S M	○ S M	○ S M	○ S M	○ S M	○ S M	○ S M	良好 内面表面風化 剥離	杯部 1/2 杯底部 充満	*
194	-	土師器 高杯	蓄部深(11.3) 蓄部高6.0	蓄部深(11.3) 蓄部高6.0	外面：枝状茎状方向の剥取りの後高いナメ。 内面：枝状茎状シボ付。	浅黃褐色 +	やや良 良好	△ S M	○ S M	△ S M	○ S M	△ S M	○ S M	△ S M	良好	枝状茎 蓄部 1/6充 満	*
195	-	土師器 高杯	蓄部深(12.7) 蓄部高7.0	蓄部深(12.7) 蓄部高7.0	外面：枝状茎状方向の剥取りの後ナメ。 内面：枝状茎シボ付。	深褐灰色 黃褐色	良好 良好	△ S M	△ S M	△ S M	○ S M	△ S M	○ S M	△ S M	良好	枝状茎 蓄部 1/2充 満	*
196	-	上加器 高杯	蓄部深(12.7) 蓄部高7.5	蓄部深(12.7) 蓄部高7.5	外面：枝状茎部方向の面取りの後ナメ。 内面：枝状茎シボ付。	淡黃褐色 +	良好 良好	△ S M	○ S M	△ S M	○ S M	△ S M	○ S M	△ S M	良好	枝状茎 蓄部 1/6充 満	*
197	-	土師器 高杯A <sub>3</sub>	(16.0)	(16.0)	外面：口縁部ヨコナデ。杯体部低いハケメの後ナメ。 内面：口縁部ヨコナデ。杯底部ナデ。	灰黄色 +	やや良 良好	△ S M	○ S M	△ S M	○ S M	△ S M	○ S M	△ S M	良好	杯部 1/3	*
198	三 〇	土師器 高杯A <sub>3</sub>	(15.6)	(15.6)	外面：杯底部から杯体部方向のハケメ後。 内面：杯底部ヨコナデ。杯底部ナデ。 枝状茎ナデ。	褐灰色 +	やや良 良好	△ S M	○ S M	△ S M	○ S M	△ S M	○ S M	△ S M	良好	杯部 1/2 杯底部 充満	*
199	-	土師器 高杯A <sub>3</sub>	15.8 -	15.8	外面：口縁部から杯体部ヨコナデ。 内面：口縁部ヨコナデ。杯底部ナデ。	褐灰色 +	やや良 良好	△ S M	○ S M	△ S M	○ S M	△ S M	○ S M	△ S M	良好	杯部 1/2	*
200	三 〇	土師器 高杯A <sub>3</sub>	15.8 11.3 脚部径10.9 脚部高6.5	15.8 11.3 脚部径10.9 脚部高6.5	外面：口縁部ヨコナデ。杯体部ナデ。 内面：口縁部ヨコナデ。杯底部ナデ。 枝状茎ナデ。	灰白色 +	良好 良好	△ S M	○ S M	△ S M	○ S M	△ S M	○ S M	△ S M	良好	杯部 4/5 柱狀根 充満	*
201	-	土師器 高杯A <sub>3</sub>	(14.0)	(14.0)	外面：口縫部方向の明顯なハケ。 内面：口縫部ヨコナデ。 枝状茎上半ヨコナデ。	灰白色 +	にぶい黃褐色 良好	△ S M	○ S M	△ S M	○ S M	△ S M	○ S M	△ S M	良好	杯部 1/5	*

## II 東部遺跡第37次調査 (T G91-37)

・凡例 粒径一L 1mm以上 M0.5~1mm未満 S0.5mm未満 量一〇多量 □一多い △一少い ▲一希少 半赤一赤色酸化土

遺物番号	固版番号	種類	法量(m) 目口 登録 此後 (後元號)	調整・干法		色調	粒度	土	焼成 保存	焼存率	地区 備考		
				外面	内面		外面	長石 質	右 英 母	角 閃 右			
202		土器器 高杯A,	(16.0) — — — —	外観：口縁部左上にがりのハケメ後、ヨコナダ。 内面：口縁部鉛削状のハケメ後、ヨコナダ。	褐色 △好	○ S M	△ S M	○ S	△ S M	○ S	良好	杯部 1/4	西区第3面 WSD-303
203	三	土器器 高杯A,	15.5 — — —	外観：口縁部から杯体部ヨコナダ。 内面：口縁部ヨコナダ。杯体部ナダ。	淡黃褐色 △	やや粗 ○ S M	△ S M	○ S	△ S M	▲ S	良好 外観一部器皿風化	杯部 1/2	*
204		土器器 高杯A,	(15.7) — — —	外観：口縁部ヨコナダ。 内面：口縁部ヨコナダ。	淡黃褐色 △	粗 ○ S L	△ S L	○ S	△ S M	▲ S	良好	杯部 1/4	*
205		土器器 高杯A,	15.7 — — —	外観：杯底部から口縁部斜め方向のハケメ後、口縁部のみヨコナダ。 内面：口縁部ヨコハケ。杯底部ナダ。	に赤い褐色 △	やや粗 ○ S M	△ S L	○ S	△ S M	▲ L	良好	杯部 1/2	*
206	三	土器器 高杯A,	(15.1) 13.1 海部径 8.5	外観：口縁部左上にがりのハケメ後、ヨコナダ。 内面：口縁部左上ヨコハケメ後、ヨコナダ。 海部径 8.5	褐色 △	粗 ○ S M	△ S L	○ S	△ S M	▲ L	良好 口縫部 1/3部分 剥離	杯部 1/2	*
207		土器器 高杯A,	(20.1) — — —	外観：口縁部ヨコナダ。杯体部斜め方向のハケメ後、口縁部ナダ。 内面：口縁部ヨコナダ。杯体部ナダ。	灰褐色 △	やや粗 ○ S	△ S M	○ S	△ S M	○ S	良好	杯部 1/3	*
208		土器器 高杯A,	(21.7) — —	外観：口縁部ヨコナダ。 内面：口縁部ヨコナダ。	淡黃褐色 △	小粗 △ S M	△ S L	○ S	△ S M	○ S	良好 内面とともに 器皿の一部風化	杯部 1/6	器皿化被土を スリップ
209		土器器 高杯A,	(19.6) — —	外観：口縁部ヨコナダ。 内面：口縁部ヨコナダ。	褐色 △	やや粗 ○ S	△ S M	○ S	△ S M	○ S	良好 内面器皿風化	杯部 1/8	*
210		土器器 高杯A,	(18.2) — —	外観：口縁部から杯体部ヨコナダ。杯部下半指痕圧印。 内面：口縁部から杯体部ヨコナダ。	灰褐色 △	粗 ○ S M	△ S M	○ S	△ S M	○ S	良好	杯部 1/4	*
211		土器器 高杯A	— 海部径11.2	外観：柱状部緩便方向の曲面り後ナダ。 内面：柱状部ナダ。	褐褐色 △	粗 △ S M	△ S L	○ S	△ S M	△ L	良好 脚部 ほぼ光 り	脚部 1/2	*
212	三	土器器 高杯A	— 海部径11.8	外観：脚部ナダ。 内面：柱状部ヘラケズリ。脚部指痕圧印後ナダ。	淡黃褐色 △	やや粗 △ S L	△ S L	○ S	△ S M	△ L	良好 外観器皿風化	柱状部 保存 4/5	*
213	三	土器器 高杯A	— 海部径10.6	外観：脚部ナダ。 内面：柱状部ケズリ。脚部ハケメ。	褐色 △	粗 △ S M	△ S L	○ S	△ S M	△ L	良好	脚部 完存	透孔2個
214	三	土器器 髙台C	14.7 5.8 海部径15.6	外観：受部ヨコナダ。脚部ヨコナダ。 内面：受部から屈曲部ヨコナダ。脚部ヘラケズリ後ナダ。脚部端部ヨコナダ。	褐色 △	やや粗 △ S M	△ S L	○ S	△ S M	○ S	良好	ほぼ光 り	*
215	三	土器器 内付鉢	— 台部径7.8 台部高3.2	外観：杯部から体部斜軸ナダ。体部自然折れナダ。 内面：肩部から体部斜軸ナダ。	淡黃褐色～ 褐色 △	粗 △ S L	△ S L	○ S	△ S M	○ S	良好 脚部器皿風化	台部 2/3 焼存	*
217		張出器 壺	体部高1.7 (7.6)	外観：底部から体部斜軸ナダ。体部自然折れナダ。 内面：肩部から体部斜軸ナダ。	灰白色 △	粗 △ S L	△ S L	○ S	△ S M	○ S	堅致	台部 1/3	西区第9面
218		張出器 壺蓋	(15.4) —	外観：天井部から口縁部斜軸ナダ。 内面：天井部から口縁部斜軸ナダ。	青灰褐色 △	粗 △ S M	△ S L	○ S	△ S M	○ S	堅致	1/6	*
219		張出器 壺蓋	(15.6) —	外観：天井部半ナダ。口縁部斜軸ナダ。 内面：天井部半ナダ。	灰色 △	粗 △ S M	△ S L	○ S	△ S M	○ S	堅致	1/6	*

・凡例 粒径-L 1mm以上 M0.5~1mm未満 S0.5mm未満 ■一〇多量 □一多い △少ない ▲一番少 △赤一赤色酸化土

逐 物 品 番 号	名 称 種 類	法量(m) [1 高 度 ( 深 度 ) 粒度組	箇 数 ・ 手 法		色 調 ・ 上 下					保 成 保 存	残 存 率	地 区 備 考		
			外 面	内 面	赤	黄	石 英	墨	角 閃	チ ヤ ート	その 他			
220	羽毛粉 伴身	- 高台伴(10.6) 高台(0.4)	外観：体部から高内部凹板ナデ。底部 外観ナデ。 内観：体部から底部凹板ナデ。	灰色 △ ○	精良 △ S △ S	△ S △ S	△ S △ S	△ S △ S	△ S △ S	△ S △ S	△ S △ S	堅致	底部 1/4	西区第9層
221	羽毛粉 伴	(13.6) -	外観：口縫部同板ナデ。体部ナデ。 内観：口縫部から体部凹板ナデ。	灰色 △ ○	良好 △ S △ S	△ S △ S	△ S △ S	△ S △ S	△ S △ S	△ S △ S	△ S △ S	堅致	口縫部 1/8	*
222	土脚器 杯	11.0 3.6	外観：口縫部は強いヨコナデにより明 瞭な段を生ずる。底部ナデ。 内観：口縫部ヨコナデ。底部ナデ。	橙色 △ ○	やや粗 △ S △ S	△ S △ S	△ S △ S	△ S △ S	△ S △ S	△ S △ S	△ S △ S	良好	1/2	*
223	上脚器 小里	(9.2) (1.5) -	外観：口縫部ヨコナデ。体部指揮圧 成形後ナデ。 内観：口縫部から体部ヨコナデ。底部 ナデ。	乳白色 △ ○	精良 △ S △ S	△ S △ S	△ S △ S	△ S △ S	△ S △ S	△ S △ S	△ S △ S	良好	1/2	*
224	土脚器 土板	(26.0) 鉛性(30.2)	外観：口縫部から鈍部ヨコナデ。体部 上平ナデ。 内観：口縫部ヨコナデ。体部上平指 壓成形ヨコナデ。	赤褐色 △ ○	粗 △ S △ S	△ S △ S	△ S △ S	△ S △ S	△ S △ S	△ S △ S	△ S △ S	良好	口縫部 1/8 鉛部 1/6	*
225	羽毛粉 伴	(26.4) -	外観：口縫部から体部ヨコナデ。 内観：口縫部ヨコナデ。体部弱いナデ。	灰色 △ ○	良好 △ S △ S	△ S △ S	△ S △ S	△ S △ S	△ S △ S	△ S △ S	△ S △ S	堅致	口縫部 1/12	口縫部重ね底板
226	瓦質 斧	(29.0) -	外観：口縫部ヨコナデ。体部部分的に ハラスメを行った模様は鋸歯状。 内観：口縫部ヨコナデ。体部横方向の ハラスメ。折縫貝風のハケナ。	灰色 △ ○	良好 △ S △ S	△ S △ S	△ S △ S	△ S △ S	△ S △ S	△ S △ S	△ S △ S	良好	口縫部 1/12	外表面部油膜
227	瓦質 斧	(29.0) -	外観：口縫部ヨコナデ。休部表面風化 内観：口縫部ヨコナデ。体部左上がり の擦れ凹痕。	灰色 △ ○	良好 △ S △ S	△ S △ S	△ S △ S	△ S △ S	△ S △ S	△ S △ S	△ S △ S	良好 外表面部油膜 風化	口縫部 1/12	*
228	瓦質 斧	(26.8) -	外観：口縫部ヨコナデ。体部横方向の ケズリ。 内観：口縫部ヨコナデ。体部第二次火熱による 風化の為、底板不規則。	淡灰色 △ ○	△ S △ S	△ S △ S	△ S △ S	△ S △ S	△ S △ S	△ S △ S	△ S △ S	良好 二次火熱によ る風化	口縫部 1/8	*
229	瓦質 足臺	(16.0) 鉛径(21.8)	外観：口縫部から脚部裏面ヨコナデ。 内観：口縫部から体部ヨコナデ。	淡褐色 △ ○	やや粗 △ S △ S	△ S △ S	△ S △ S	△ S △ S	△ S △ S	△ S △ S	△ S △ S	良好	口縫部 1/16 鉛部 1/8	脚部裏面以下削付部
230	瓦質 足臺	(22.4) 鉛径(26.2)	外観：口縫部から体部上平ヨコナデ。 内観：口縫部から体部ヨコナデ。	灰色 △ ○	やや粗 △ S △ S	△ S △ S	△ S △ S	△ S △ S	△ S △ S	△ S △ S	△ S △ S	良好	口縫部 1/20 鉛部 1/12	*
231	土脚器 土板	(27.0) 鉛径(32.0)	外観：口縫部から鈍部裏面ヨコナデ。 体部ハラスメ。 内観：口縫部(左)はハラスメの後ヨ コナデ、以下ナダ。	灰白色 △ ○	良好 △ S △ S	△ S △ S	△ S △ S	△ S △ S	△ S △ S	△ S △ S	△ S △ S	良好	口縫部 1/12 鉛部 1/12	左記裏面以下削付部
232	瓦質 土板	(16.6) 鉛径(23.9)	外観：口縫部から(脚部上端までヨコナ デ。)脚部裏面ナデ。 内観：口縫部ナデ。	灰色 △ ○	△ S △ S	△ S △ S	△ S △ S	△ S △ S	△ S △ S	△ S △ S	△ S △ S	良好	口縫部 1/20 鉛部 1/12	*
233	瓦質 上蓋	(21.4) 鉛径(27.2)	外観：口縫部から脚部裏面ヨコナデ。 内観：口縫部ヨコナデ。脚部ヘラナデ 後ヨコナデ。	褐色 △ ○	やや粗 △ S △ S	△ S △ S	△ S △ S	△ S △ S	△ S △ S	△ S △ S	△ S △ S	良好	口縫部 1/20 鉛部 1/10	*
234	瓦質 上蓋	(26.2) -	外観：口縫部ヨコナデ。体部横方向の ハラスメ。 内観：口縫部から体部ヨコナデ。	黒灰色 △ ○	良好 △ S △ S	△ S △ S	△ S △ S	△ S △ S	△ S △ S	△ S △ S	△ S △ S	良好	口縫部 1/8	体部外壁剥落付着
235	瓦質 火鉢	(30.6) -	外観：体部凹板ヨコナデ。凸面に花文のスランブ。 内観：口縫部から体部ヨコナデ。	褐色 △ ○	△ S △ S	△ S △ S	△ S △ S	△ S △ S	△ S △ S	△ S △ S	△ S △ S	良好	口縫部 1/9	骨董火鉢 反素有病ナシ
236	瓦質 青砥刷	(15.0) -	外観：口縫部凹板ヨコナデ。体部に 又瘦紋。	褐色-淡灰色 △ ○	△ S △ S	△ S △ S	△ S △ S	△ S △ S	△ S △ S	△ S △ S	△ S △ S	堅致	口縫部 1/8	*
237	三 陶器	(10.8) 7.4 高台伴(4.3) 高台(0.8)	外観：口縫部凹板ヨコナデ。凸面に 花文とスランブ。 内観：口縫部から体部凹板ナデ。底部 は中央部から左巻きのナデ。	褐色-淡灰色 △ ○	△ S △ S	△ S △ S	△ S △ S	△ S △ S	△ S △ S	△ S △ S	△ S △ S	堅致	1/2	西区第9層 唐津焼

## 第4章 まとめ

本調査を実施した東郷遺跡範囲の西部地区は、市役所を中心とする市の中核部に位置し、更に古くから市街地を形成していたこともあり、新たに開発された近鉄八尾駅前を中心とした遺跡範囲の北部に比して考古学的な知見が少ない地域であった。調査では、両調査区共に既往建物の建築により深層におよぶ搅乱を受けていたにも拘わらず、古墳時代前期(布留式期中相～新相)、古墳時代後半、飛鳥時代～奈良時代、平安時代、近世に至る遺構・遺物が重層的に検出され、東郷遺跡西部における遺跡内の動態推移を推定するうえで多くの示唆に富む資料を提供する結果となった。以下、検出した時期毎に概観してみる。

### 古墳時代前期(布留式期中相～新相)

西区の第3面で当該期に比定されるW S D-302、W S D-303が検出されている。なかでも、W S D-303の南部では比較的良好な土器類が集中して多量に出土している。しかしながら、遺構構築面上の上層を構成する第9層においては、明瞭な遺物包含層が形成されていないことや、W S D-303出土遺物に時期幅が認められることから、当調査地付近が集落内の中心から隔絶した位置にあって土器廃棄場的な役割を果たした遺構であったと考えられる。

東郷遺跡内では、昭和56年以降、遺跡範囲の北部を中心として数多くの発掘調査が実施されており、八尾市域の遺跡の中でも古墳時代初頭(庄内式期)～古墳時代前期(布留式期)の集落の変遷が比較的明らかな遺跡の一つである。今回の調査地である遺跡範囲の西部では、北部に比して調査件数が少なく、南に隣接する成法寺遺跡北部で実施された調査成果との整合から当該期の集落の拡がりが推定してきた。しかしながら、当該時期である古墳時代前期(布留式期中相～新相)の資料については、東郷遺跡・成法寺遺跡内での検出例が少なく、東郷遺跡内では調査区の北西約400mで行われた東郷遺跡第46次調査(T G94-46)、成法寺遺跡内では調査区の南東約350mで行われた成法寺遺跡7次調査(S H91-7)<sup>註1</sup>で確認されている程度で不明な点が多い。

### 古墳時代後期後半

東区の第2面で、自然河川(E N R-201)に沿った形で構築された水田2筆(水田201・水田202)を検出した。本調査では当該期の遺構・遺物は検出されていないが、南西250～300mに位置する成法寺遺跡内の昭和56年度八尾市教育委員会調査や成法寺遺跡第5次調査(S H89-5)、成法寺遺跡第9次調査(S H91-9)<sup>註2</sup>で当該期の居住域が検出されており、これらの集団の生産域の一部であった可能性が高い。

### 飛鳥時代～奈良時代

飛鳥時代～奈良時代の遺構としては、東区第1面で水田遺構12筆(水田101～水田112)〔7世紀中葉〕と水田遺構の東部を画して南東から北西に流下する自然河川1条(E N R-101)〔8世紀中葉まで機能〕がある。自然河川を検出した東区東部から約250m地点の東本町2丁目の光明寺裏付近では、東郷遺跡の発見の契機になった墨書人面土器が昭和46年6月に水道管敷設工事中に砂層中から不時発見されており、墨書人面土器の持つ性格と相俟って当該期の河川がこの付近に存在したことが想定されていた。平成5年～平成7年度に、東郷遺跡および南接する成法寺遺跡で大阪府教育委員会が実施した府道平野中高安線建設工事に伴う調査では、当該期の流路幅が明<sup>註3</sup><sup>註4</sup><sup>註5</sup><sup>註6</sup><sup>註7</sup>

確にされた他、河川内から数多くの墨書き人面土器が出土した。これらの調査成果や、国土地理院による『土地条件図』等をもとに作成したのが第53図である。この図に従えば自然河川の西部の成法寺遺跡第1次調査(S H82-1)・第2次調査(S H83-2)・第3次調査(S H87-3)・第7次調査(S H91-7)・第8次調査(S H91-8)一帯の約200mの範囲(A地点)で居住域に関連した遺構群と本調査地東区(B地点)で水田遺構が検出されている。時期的には、飛鳥II～平城宮Vにおよぶ集落の存続が確認されている。一方、東岸においては、東郷遺跡内の桜ヶ丘2丁目に飛鳥時代後期創建の東郷庵寺<sup>註13</sup>が存在している(C地点)。この寺院に関連する集落が、南約200mの若草町で平成9年～平成10年に(財)大阪府文化財調査研究センターにより実施された小阪合遺跡第1次調査(D地点)で検出されており、居住域を構成する遺構群の他、銅製の巡方や和同開珎をはじめとする銭貨が多量に出土している。さらに、A地点と自然河川を挟んで対峙する位置にある成法寺遺跡第12次調査(S H93-12)(E地点)では、奈良時代後期の居住域が検出されており、井戸からは墨書き人面土器が1点出土している。以上のように、この付近の当該期の居住域は、この自然河川を挟んで少なくともA・D・Eの3地点で展開したことが推定され、本調査の東区で検出した水田遺構(B地点)は、A地点の居住域に伴う飛鳥時代後半の生産域であった可能性が高い。また、この付近の調査で数多く検出されている奈良時代後半の墨書き人面土器については、当時の精神生活の一端を垣間見るもので、既存資料例が示すように大半が古代の先進地域である宮内や官衙の周辺から出土することが指摘されている。本例においても、小阪合遺跡第1次調査が示すように、官衙的な役所の存在が想定されるほか、この自然河川の上流側にあたる「八尾木・東弓削」地区においては、「続日本記」神護景雲三年(769)十月三十日に「詔以\_由義宮\_為\_西京\_。河内國為\_河内職\_....」と記されるように、「由義宮」とされる「西京」の存在が想定され、これらとの関わりが大きかったと推定される。

#### 平安時代

西区においては面的に捉えられたものの、東区においては当該時期面に及ぶ搅乱が顕著であり、一部で井戸遺構の下部を検出したのみである。検出した遺構の帰属時期では、平安時代前期後半(10世紀前半～中頃)と後期(11世紀後半～12世紀中頃)があるが、両地区ともに当該期の遺物を含む包含層が形成されていない事実は比較的短期間の集落であった可能性が考えられる。前者の平安時代前期後半の遺構については、西区で検出されている。既往調査においては、当該期の集落は検出されていないが、北約400m地点には式内社の栗栖神社(現八尾神社)が鎮座している他、成立時期は中世に下るもの調査地に北接する地点が、河内街道、立石嶺道、信貴越道の起点ないしは合流点となっており、これらの前身となった道路に沿って成立した集落と推定される。後者の平安時代後期の遺構は西区および東区の東部で検出されている。後期の集落についても、栗栖神社(現八尾神社)の北で行われた東郷遺跡第34次調査(T G90-34)で検出されており前代と同様に推移したことが想定される。また、西区第2面WS D-201石垣内出土屋瓦や本書掲載の故沢井浩三氏収集の屋瓦拓影(P-20)にみるように、平安時代後期には常光寺建立以前に常光寺の前身となった寺院建物が栗栖神社(現八尾神社)の南部一帯に存在した可能性が高くなった。

#### 近世

西区の第1面・第2面で近世初頭以降の遺構を検出している。西区については、本調査では便宜上東郷遺跡としたものの、本来は八尾寺内町遺跡として認識されているもので、西区が八尾寺<sup>註14</sup>